

の平。

熊本縣 河内。平島。杖立。
鹿兒島縣 鹿兒島。柴立。海門。

○食鹽泉

秋田縣 秋田。

新潟縣 廣田。金倉。

富山縣 鹽出。須川。

○アルカリ性食鹽泉

静岡縣 志太。

島根縣 石原。

○炭酸含有アルカリ性食鹽泉

群馬縣 磯部。

○土類含有アルカリ性食鹽泉

新潟縣 引越。鹽澤。寺泊。

○土類及石膏含有アルカリ性食鹽泉

島根縣 湯抱。

○ブローム、ヨード及硼酸含有アルカリ性食鹽泉

北海道 豊富。

山形縣 最上。

○炭酸芒硝ブロームヨード及硼酸含有アルカリ性食鹽泉

群馬縣 八鹽。

○芒硝土類及硼酸含有食鹽泉

山梨縣 増富。

○鹽化土類含有食鹽泉

北海道 登別。幾春別。鶴の湯。

山形縣 滑川。小野川。赤湯。湯野濱。

神奈川縣 鶴巻。

新潟縣 的場山。彌彦。見掛。松之山。

石川縣 和倉。

静岡縣 下加茂。熱海。

○鹽化土類土類石膏及ブローム含有食鹽泉

北海道 湯の川。

○鹽化土類土類及硼酸含有食鹽泉

北海道 二股ラヂオ。

○鹽化土類及石膏含有食鹽泉

石川縣 片山津。

福井縣 蘆原。舟津。二面。

○鹽化土類石膏ブローム及ヨード含有食鹽泉

静岡縣 熱海。

○鹽化土類石膏及綠礬含有食鹽泉

長崎縣 湯の元。

○鹽化土類及ブローム含有食鹽泉

兵庫縣 城崎。

○鹽化土類ブロームヨード及硼酸含有食鹽泉

北海道 若菜邊。

○鹽化土類ブローム及硼酸含有食鹽泉

滋賀縣 鹽野。

鳥取縣 皆生。

岡山縣 鷺の湯。

廣島縣 今津陰陽カルシウム。

徳島縣 日和佐。

長崎縣 小濱。

鹿兒島縣 指宿。山川。

○鹽化土類及土類含有食鹽泉

青森縣 湯段。湯の澤成彌。

秋田縣 湯本。

大阪府 錦溪。

山口縣 川棚。

○炭酸及鹽化土類含有苦味性食鹽泉

鹿兒島縣 阿久根。

○鹽化土類土類石膏及硼酸含有食鹽泉

北海道 瑠邊斯。

日本に於ける泉質別けの温泉所在

宮城縣 秋保。

○鹽化土類及硼酸含有食鹽泉

靜岡縣 下賀茂。

○鹽化土類及炭酸鐵含有食鹽泉

富山縣 鹽谷*。

兵庫縣 有馬。

○鹽化土類明礬及綠礬含有食鹽泉

長崎縣 湯の元。

○土類含有食鹽泉

北海道 根崎。濁川。熊石。貝取澗。

青森縣 笹内。瀬の川目*。

福島縣 熱鹽。日中。

群馬縣 梨木*。

新潟縣 八木*。

山梨縣 増富*。

鹿兒島縣 古里*。

○炭酸含有食鹽泉

島根縣 池田*。

鹿兒島縣 湯之尾。鵜泊。

○土類ブローム及ヨード含有食鹽泉

北海道 石倉。

○苦味性食鹽泉

富山縣 生地第一*。

○ブローム含有食鹽泉

兵庫縣 城崎。

○ブローム及ヨード含有食鹽泉

靜岡縣 熱海。

○硼酸含有食鹽泉

長野縣 初谷*。小澁*。

○炭酸鐵含有食鹽泉

秋田縣 矢立*。

○綠礬含有食鹽泉

群馬縣 旭*。

○硫化水素含有食鹽泉

秋田縣 日景。

(六) 苦味泉

○弱苦味泉

北海道 鑑別。

青森縣 淺蟲。田代。板留。

岩手縣 臺。志戸平。

宮城縣 新車場。

福島縣 土湯。

栃木縣 板室。

群馬縣 入山。

長野縣 地獄谷。下諏訪。野澤。

靜岡縣 船原。

新潟縣 赤倉。

島根縣 立久惠藥王院*。

日本に於ける泉質別けの温泉所在

熊本縣 栃木。

○芒硝性苦味泉

青森縣 田代。湯の澤。

岩手縣 湯本。

宮城縣 河原湯。

福島縣 飯坂。

栃木縣 鹽原大綱。

群馬縣 湯宿。湯島新巻。

石川縣 山代。

靜岡縣 船原。吉原。

鳥取縣 岩井。勝見。

島根縣 玉造。湯町。海潮。

○石膏含有芒硝性苦味泉

山形縣 湯田川。

福島縣 東山。

○食鹽含有芒硝性苦味泉

宮城縣 鎌先。元車湯。
新潟縣 鷹の巢。

○食鹽及石膏含有芒硝性苦味泉

新潟縣 三川。

岩手縣 澤曲。

○食鹽及土類含有芒硝性苦味泉

宮城縣 鎌先。

鳥取縣 吉方。末廣。寺町。

○食鹽土類及硼酸含有芒硝性苦味泉

宮城縣 鎌先。

○食鹽及硫化水素含有芒硝性苦味泉

宮城縣 鳴子。

○土類含有芒硝性苦味泉

青森縣 田代。

石川縣 瀬領。

岐阜縣 濁河。

○石膏性苦味泉

北海道 新見。

青森縣 淺蟲。酸ヶ湯。田代。馬門。

山形縣 白布高湯。天童。赤倉。

宮城縣 作並。

福島縣 芦の牧。水谷。

群馬縣 鳩の湯。入山。霧積。水上。笹の

湯。湯島。法師。

神奈川縣 仙石原。

石川縣 山中。

静岡縣 熱海。伊豆山。土肥。

島根縣 鷺湯。

○芒硝含有石膏性苦味泉

青森縣 板留。

栃木縣 那須郭公。

○食鹽含有石膏性苦味泉

島根縣 溫泉津。

○食鹽プローム及ヨード含有石膏性苦味泉

群馬縣 大室。

○土類含有石膏性苦味泉

青森縣 津町。

群馬縣 伊香保。

○硫化水素含有石膏性苦味泉

北海道 山田。岩尾別。

群馬縣 川原湯。

静岡縣 伊豆山。

(七) 炭酸鐵泉

○炭酸鐵泉

北海道 鷺泊。七飯。

青森縣 藥研。赤川。

新潟縣 松ヶ崎濱。上湯谷。

富山縣 魚津ラヂウム。宮崎。白鷺。

青森縣 藏館。大鱈。

秋田縣 龜の湯。

山形縣 小玉川。上の湯。瀬見。

群馬縣 鳩の湯。利根。

神奈川縣 湯河原。

石川縣 湯涌。

長野縣 湯田中。上林。

静岡縣 熱海。伊豆山。

○鹽化土類含有石膏性苦味泉

富山縣 生地。

○食鹽及鹽化土類及土類含有石膏性苦味泉

新潟縣 赤湯。

○食鹽及土類含有石膏性苦味泉

岩手縣 夏油。

島根縣 小濱。

○食鹽土類硼酸及芒硝含有石膏性苦味泉

日本に於ける泉質別けの温泉所在

温泉 知識

- 滋賀縣 須賀谷* 琵琶湖*
- 京都府 笠置*
- 兵庫縣 越木岩*
- 島根縣 小田*
- 大分縣 別府不老。別府竹屋。藥師。別府海岸砂場。鐵輪。柴石。
- 長崎縣 丸田。田の浦*
- 炭酸含有炭酸鐵泉
 - 長野縣 松原*
 - 奈良縣 吉野*
 - 兵庫縣 國領*
 - 熊本縣 金桁*
- 土類含有炭酸鐵泉
 - 群馬縣 伊香保。
- 炭酸及土類含有炭酸鐵泉
 - 和歌山縣 紀見*

- 土類及食鹽含有炭酸鐵泉
 - 島根縣 小屋原。松ヶ平*
 - 熊本縣 赤瀬*
 - 鹿兒島縣 有村。副田。
- 炭酸土類食鹽及石膏含有炭酸鐵泉
 - 鹿兒島縣 諏訪。
- アルカリ性炭酸鐵泉
 - 富山縣 境鐵*
 - 島根縣 乙見湯*
- 炭酸及食鹽含有アルカリ性炭酸鐵泉
 - 兵庫縣 壽*
- 食鹽及土類含有アルカリ性炭酸鐵泉
 - 長野縣 加賀井。
 - 島根縣 鹽ヶ口*
- 食鹽含有炭酸鐵泉
 - 北海道 紅葉谷。

秋田縣 鶴の湯。

新潟縣 關。

石川縣 中宮。白山。

○ 炭酸及食鹽含有炭酸鐵泉

山形縣 朝日*

兵庫縣 寶塚*

○ 鹽化土類及食鹽含有炭酸泉

鹿兒島縣 指宿。二月田。

○ 鹽化土類食鹽明礬含有炭酸泉

富山縣 春日*

○ 硫化水素含有炭酸鐵泉

富山縣 安養寺*

○ 硫化水素及綠礬含有炭酸鐵泉

鹿兒島縣 栗野岳。

(八) 綠礬泉

○ 綠礬泉

日本に於ける泉質別けの温泉所在

秋田縣 泥湯。

福島縣 嶽。

群馬縣 川中。

新潟縣 蓮華。

熊本縣 地獄。

○ 食鹽含有綠礬泉

北海道 知内。

○ 食鹽及鹽化土類含有綠礬泉

鹿兒島縣 指宿。

○ 芒硝及石膏含有綠礬泉

岩手縣 七瀧。

○ 石膏含有綠礬泉

兵庫縣 田代*

鳥取縣 不老*

○ 石膏及硫化水素含有綠礬泉

神奈川縣 強羅。

- 硫化水素含有緑礬泉
山形縣 姥湯。
- 大分縣 上の田白湯。
- 熊本縣 湯出。

○ 明礬綠礬泉

- 福島縣 微温湯。
- 長野縣 入山邊*
- 島根縣 清水* 多田*

(九) 明礬泉

- 土類食鹽及石膏含有明礬泉
大分縣 七里田。
- 硫化水素含有明礬泉
神奈川縣 湯の花澤。

(十) 酸性泉

- 酸性泉
北海道 川湯。

- 青森縣 酸ヶ湯。
- 群馬縣 草津。
- 長崎縣 雲仙。
- 熊本縣 湯の谷。

○ 食鹽含有酸性泉

- 青森縣 宇曾根山。
- 硫化水素含有酸性泉
秋田縣 澁黒。

○ 酸性綠礬泉

- 宮城縣 鳴子。
- 群馬縣 萬座。
- 長野縣 澁。
- 長崎縣 雲仙。

○ 酸性綠礬泉

- 北海道 登別。
- 神奈川縣 小涌谷。
- 長野縣 大久保。矢坪*

- 大分縣 鐵輪。
- 熊本縣 地獄。

○ 食鹽含有酸性綠礬泉

- 大分縣 龜川。
- 食鹽及芒硝含有酸性綠礬
大分縣 鐵輪。

○ 食鹽及鹽化土類含有酸性綠礬泉

- 青森縣 下風呂。
- 食鹽及硼酸含有酸性綠礬泉
青森縣 宇曾根山。

○ 食鹽硼酸及硫化水素含有酸性綠礬泉

- 青森縣 宇曾根山。下風呂。
- コロイド鐵含有酸性綠礬泉
宮城縣 門壽*

○ 硫化水素含有酸性綠礬泉

- 青森縣 嶽。

日本に於ける泉質別けの温泉所在

- 大分縣 塚原。
- 長崎縣 雲仙。

○ 酸性明礬綠礬泉

- 秋田縣 澁黒。
- 福島縣 土湯。
- 群馬縣 草津。
- 神奈川縣 湯の花澤。

○ 食鹽含有酸性明礬綠礬泉

- 大分縣 明礬。
- 岩手縣 須川。
- 芒硝及硫化水素含有酸性明礬綠礬泉
宮城縣 鳴子。

○ 石膏含有酸性明礬綠礬泉

- 福島縣 微温湯。
- 石膏及硫化水素含有酸性明礬綠礬泉
福島縣 中の澤。

○ 石膏及硫化水素含有酸性明礬綠礬泉

- 福島縣 中の澤。

○鹽化土類含有酸性明礬綠礬泉
群馬縣 草津。

○硫化水素含有酸性明礬綠礬泉
山形縣 高湯。

群馬縣 草津。

神奈川縣 湯の花澤。

○砒素含有酸性明礬綠礬泉
群馬縣 萬座。

山梨縣 金峰*。

島根縣 大谷*。

○硫化水素含有酸性明礬泉
福島縣 信夫高湯。

栃木縣 那須湯元。

○砒素含有酸性明礬泉
群馬縣 萬座。

(十一) 硫 黃 泉

○單純硫黃泉

宮城縣 中山平。

群馬縣 大楊。

○單純硫化水素泉

北海道 磯谷。電雷。

青森縣 猿倉。

岩手縣 繫。臺。花卷。鉛。西鉛。

秋田縣 柚。澁黒。

山形縣 松嶺*。

宮城縣 川渡。中山平。

栃木縣 日光湯本。

神奈川縣 蘆の湯。

新潟縣 西谷*。妙高。赤倉。燕。蟲生*。

富山縣 立山。

石川縣 栗津。

長野縣 野澤。七味。別所。戸倉。旭*。

和歌山縣 勝浦外の湯。椿*。周余見*。

岡山縣 鬼ヶ嶽。

香川縣 鹽の江*。

大分縣 天ヶ瀬。

鹿兒島縣 鰻。伊作。市來。霧島。

○食鹽含有硫化水素泉

北海道 大船。

山形縣 銀山。溫海。

福島縣 湯本。

群馬縣 澤渡。

新潟縣 月岡。逆卷。

長野縣 山田。

兵庫縣 武田尾。

○鹽化土類及食鹽含有硫化水素泉

青森縣 湯の澤秋本。

○石膏含有硫化水素泉

日本に於ける泉質別けの温泉所在

北海道 尾札部*。

山形縣 新山*。

○芒硝含有硫化水素泉

宮城縣 新車湯。鳴子。

和歌山縣 湯の峰。

(十二) 放射能作泉

山梨縣 増富*。

鳥取縣 三朝。

島根縣 池田*。

○單純放射能作泉

福島縣 猫啼*。母畑*。

新潟縣 今板*。村杉*。

岐阜縣 惠那*。金龍*。蛭川*。

長野縣 鹿の湯*。

三重縣 湯の山*。

岡山縣 苦田*。

温泉治療の基礎的知識

温泉治療即ち温泉の醫療效果に關する知識は、全く經驗の殿堂から出でて發達したものである。温泉治療學は泉效を同じうする泉群泉浴の應用に就いて攻究するものであるが、その研究の方針には、歸納的に論述する場合と、演繹的に説明を加へる方法との二面がある。その演繹的なものは温泉を見るに當り、學術搖籃の時代よりこれを不可思議のものと信じ、或る特種物質がそれに含まれ、魔力が潜んで居るかの懷疑に擒はれた妄想を打破して、泉水の本態を確實に掴まんとする態度である。それは恰も西洋では鍊金術から分析結成が行はれて、萬物の本態を探らんとして進み、遂に今日の化學を産んだ狀況に似てゐる。泉水の構成は複雑である。藥品が單なる原料の配合でなく、全く合成せられた別種のものとなつて居る如くに、泉水も質及量的にイオン數は多様であつて、全世界に擴がる温泉中、泉水の全く同一イオン數を保有してゐるものは二つとない。化學及び物理の力を借りて泉水を分析しその作用を探及するに至つても、我々の知識には際限があつて、泉效の全能に對しても研究の目的は到底達し得られない。たとひ化學分析によるとするも、その性状の類似點を若干發見するのみで、それを綜合的に論議するも、未だ演繹的研究に徹底したとは謂はれない。

第五十五圖



(影撮課客旅省道鐵)泉温出湧岸海宿指

然し一方よりは觀察經驗から進んで來た結果のそれを一層有義たらしむるに努むるのであるが、それには、多くの泉水に關する知識を以てせねばならぬのである。泉水には、古くから口碑、傳説が物語られてゐる。泉水の奇怪、例へば特種なる臭氣、高温、水泡等のあることから、それ等には神通力あるものと信じ、病める者は、一心に泉水に浸つて病を醫せんと力願した。そしてその中には、病氣の或るものに泉效著しく顯れて、治績を收むるに至つた。かくて永き年月の間には、泉效の適する疾患別が明確に知られて來た。要するに各温泉の泉效が極められるに至りしは、畢竟經驗と觀察とからの獲得である。而して、その温泉地には智者も居つて、種々入湯の心得などを定めた、それが遂には入浴法の戒律として確守せられた。勿論温泉に傳つた事實には、偶然からの效果を示したこともあるが、

或る疾病に限つて特效ありとすることなどは頗る興味ある處である。切傷、打ち身に特效ある温泉があれば、アルカリ泉にても、一方は氣管のカタールに効果ありと稱せられるに、他のアルカリ泉は消化器系のカタールに良いと謂はれ、又同質泉にても一方の所で主效と謂はるゝものが、他方では第二位となつてゐる。かくの如く泉效に上下があるから、温泉の眞價を定むるに

は、蓋し長時日を待ち多數の醫者の手で研究された成績に據らねばならない。それには理論的基礎方面の研究も必要であるが、經驗を重ねることも當面の緊要なる一項である。

今日に於ける温泉治療研究は藥理的實驗によるもので、

泉水含有の鹽類若しくはイオンの知識をまづ第一に涵養し、それを相當深くまで進め、而して各イオンの性状を討究すべきであるが、複雑性の泉水全貌を説明するには、これでも尙物足らぬ所が多い。固より温泉の研究は現地に

第五十六圖



明皇窺浴(揚貴妃の事故)宋張擇端筆

在つて遂行せねばならぬのであるから、近時漸くその風潮に我が醫學界も傾いて來たことは悦ばしい次第である。泉水の應用は沐浴、飲用及び吸入の三様に施されてゐるが、何れも水を主體として行つてゐるのである。故に若し温泉の生理的或は藥理的作用を究める所があつても、尙水そのものゝ作用を等閑に附することは出来ない。しかし、それには水治療法とは若干の趣を異にする點があることを知らねばならぬ。水治療法に於ては、専ら水の力學關係を顧慮し、又水温度をも重く視るが、温泉では唯これのみに偏重はしない。温度からは炭酸泉浴の如きは體温よりも低温を規準とし、泥浴は高温で使用する例外がないでもない。

二 通常の入浴のことも、一通り述べる必要がある。

入浴は水の外用である、通常廣く行つてゐる入浴は、井水を汲める槽内に身體を涵すのであるが、湯水の多きか少きか、又湯に靜かに漬るか、浴水が動くか、或は温度の高低により身體に及ぼす影響は様々になる。又それ等により、入浴時間、入浴方法も異つて來るから應用の範圍は廣い。入浴に於て最も意義のあるものは温度である。湯水の温度は直接に皮膚の調温機能に及ぼして、體温を或は奪ひ、或は加温補充し、體内温現象を増強し或は減じ、末梢神經を刺戟することになり、反射的に或は傳導的に内臟機能を左右し、遂には組織元の酸化作用及び全物質代謝に働くこととなる。

常體温三十六度—三十七度を以て、温度の異なるに従ふ湯水的作用を批判する標準點として差支がない。湯水温

度が正常體温と餘り變りなく、特に低温であるとか、又は熱くなつたと覺えない場合の温度を中性温度或は無差別温度と稱する。若し湯水が體温よりも低い温度であるときは體温を奪取する、之を冷湯と云ひ、若し體温よりも高い場合には體温は上るから加温湯と謂ふ。兩者の作用はそれ／＼異なつてゐる。西洋流に考へると、三十四度から三十五度の温湯温度あれば中性(無差別)温湯と呼び、三十四度以下にあれば冷湯と名づけ、三十五度以上となれば加温湯と謂ふが、この中性(無差別)温度は日本人に在りては慣習上高くして三十七度—三十八度である。この中性温度は人種別によつて標準湯度が異なるが、温水の作用の發現する状況には必ずしも温度の多少の上下があつても、その作用間に著しい差異を見るものでない。

中性温湯は、入浴してゐる間は温るくも又冷くとも覺えないものである。温湯の温度は末梢神経に多く働くが、中枢神経に直接作用することは僅少であるから、循環器及び呼吸器に直接及ぼす影響は乏しい。即ち脈搏數、呼吸状態に異りはなく、又皮膚にも變化が起らず、分泌排泄も鈍くもならず又旺んにもならない。組織から温熱の遁散もなく、體内の造温機能も變らない。換言すれば入浴反應が起らず、自體の温度に影響がない。此中性温度の現象を現すには限界があつて、空氣中では裸體にて十六度—十八度、薄衣を纏へば二十五度となるが如く、周圍の状況に係る所がある。然しながら絶えず入浴してゐる間には、末梢神経端、血管又皮膚の生理的現象に及び血液に變化を及ぼしてくるものである。

中性温度の閾界は個人によつて異なるも、平均度には決して甚だしい上下はない。邦人は四十度以下の温水に於ても冷寒を覺え、獨逸人は三十度にて温度ありと謂はるゝが、又或る獨逸學者の研究によると、在歐邦人の中性温度の閾界度は三十四度—三十五度の間に在り、獨逸人に在りては三十二度—三十三度の間に在るにも拘はらず、脈搏に對する閾界温度は兩國人共に三十六度であると云ふ面白い實驗がある。

中性温度浴の心臟に對する反應は寡少である。又中性温度浴の全身血行に働くことが少いのに、冷浴或は熱き湯であれば、その影響は著しくなつてくる。健康にして中等肥滿の成人男性が三十四度—三十五度の中性温度浴に十分から二十分間も續いて入浴すると、多少身體の温熱が失はれて體温は低下するものである。湯水に奪はるゝ温量は空氣浴の場合に比して多いものである。中性温度浴は心身保護の效能あるものとも稱すべきで、強い刺戟を加へずして、身體殊に皮膚の機能が整調せられ、皮膚は清淨となる。

中性温度浴は又知覺神経には餘り強からぬ亢奮を起し、一般に神経系には催靜作用を齎らすものである。又温熱の刺戟が弱いのと、神経端に均等に作用することから、此温浴は神経沈靜の効果を催進する所以となる。更に又、刺戟反射を低下するから、人爲的の局所貧血を促し得ることが出来る。頭蓋骨を披いた動物を中性温度浴に漬けると、軟腦膜の血管は一まづ擴張充血するも、忽ちにして收縮し腦髓廻轉高も凹んでくる。又水に神経端を接觸せしむれば、膨隆して刺戟感度が低下するから、神經興奮は減少する。これ中性温度浴が神経沈靜に效力ありと謂はるゝ所以である。

又中性温度浴は、温調整機を格別亢奮せしめずして、尙能くこれに作用し、温度低下を保護し、榮養を可良ならし



第五十七圖

道後温泉共同浴場(鐵道省旅客課攝影)

めるから、栄養方面からいふとも、また必要な浴である。殊に、弱々しい老人に此中性温度浴を施せば、能くその體力を維持し、生活を保持することが出来る。更に神経に働く緩和作用のある點から、知覺過敏のもの、治療にも適し、全身浴のみならず、局部浴に用ひて皮膚疾患、皮下炎、蜂窩織炎、潰瘍の治療に奏效するのである。

温浴は三十五度以上のものを謂ひ、日本人にとつては三十九度以上のものを指すのである。体温以上の温水にては、体内に温度を加へ温熱を産生せしめる、それが次第に聚つて温感を起さすのである。此際腋窩温度を測れば三十七度五分のものが三十八度八分に上昇する。而して入湯中には体温は上昇するも、浴後には再び低下して温度調節するに至る。体温上昇は湯水温度の高き程顯著である。湯水温度三十五・四—三十六度で、三十分間持續入湯するも、体温の上昇は左程著しくはない。平均一分

間に一・六カロリーの温出量である。常温では一分間に一・五カロリーである。

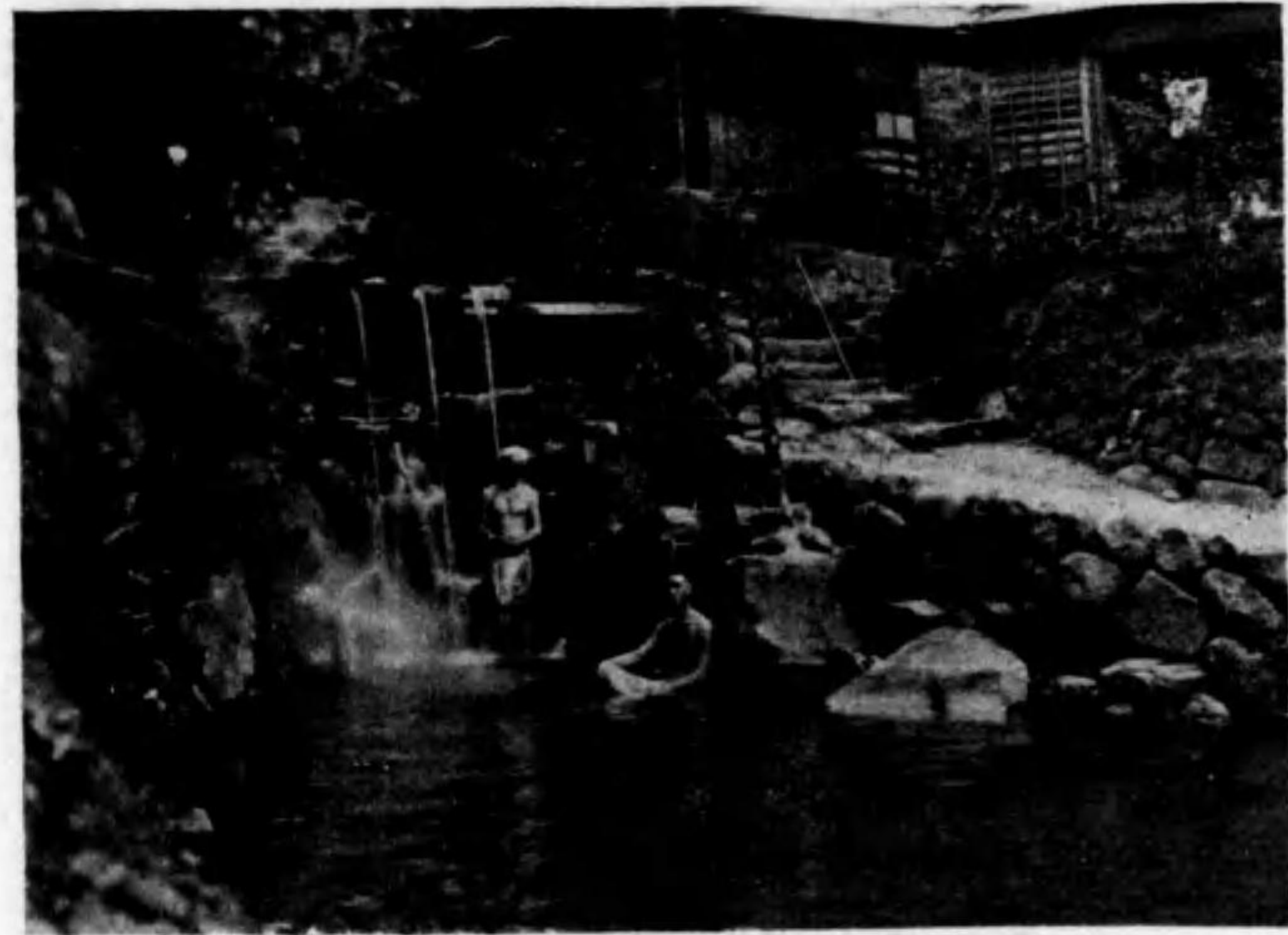
温湯を採ると、まづ皮膚血管は擴大し、血流は促進せられ、皮膚は潮紅し腫脹し、分泌は旺盛となる。そして、浴後には皮膚から多量の水分が排出せられる。血液は皮膚内を著しく循環するから、内部臓器の方には寧ろ血量は減退し、臓器の機能は鈍ぶり、又温産出も少くなる。且つ、炭酸の排出、酸素受容が低下してくる。若し著しい高温浴となれば、体温の上昇は甚だしくなり、自然物質代謝、炭酸排出、酸素受容量が増加するものである。高温浴の作用は、体内に温度を蓄積せしめるのである。而して、それがやがて血行と神経機能とに影響するに至る。即ち血行は早くなり、血液は一様に分佈し、皮膚は著しく充血し、末梢及び中枢神経には沈靜緩和作用となり、更に病的組織を吸収して、治效的作用を呈するものである。

又物質代謝の内、窒素代謝高が昂まるもので、汗にはその排出物を混へてゐるのを發見するが、尿には寧ろ析出してゐない。しかし、窒素排出は浴中では低下し、浴後に於ては増加するといふ學者もあつて未だ定見がない。

温浴後、利尿は稍々増すものであるが、熱き湯に於ては却つて減ずるもので、三十七度五分の温浴入湯では、二十四時間の尿總量は寧ろ減じてゐる。又長く入湯するとか、若しくは熱き湯に入る場合に於ては、尿反應は中性であることが多いが、アルカリ性反應を呈することもある。アルカリ性が著しくなると謂ふ説に反對論もある。比重は浴後には稍低下し、熱き湯では高昇するのである。

温浴の血行に影響することは前述の如くであるが、脈搏にも影響を及ぼすもので、脈搏の増加は体温上昇と相伴

圖八十五第



(影撮者著)池泉温と瀧湯の泉温丸大の湯八須那

ふものである。腋窩温度三十七度一分が三十八度に高まると、脈搏は八十から九十六となり、且つ充實性で大きいのである。四十度の温浴では百二十から、それ以上になる。然れども浴後間もなく調整して低下するに至る。又血圧は低下するのである。

或學者は、浴者によつて、三十三度から三十五度以内の温浴に入湯すれば、血圧はその人の最大血圧となるが、脈搏数は下り、此限界温度より遠ざかると共に著しくなる。即ちその限界度より上昇するときは、最大血圧は低くなるが脈搏数は増加する。此血圧低下は此限界度に接したるときに現はるゝが、三十九度から四十度になれば、却つて血圧は上昇し、温度上昇に従うて高壓となり、又脈搏数も増加する。しかし血圧と脈搏数とは必ずしも相關聯するものではない。換言すれば、血行に於ける各機能作用には一元化的の不偏點がないのである。斯の如

く、健康人が三十七度以上にては脈搏数が増し、それ以下の温度にて低減するに、血圧は三十五度以下にて低下し、それ以上の温度にて上昇する、この説明は學理的に出來ざる所である。冷浴では第一交感神経に作用するが、温浴では血管のみならず心臓力に及して、心臓の運動力を増さしむるに至るのである。

心臓筋肉も浴温三十二度—三十八度に於て緊張を強め、心濁音界は小さくなるが、温度一層高きか、又は蒸氣浴を永くするときには、心緊張力は減する。冷浴にありては心臓は擴大するものである。

温浴は神経系に働いて、抑制的緩和的效果を齎すから、催眠、疲労、弛緩を起すに至る。温浴に於ては軟腦膜血管は強く收縮するが、若し長く入浴すれば多少擴張する。この現象は、皮膚血管の變動に基く二次的乃至副行的作用の結果である。温浴温度の餘りに高からぬときには、知覚神経の末梢端を亢奮せしめ、それより各中樞を亢奮せしめるのである。それは隨意筋、不隨意筋の反射性疾患、攣縮を緩解する。又高温浴は知覚皮膚神経に温熱的刺戟となり、又中樞に、運動神経に反射的に作用することとなる。温浴による皮膚知覚異常は、冷浴の場合と異なり、部位神、壓神を敏感となし、温神、筋覺、電氣的筋充進は鈍くなる。

温浴は皮膚に血量を増加して實性充血となし、皮膚呼吸を強め、内臓の充血を減退するから、結局、分泌、瓦斯代謝に影響することとなり、吸収力は良好となる。腸痛、膽石痛、膀胱痙攣、腎結石、頭痛、テタヌス等の強直を緩解し、神經麻痺には寧ろ刺戟亢奮なるのである。

又温浴は發汗法として賞用せられ、貧血、漿液吸收の目的に利用せらる。

温泉を永く続けるときには、皮膚は乾燥してかさ／＼となり、上皮は剝離して落屑する。而して発汗の傾向は少くなり、知覚神経は敏くなりて、他の刺激に對して過敏となる。

温泉は全身浴と坐浴、半身浴、足浴及び手浴の部分浴とに分たれてゐる。殊に局部の効果を望む場合には部分浴を使用すれば良い。急に充血を促すとか、強く発汗を望むとか、瓦斯代謝を促進せんとする場合にも部分浴を施す。肥胖症、痛風、貧血、百日咳、心臟疾患、皮膚病、瘡瘡、知覚及び交感神経障害、手足の冷覺、多汗症に有效である。

更に尙、温泉の効果に就いて二三の例を述ぶるに、温度高き温泉を採れば発汗が旺となり、上皮が脱落すると共に皮膚に附著してゐる微生物、毒素、その他の有害物が流れ落ちる。タタヌス患者がこの高温浴に漬ると、毒素が洗ひ落されるから良くなるのである。低温浴に創ある患者が長く浴する時は、上皮が膨くれ、創面に新しい肉芽が力強く持ち上つてくる、之れと同時に皮膚神経端も膨くれるから當りが良くなり、皮下の浸出液による壓力も均等となつてくる。更に浴水が絶えず傷面を洗ふから、膿汁又は分泌液が能く洗ひ去られて、創面は清潔となり、良好の轉機を芽ざし新組織再生を促進するに至るのである。

又時間湯(持續湯)を低温にて數時間浴すると、亢奮せる神経を沈靜するに奏效する。故に知覚過敏、痙攣、神経痛、ひぼこんでり、ひすてり患者の治療に施さる。その他、丹毒、天然痘、魚鱗癬、瘡痒、匍行疹、乾癬、天疱瘡、下腿潰瘍、火傷、弛緩性創傷、上皮剝離等にも效があり、又腺病、微毒、水銀治療後、骨瘍、骨膜炎にも應

用せられる。

持續湯を晝夜を通じて百日間入湯持續せし報告があるが、之れに據るも、何等の危険もなく、脈搏、呼吸、體温に變調を來さず、食欲、睡眠も平素と異なる所がなかつた、唯利尿が減じたのみである。

入浴の際、水の力學的器械的作用を添加して、水流として應用することがある。例へば、湯瀧、如露注、壓注、注ぎ湯、動水湯である。此等は湯水の力學的乃至器械的作用を同時に身體に加へるのである。是等の入湯では、組織が水壓の爲めに壓せられ、知覚神経には刺激となり、やがてその刺激は當該組織に血流を促し、皮膚は充血潮紅し、温暖を覺え、又深部の組織にも血流は旺となり、筋肉の抗力が強まり、物質代謝が進むものである。特に雨の如くに強く水を注ぐと、皮膚知覚神経には相當の刺激となるものである。

蒸し風呂は水蒸氣を滿した五十度乃至五十六度の室温中で全身を潤すのである。蒸し風呂では皮膚及び肺臟から水分放散が甚大となり、汗となつて流れ出づる、その量は約半時間に五〇〇—八〇〇瓦である、又浴後にも大量の汗が排出せられる。五十三度の蒸し風呂の中で肛門に挿した體温計は十分間に三十八度から四十度四分に上昇してくる。之れと同時に脈搏及び呼吸數も増加するのである。浴者は入湯始時には不快、灼熱、呼吸のつまる感を抱き、眼には壓重を覺え、眩暈、昏睡を訴へるも、忽ちに馴れて平素より呼吸は深く且つ多くなり、血流は内臓に流れ込み、小血管は擴大す。その内に充血は止み、皮膚は潮紅する。浴後の皮膚は腫大し胸圍が廣くなり、體重は減じ、皮膚觸感は鋭くなる。尿量は浴第一日には減するが、第二日より増加する。又尿の比重は第一日に増加するが



第五十九圖

那須温泉元湯の被り湯 (著者撮影)

第二日より減ずる。尿の窒素量は、浴後第一時間に増加し、炭酸瓦斯量は多くなる。

蒸し風呂は発汗用として専ら賞用せられ、瓦斯代謝亢進、皮膚機能亢進、末梢神経刺激のある場合及び皮膚病、慢性リヨマチス、肥胖病、浸出液の吸収、中毒症に用ひられる。しかし、血管硬變あるものには、寧ろ禁忌である。

温泉に於ても泉水に漬るとき、水槽が大きく十分に身を沈めると、淡水浴と同様に水圧を受けるもので、胸圍は通常呼吸状態に於て一・三・五種を減じ、腹圍は二・五・六・五種を減ずるものである。人體の比重は一・四(ミース氏)であるから、水中では三―四種を失ひ、殆んど比重も零となつて水面から浮び上れる頭部、上胸の一部の重さのみである。故に水中の實値重量は數斤に過ぎないから、水中で身體を動すも抵抗は少くなつてゐる爲めに、強剛つた關節も動かし易くなる。故に關節強直の治療などを、特に湯中で操作し得るのである。

殊に鹽分の多い泉水、例へば食鹽泉は比重の大なるだけ、他泉水よりも水中操作は一層樂々と遂行せられるのである。海水が河水よりも潜り難いのは、泳者の知る所である。

三

温泉の効果を研究する當り、まづ第一の問題は泉水物質が無痕の皮膚から體內に竄入し得るかの事實である。久しき以前から水中に含まるゝ化學物質は觸媒作用によつて身體に働いて反應を現す、その反應に對しては、量的には餘り關係がないと云ふ説明が廣く行はれて、一般にそれに満足し、又これを根柢として理論的解釋する所があつたが、漠然たる嫌がないでもなかつた。然し更に物質に非らざるエネルギーが皮膚を透竄して臟器の機能に働く説もあつて有力に支持せられた。けれども、斯る空想的推定論は次第に假面を剥がされて、一層進んだ科學的考量による實證を求めねばならなくなつて來た。しかしそれまでに進んだが、温泉治療學の研究には今尙多大の假説や空想によるものが残されてゐる。

泉水の物質が皮膚を通過することは簡易に實證されるが、その通過は經口に比すれば、可なり不便なる行程を探り、且つ又その吸收せられる量も微小であるに拘はらず、經口的に採つた大量よりも遙に有效作用を發揮することは更に問題となる。然し皮膚通過を以て單なる機械的濾過の如き作用と觀察を下すことは根本的の誤謬である。皮膚を通過するは鹽類でもなく、又その分子でもなく、原子でもなく、イオンである。

今までは皮膚を以て身體の表面を包む單なる外殼であるとせられ、外部上には知覺を司り、發汗する程度のもの

と認められ、他の臓器の如く重要機能を司るものとは知らなかつた。皮膚が臓器の一つであることを知り得たのは近時の事である。蓋し皮膚は神祕である。

皮膚には血管、淋巴管、分泌腺、神経、毛髪、滑平筋、色素などがあつて重要な機能を営むもので、疾病の中には、或る現象が皮膚に出現することから罹患を始めて知り、又その程度の推知が出来る。但しその皮膚現象は必ずしも眞の皮膚病のものと認容し難いものである。全身病の診断に皮膚の異常を参酌する場合が多い。古くから急性傳染病に罹つたとき、外皮の落屑が少いと内部に毒が逐ひ込まれて重症となると謂はれた事實は誤りでない。傳染病に罹つた際、皮膚發疹の少ないものは多いものよりも免疫力が弱いとは、今日の醫學の定説で、皮膚のエソフィラル作用なるもので、組織の老廢に對する保護作用である。

又皮膚は全身に及した或る作用にも影響を受けるもので、温度、勞働、精神作用から或は潮紅し、或は色蒼め、或は鷲毛皮が立つ、それと同時に容貌にも意味ある情象を發現するのである。植物性内臓と皮膚との間には密接なる交渉關係が繋がれてあるから、若し内臓に疾患ある場合には脱毛、上皮落屑、色素沈著などの現象が現はれて來る。又之れと反對に、皮膚から内臓に及す影響も相當に強いものである。

更に近時の研究題目として、上述の如き事實と入浴とは如何なる關係あるべきかを討議するに至つたのである。しかしその結論には尙時日を要する所である。身體の機能の一部は直接意識に左右せられるが、大半のものは不隨意的で自動的に營爲せらるゝもので、正しく有機的生命を支配し、そこには植物性神経系の擴れる所である。今便

宜上生活現象を二系の神経の機能亢進及び機能低下によるものと説明し得るならば、此二神経は互に拮抗的に働いてゐる、即ち交感神経と副交感神経である。

迷走神経は後者の代表のものである。此兩神経系範圍に於ける亢奮狀況の變化は、細胞に於ける或電解質の平衡の異動に相當するものである。今カリウムイオン及びカルチウムイオンに就いて見るに、迷走神経の機能亢進を増進する場合には必ずカリウム面が上昇し、交感神経刺激のときには細胞及び組織内のカルチウム含有量が増加する。神経系作用と電解質變位は二様の相異なる事象を呈するが、實際には同意味である。二つの様相と見えるのは、一元の生活現象の二方面を見るからであるが、結局は相互連絡してゐるのである。一定の方向に神経を刺激すれば、自動的にこれに屬する電解質變位を發起し、その變位は同時に之れに相當する神経を刺激して、その支配下の機能變化を促すものである。藥物的治療の大半も體内の電解質變位の影響によるもので、喘息、テタニー、アレルギー性疾患、迷走神経切斷、痙攣の治療に廣くカリウム療法が行はるゝ所である。適當なるカリウム療法の適應症は限局せられてある、大量の靜脈注射は却つて有毒となる。マグネシヤイオン及び磷イオンの如き他の電解質の應用は多い。

藥物効果と異つたことは、電解質變位と、それに關聯して生理作用或は治療効果が遂行せらるることである。このことは今まで可なり多くの詳しい試験で實證されてゐる。レントゲン放射線、日光、紫外線の如き放射線は血液中及び組織液に於けるカルチウム面を高め、カリウム量を低下することが明白になつた。強き放射線放射の後貽症、

例へばレントゲン宿醉は迷走神経變異に基づくものである。

温泉浴により、イオンが無痕の皮膚を通過して内部に竄入するかの問題は興味ある所である。近頃までは皮膚を通過するは水溶性物質であるか、又は脂肪溶解性のもので、更に炭酸、硫化水素、その他泉水中には含有せられざる物質、即ちザリチール酸、アルコール等が吸収せらるゝとせられた。イオンに關しては、イオン体内竄入は電流によつて水溶性のものゝみ成效し、脂肪溶性のものは不可能とせられたが、近時の研究から、皮膚の透竄には全く別個の知見が現れて來た。即ち皮膚の旺盛なるイオン透過があることを化學分析的に立證し得るのである。十二分の細心注意の下に於て、皮膚は甚しく稀釋せし酸を或る程度までに中和し得るものである、恰も陰性負荷皮膜の如き状態である。カリウム、カルチウム、ナトリウム及びアムモニアの各イオンは遠心性に皮膚を通過するもので、稀釋したる鹼汁に、皮膚はクロロイオン及びヒドロ炭酸イオンによつて反應するに、カチオンは僅に液化するのである。ウイスバーデンの食鹽泉に就いて試験したる成績は之と同様であつた。

健康者並に心臟疾患者に就いて、炭酸浴の影響する所を研究したものがあつたが、その成績によれば、炭酸瓦斯は空氣吸入を抑制しても、尙よく浴中皮膚から体内に攝收せられ、浴後暫らく蓄藏せられて、後ち徐ろに體外に排出せられる。又硫化水素でも同様の徑路を示してゐる。

此知見は割合に新しいから、將來益々研究が進められて詳細を究むるに至ることは確定的である。疑ふまでもなく皮膚は浴中では單なる透竄性皮膜でもなく、中性のものでもなく、温泉中の媒體と觸接して或る生理的作用を行ふべく加動的に働くのである。皮膚は此媒體の種々の變更するものに對し、特に反應する選擇的機能を保つことは明かである。皮膚が周囲の液體からイオンを採取せず寧ろ液體中にイオンを送出するが如き試験が可能とすれば、それは原則的でない。蓋し、天然の温泉によつてイオン等量は變位し、或る者には附加し、或る者には一定のイオンが減退するも總和は同量であるからである。

泉水中に非解離の状態として個々の鹽類が存在するものとしての藥物學的的研究は今日に於ては行はれない、寧ろ總體としての作用効果を検査するやうになつて來た。

炭酸瓦斯は水溶性又はリヒト溶性のもので、皮膚を透竄することは確定的事實として疑ふべき餘地がない。然し呼吸によつて体内に收容せらるゝことも夥しい。炭酸は重量ありて浴面上に浮游するから、その際吸入するが、時には炭酸中毒症を發する、故に換氣装置を設けて炭酸瓦斯の停滯を未然に防ぐべきである。炭酸を吸入すれば血壓は上昇し、炭酸浴に入湯すれば、之に反して低下する。

炭酸泉浴の研究は今日まで研究報告多數に上つてゐるが、難問題で未だ曙光を見るに至らないのである。例へば炭酸浴は心臟を保護するか、或は心臟の訓練として働くかは議論ある所で未だ解決が下されてゐない。炭酸浴を採れば皮膚は發赤し、浴外の皮膚とは明に區別せられてゐる。即ち水に漬けた皮膚には炭酸瓦斯小泡が無數に密接した結果として、潮紅温感を覺えて來る。この時、その水温が淡水浴よりも低温であつても此現象が起るのは、皮膚面に水泡が絶えず附著し、離散し、更に附著する器械的作用であるか、或は皮膚面に近き温神經に化學的刺戟を

添加し、これによつて招起されたのか、是れ亦多數の研究あるに拘はらず、何等結論に達する所がない。是れ正に描龍に點眼を忘れたとも云ふべきであるが、近時炭酸瓦斯は熱不導體なる爲に體溫放射絶縁となりて温感を覺ゆると説く者がある。更に皮膚の毛細管は化學的刺戟を加へられて擴張し、炭酸の刺戟は皮膚より真皮の間までに侵入するものである。而して淡水浴とは異なり、天然炭酸泉浴に於ては炭酸排出と呼吸量とが高まり、酸素消費は多くは低下するも決して上昇はしない。且つ浴後長時間に涉つて炭酸を析出するから、呼吸による途を阻止しても、相當量が皮膚から透竄することは明かである。遺憾ながら炭酸浴の治療効果を確定するまでには、尙前途遠しである。人工炭酸泉と天然湧出炭酸泉とは種々趣を異にしてゐる所があり、従つて兩者を同視してはならない。自然湧出のものは深い低所から相當の壓を受けて昇騰し、その間にも瓦斯と水とが細々と密觸するもので、人工的には到底求め得られぬ微妙の點がある。唯人工のものは天然泉の補給の一部に供するのみである。

食鹽浴の研究は相當に遂げられて、多くの疾病の治療に利用せられてゐる。嘗て食鹽は吸収せられて物質代謝に働くものとせられ、又皮膚表面から深層に作用する生理的因子となるべきものといふ考察もあつたが、今日に至りては最早や、一顧の價値なきものと見做された。浴水と身體内部との間にイオン交換が行はれるもので、その方面の研究は益々進むであらう。食鹽泉に入浴した後は、皮膚に細かき小結晶がきら／＼と輝いて、長くまで附著して落ちない。この結晶は皮膚に軽い刺戟となる。そしてその刺戟の軽いのは、他の理學的刺戟法の到底及ぶ所ではない。食鹽泉のものには同泉群にありながら、治療効果を異にするものがある。その點大に注目すべきである。

食鹽泉に漬ると皮膚溫度が上昇し、一時間半以上も続く。若し規則正しい入湯を持續すると、可なりに體溫は高まるもので、恐らく皮膚のイオン滲竄性に食鹽泉の作用が重大なる意義あるものであらうと説く學者がある。

食鹽泉は慢性炎衝及びその隨伴症に效あるもので、運動器のリウマチスミス、漿膜腔の浸出液の吸収、殊に婦人生殖器病、神経痛、麻痺、腺病質、結核(肺臓以外の)に奏效するものである。

硫黄泉の硫黄の藥理的作用方面は割合に知られてゐない。硫化水素は硫黄泉に於ては硫化物と共に存在するものであるが、これは室内に於ては有毒となり、粘膜を強く刺戟し、腸管收縮を促進し、靜脈注射するに體重尪當量數疋量にて致死するものである。硫黄固形物は下痢効果を現し、皮膚病の治療及び美容劑材料に使用せられて範圍が廣く、非特殊療法と同意味にて硫黄劑が用ひられてゐる。硫黄の大量を體內に入るゝに、その排出量は送入力よりも多きく、窒素排出も多くなり、蛋白質代謝を増加して迅速に體重遞下となる。少量使用する場合にては、中間物質代謝に硫黄が移行し、白血球殊に多核白血球が増加する。また動物實驗の結果としては、關節軟骨に變化が現はれる。白鼠の皮下に蒼硝劑を容れても、硫化水素は皮膚から透竄して呼吸に現るゝことを證明せられ、又肝臓グリコーゲンが増加し、血糖が減退し、インスリンの硫黄含有量が増加することは、その効果と硫黄泉との或る關係を物語るものである。

キョシカ氏によれば、硫黄泉浴は確定的の形象を呈するものでないといふ。即ち絶えず轉換するもので、コロイド性硫黄を遊離し、同時にホリチオン酸を析出し、再び消失するといふ。若し此事實が確定的なるものとすれば、化

學變換を營む媒體は、イオンの移動能力に甚だしく活動する物體となるものである。硫化水素イオンの含有は極めて微量である、若し泉水一キロ煙内に五〇疋在るときは既に可なり大量とせられてゐる。

硫黄泉はリユマチスミス、痛風、坐骨神経痛、浸出液、婦人生殖器系の炎衝、皮膚病に奏效し、微毒に偉效があるラヂウムエマナチオンが発見せられてから約二十八年に過ぎないが、これによつて温泉の神祕の鍵が開かれ、更に温泉學の研究進歩を一段促したものである。それは割合に泉水含有固形物の少い温泉にも多量含有せられてゐる。そしてラヂウム能作泉と特名せられてゐる。

ラヂウムエマナチオンを含有する泉水の効果は三様に働くものである。他の瓦斯の如くに皮膚を通過して體內に働くか、或は浴中に呼吸と共にエマナチオンを吸入することによるか、或はこのエマナチオンを發散する放射線を體表面に受けることによりて現るゝかである。

第一の事實證明には爾來幾多の實驗があつたが、何れも十分なる成績を得なかつた。蓋し使用量の甚しく少量であつたからであらう。エマナチオンはウラン或はラヂウム屬の崩壊による産出物で、その作用も弱いものである。吸入、放射のことは多少知られてゐるが、しかしその作用の眞諦の説明は不徹底である。或は酸酵に加動的に働くとも謂ひ、非特殊療法の一現象とも論じ、酸化作用を促進するとも論議せられ、未だ一定の結論が無い。經驗上或る温泉に特效の認むべきものがあつて、その説明の不明であつたものが、ラヂウムエマナチオンの含有

多きことの證明から、結論としてその効果を之れに歸することは何人も異論がない。將來幾多の經驗と觀察により、又科學的探索の進むことよつて光明を得ることゝなるのである。

土類泉及びアルカリ泉に鐵泉、砒素泉、沃度泉の含有せらるゝもの多く、又土類泉及びアルカリ泉には多量の炭酸瓦斯が含まれて、治療効果を一層有意義にならしめてゐる。

泉浴効果を究めるには各泉の多少づゝ相違する効果を總括して纏めて行かねばならぬ。そして之により効果を明かに指示し得、又泉浴法の改良發達も促がされ来るのである。従つて各温泉にても、漸次一定の治療方針が工作され得るのである。尤も泉浴に就いて各地に行はれてゐる技術的慣習も、泉浴上大切なる文献であり又實驗である。

入湯すると、間もなく身體の調子が變つて悪くなるものが多い、即ち湯當りが起ることは一種の反應で、非特殊療法に伴なふ、一時的現象である、決して憂ふべき性狀のものではない。この現象を越えて第二期療養となると効果が現れるが、更に復た少し計り反應を現す場合もある。そして第四週目に亘りて確然と効果が現れることになる。入浴第一日から此反應を経て最後の効果現出期まで忍耐せざる時は、時に物足らぬ氣持となり、泉效の樂天地に逍遙し得ざることがある。

第六十圖



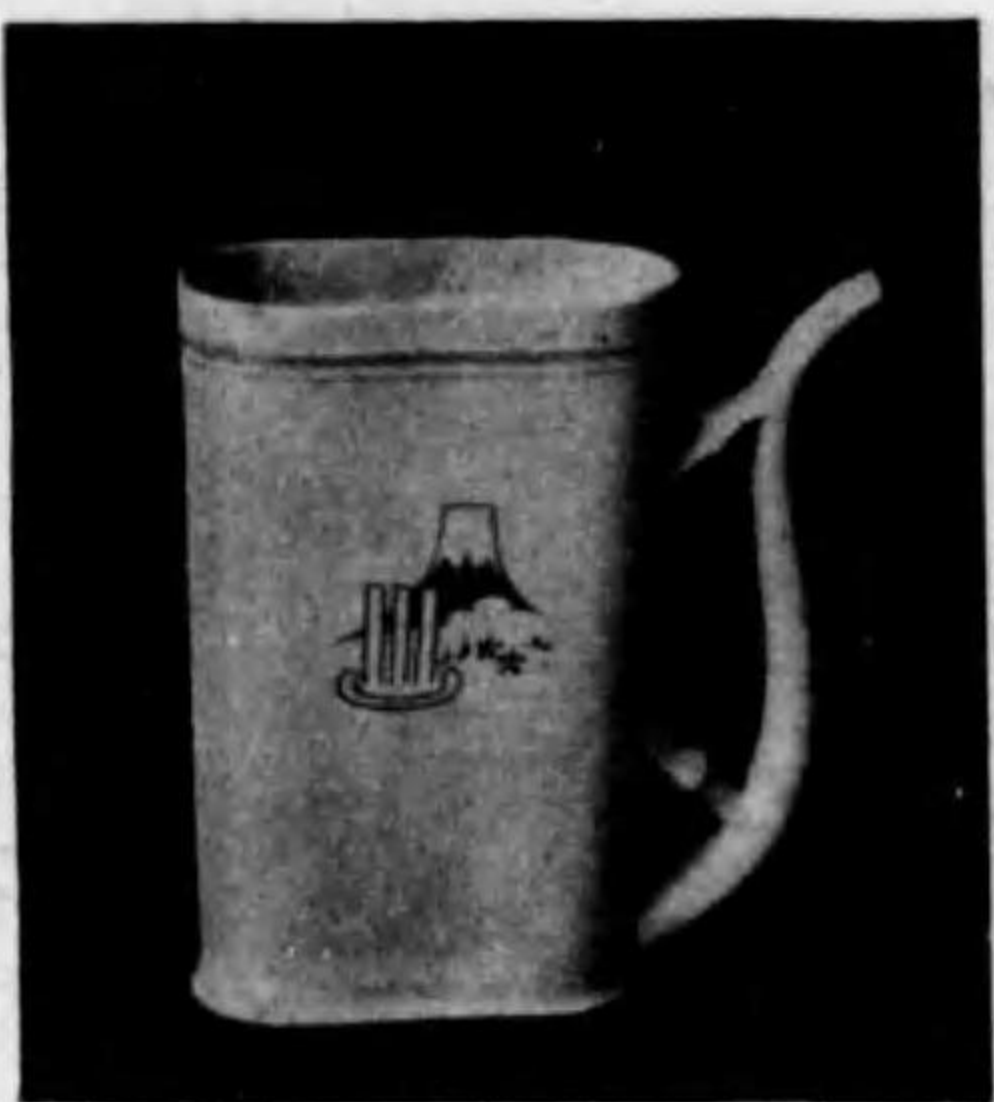
飲み湯コップ

温泉は泉浴の外に泉水を飲む飲用療法がある。我國に於て泉浴のみを責み、たとひ飲水するも、浴中に酌んで飲むだけで未だ眞諦の飲用法が行はれてゐない。飲水は泉水應用の重要な技巧で、或る疾患には此飲用法によつて療治をやらねば成效せぬ場合もある。然し泉水を飲んで機運の展開する事情には未だ明確を缺く所があるが、泉水

に含有せらるゝ鹽類、又はそのイオンの大半が、身體の成分に轉化するものであらう。飲用した泉水によつて轉化物の量的増加を示さないのは、體内の礦物性質代謝が著しく増加してゐない證據である。蓋し體內では複雑なる現象を呈するから知られにくいのである。

西洋温泉場で行はれる飲用法は、醫師から泉水一日飲用量高の指定を受けて、午前か或は一日に數回に分けて、食前か食後に、或は原水のまゝ、或は稀釋して飲むのである。それに就いても温度は注意すべきことであるから、或は温水で飲むか、冷水で飲むかを明に示して實行するのである。一日量二〇〇立方糎から一〇〇〇立方糎に及ぶ。飲用量の多寡に關する注意も、泉水含有物の效果に關する注意と共に必要である。健在なる臟器は能く機能を保存し、その水分流入の増加するときにはその送出を促進し、水分缺乏すれば、送出を抑

圖一十六第



旅行用飲湯みコップ

制して常に一定量の保有に努むるも、病的の場合となれば、異常現象を起すが故に、必ずしも同様でないから、健否の状態に鑑みて飲用量は一々醫師の指圖を仰がねばならぬ。且つ又醫師は個體を顧慮して取扱ふべきである。健者に得た實驗を直ちに病者に適用するも、決して良效の成績は求められるものではない。病者には飲用した泉水の影響が豫想外に現れて、思はぬ不覺を見ることがあるから注意せねばならぬ。

泉水の温度と體温とが同温なれば、泉水は體液や血液に受容せられて、その泉水の化學的成分が攝收せられ、臟器に程良き營養效果を十分に無駄なき様に促進し、或は臟器を灌漑して恰も灰汁を抜くが如き意味を司るのである。又泉水が胃腑に入れば、胃液を稀釋し、胃の内容物に浸み込みて、これを融かし、又食物と混はりて乳液となるも、泉水の大部分は早くも胃から腸に流れ出づる。又消化器に泉水の吸收せられるのも、意外に速いもので、泉水に含まれた鹽分は數分後には既に尿中に現はれるものである。胃に入った泉水は胃の洗滌掃除用となるべきものであるから、空腹時に飲むと、食物の残渣や、酸性胃液等は稀釋せられて小腸に流れ出でる。泉水を飲むと酸分泌が多少増すから酸性を帯ぶ、その結果、脾臟、膽汁、腸腺の分泌を促すが、又之れに反し胃の分泌過多の場合には酸性内容は稀釋せらるゝ、即ち過緊張から常緊張となる。而して小腸に泉水が流れ來ると小腸の蠕動を多少強くするし、又胃から淋巴管、靜脈管に送致せられて、血液には一時含水量が多くなる。

水の吸收せらるゝ速さは、種々の事情によるもので、鹽分の多い程、水の靜脈内に移輸され難くなる。これは、胃液の濃度が血液のものよりも高いからである。浸入と滲出の法則に従ひ、動物の皮膚が相異なりたる液の鹽類量

第二十六圖



(シターバンデーバ國逸獨)館會泉飲

に差異ある程、滲竄は容易である、又水の吸収は血管の緊張力の高低に由るもので、高緊張の時は低緊張の場合よりも弱いのである。

飲水の温度は大なる役割を営むものである。水を飲んで別、に温みを感じないのは攝氏三十六度から三十八度の間である。五十度から六十度までの白湯は飲んで快いのである、六十五度になると熱さを覚える。而して飲水の温度の高きときには胃粘膜の血管を擴大し、低温なれば縮少乃至閉鎖するから、血液は或は多くなり、或は寡くなり、又筋肉の緊張も温度に應じて減じ又高まるのである。

更に又飲水の温度は胃腸に温熱刺激となるのである。その刺激は体温三十七度五分以上の水温であると現はれるもので、温度が高くなる程、胃分泌の働きは少くなるも、胃の運動は強くなる。腸管にありては、熱き白湯を飲んでも又腸から注入しても、共にその運動は静止するが、腸管の

吸収は促進せられる。冷水なれば、胃の運動は止まり、幽門は開放するから、飲水は流水の如く、速かに腸管に移るのである。

更に又、泉水は体内に働いて、單なる器械的運動ともなり、又化學的反應の媒者ともなり、更に滲竄作用から細胞の新陳代謝を有利とならしむるものである。攝收した水量が多量で必用以上であると分泌を増加し、之を薄める、尿の如きはその好例である。その排出物中には血漿からの異物、又可溶性の物質があり、過剰の水分を含んでゐる。かく身體各組織は、攝收した水分及び血液によつて、巧に濃度の變化を適宜按配して、組織間隙に水分が灌流し、その溶解物は細胞に吸収せられ、又細胞からの崩壊物が排出せられて、新陳代謝の能動を可能となすものである。血液の含水量も相當に達するものであるが、未だ之を立證することは出来ない。

前述の如く、水の攝收の結果、代謝産物の排出は一時増加するもので、尿量は多くなり、尿素、クロール、ナトリウム、磷酸、硫酸の排出量は多くなり、尿素は一日二〇〇〇—四〇〇〇㊦の水を採つたときには、平素よりも五分の一増加するものである。之は水分を採つた結果組織内を流通して、蛋白質崩壊が増加せしめて尿素分析を多からしめたるものか、或は既存の尿素の排出を易からしめたるかは、學問上不明の點である。尿のみならず、他の分泌液も増加する。又皮膚から水分の排出も多くなり、腺器分泌液は淡くなり、糞便は弛み且つ排便度數は重なる。身體消耗は飲水量の多き場合に見られる現象で、此際榮養を採るもその効果は高まらないから、著しく衰弱することになるのである。

また、若し水を採らないと、全身状態が悪くなり、食欲を欠き、體重は減じ、身體は細まり、作業力が衰へ、血球數、血色素も變り、血漿は濃厚となり、又窒素析出量は多くなり、蛋白質崩壊が行はれ、その崩壊物の一部は他日擲水するときになつて排出せられる。かくて皮膚呼吸は日一日と減するが、再び飲水すると徐々に恢復する。口の渴いたときには窒素及び脂肪の吸収は阻止せられ、殊に脂肪の阻止は著しい。含窒素成分のものは、渴時には抑留せられて身體に好影響を齎さるものである。身體維持に水の必要なるは、上記の説明からでも明かなることである。體溫に冷水の及ぶ影響は、體溫の剝奪である、低溫なる程、又用量の多い程、體溫の下降は大きく、且つ持續時間も永く、胃腸にありても下溫するのである。

低溫は物理的に熱を奪ふ結果ばかりでなく、知覺神經も影響を受くる所となり、胃腸に働いた寒冷刺激は知覺神經中樞に反射作用を現し、皮膚は蒼白くなり、脈搏數は減下し、血壓は昇上す。溫水は脈搏を遅延し、動脈壓は低くなる、但しこの成績は何時も同一成績とは限られないことがある。

鑛泉を飲めば上述の淡水の働く生理作用と同様に組織内を流通するが、血管緊張を高め、毛細管壓を増し、全身洗滌力を添加し、新陳代謝の崩壊物は組織から容易に大量が排除せられ、尿量を増し、その尿中には幾多の固形物を含み、尿素、尿酸が多くなるが、蛋白質崩壊物は特に多いとは謂はれない。他面には病的分泌液を吸収し、尿酸沈積を除き、餘分の膽汁質を血液や組織から去り、又膽汁分泌を促し、之れに壓を加へ、身體内の有毒物を解離し、閉塞した尿小管を開通し、腸管の機能を整調するのである。

體内の鹽類平衡は恒に一定に保つべき性能を現はすもので、植物性臟器内に於ては電解質的均等の變移が行はれる。即ちカリウムイオンの増加は迷走神經の機能を高め、カルチウムイオンの増加は交感神經を刺激する。泉水を飲んで現はれる効果もこの現象に由るもので、礦物性物質代謝の量的變化に由らない。泉水飲用は生活機能亢進を低下し或は改善する。

泉水を飲んで胃に到來すると、透竄作用を現はすが、その水液の透竄壓は液體の分子凝縮の如何に預る。溶解物質の分子數が同數であることは何時も同じ透竄壓を示現するもので、物質の特性には餘り係りが無い。多數の溫泉は様々な性状を帯んでゐるが、透竄壓からは、過緊張、常緊張、低緊張の三種に分ち得るものである。第一者は體液よりも透竄壓の高いものであり、第二者は同壓であり、第三者は體液よりも低壓であるもので、第二者は理想限界であるが、その實現は稀れである。通常は過緊張性と低緊張性とに分つが、これは概理的であつて、實際は嚴然と判別し得ない場合もある。

透竄壓は凝結點低下と雁行するから、凝結點は透竄緊張の測定規準とするに足るのである。體液凝結點は攝氏〇・五六から〇・五八度の間に在る。これより低きものを過緊張性と云ひ、これより高ければ低緊張性とする。その閾界點は、食鹽にては〇・九%、芒硝溶液にて一・〇四%、硫苦にて二・七%である。

飲泉の効果はその含有鹽類、その他、溶解物質、瓦斯を有することに由つて、一層顯著なるものとなる。新らしき物理化學の知識を借りて、礦泉の鹽類は組織及び體液の正常の分子的濃縮より強度の滲竄性價を有し、その緊張性

質から組織の透質均等に異動を齎らし、組織の同緊張状態を變らしむると考察するも、尙吾人は又次ぎのことを想定することが出来る。即ち泉水例へば食鹽含有泉を飲むと、その多量の鹽分から、組織内に化學的作用が働き、更に可溶性泉質が各組織にそれと密接なる化學的關係や、一定の化學的親和力が働いて、吸收機能や排出作用を營み、又血液性分に營養力に特別な結果を將來するものである。而して學理的には飲泉療法とは礦質療法で、イオン作用の働きに預るのである。泉水の中性にて披裂せざる分子と、分離イオンの數と種類とが體內を無數に流れ又は逆流するによつて、何時でも滲質性均等を保たんとするのである。故に人によつては飲泉療法は新陳代謝の根基を司ると云ひ、又生活に順應すべきやう細胞の生理的狀態を適當にするのであると云ふ。

泉水を飲むときは、泉水の溫度、化學的成分、瓦斯含有、ラヂウムエマナチオン等が吾々身體臟器の機能、全新陳代謝、血液にそれぞれ働くのである。

胃に於て過緊張性泉水は、まづ内容の濃縮を強め、低緊張性のもはそれを低下せしめるものである。身體に直接反應として現はれるのは、濃縮液にては胃液分泌の反射性低下を招き、鹽類吸收の完全不能を來す。之に反し、低緊張性液は水分を多少吸收するも鹽類析出を著大ならしめるのである。

又腸に於ては過緊張性泉水は排出を旺盛にするが、濃縮を制し、鹽類吸收を促す。低緊張性泉水は鹽類排出を促すのである。

透質性作用に泉水溶解せる鹽類の化學的作用が加はると、單獨に或は同時に現はれ、又イオンの働きが起る。

礦泉の消化器に働くことに就いての研究は幾多の業績があるが、要するに胃の鹽酸分泌に及ぶ影響にありては、炭酸多き泉水、アルカリ鹽類泉、弱食鹽泉はその分泌を促し、強食鹽泉、弱アルカリ泉、苦味泉、硫黄泉は之を阻止する。而して何れの礦泉も胃疾患に相當の効果を擧げるのは、異常の胃粘液を容易に排除し又之を溶解するからである。又空腹時に飲むのと食事の間に飲むのとは、同一礦泉でもその働きが異なるもので、例へばアルカリの多い礦泉を食前——一時間半に飲むと、胃液、唾液の分泌は阻止せられるが、食事と同時に飲めば、その分泌は高まるけれども、消化時間が伸びるのである。アルカリ泉、アルカリ食鹽泉は腸管の分解を援け、胆汁も亦その影響を蒙るものである。

礦泉の冷きものはイオンの移送速度を緩徐にするが故に、鹽類の吸收にも影響することとなる。礦泉には總鹽類の八〇%が溶解してゐるから、吸收力にイオンが預ることは容易である。かくて鹽類の腸に働くにはイオンが第一に關係するもので、分泌の効果を齎すものである。

鹽類が腸管から吸收せられるのは難易がある。クロード、プロミード、ヨード、ニトラート、クロラートは腸管から體組織に早くも移行するが、硫酸、アルカリ及びアルカリ土類の鹽類は、之に反して遅く且つ僅かに吸收せられるのみである。

鹽類の吸收速度は、その構成するイオンの吸收速度に關係し、同時に移行度となるから、カチオンに於ては Na^+ 、 Li^+ が何れも速かに吸收せられるが、 NH_4^+ 、尿素は前者よりは尙早く、 Ca^{++} は徐々に、 Mg^{++} は最も遅れるものである。

る。アミオンに於ては Cl^- が最も速かにして、以下 Br^- 、 NO_3^- 、 F^- の順位となる。 Mg^{2+} イオンは腸に於ては必ずしも絶対不透過とは限らない。然し鹽類は各個別々に溶解せずして混同してゐるから、滲透速度と吸収速度とに就いては、イオンの速いものと遅いものとの混合する場合、硫酸イオンの吸収遅きものも Mg^{2+} イオンの滲透速きものと連絡すれば割合に善く吸収せられる。此際鹽類溶液に吸収の易きアニオンの Cl^- イオンが在れば、 Mg^{2+} イオンの吸収は變らない。かくて、吸収し難き鹽類は吸収し易き鹽類の吸収を阻止するもので、この事實は同一泉質でありながら、その効果に差異ある所以を説明し得るのである。

減緊張性の泉水は緊張性水よりも意義あるものであつて、常に滲透性壓力に關係するのみならず、固形成分の性質にも由るものである。

泉水を内用すれば、血液にも影響する所となり、殊に鐵泉、砒素泉水は赤血球数を増加し、血色素を濃厚となして、造血は良好となる。鐵泉は恐らく造血に刺戟的效果を齎らすもので、細胞に障害すること少く、再生を促進し、砒素水は骨髓造血細胞の増殖を振興する直接作用がある。

泉水は尿量及び其性状にも働く所がある。各泉殊に炭酸泉、又冷泉は利尿を促し、腎臟機能の増進は常に泉水の通過を早からしむるのみならず、體質變化、析出水、鹽類、有機性代謝産物を促すのである。鑛泉の主要なる點は尿の尿酸溶解があることで、アルカリ泉には尿酸溶解の特徴が殊に顯著である。

体内の石灰分に就いては近時注目せられるに至つたが、カルク含有鑛泉を飲むと、血液及び尿が著しくアルカリ性となることは酸が減退するからである。故に含カルク水の效果は尿酸の素質のものに有效となるのは固よりである。又血液凝固が促されて、血管から血漿及び血球の外出を止め、炎症分泌、毒性肋膜分泌液、浮腫、皮膚疹等を治するか、少くとも輕快せしめる。その他カルチウムイオンの滲透の遅きことは、腸管に働いて腸管の分泌を阻止し、その運動を抑制し、遂には便秘となる。

又血壓に就いては今尙論議せられるが、或る鑛泉では、その含有鹽類と温度とによつて多少の效果を示すものである。炭酸泉は血壓よりも心臟機能に作用し、淋巴流が高まり利尿が多くなり、腸運動が増進し、そこに壓力が増して血管系の壓を降下せしめ、心臟の働きを容易ならしめる。鐵泉は造血臓器に働いて、赤血球を増し血液の状況を良好となし、心臟筋肉の榮養に及ぼすのである。

飲泉は又呼吸器系にも働くもので、アルカリ泉は、氣管枝分泌を弛める効果がある。

泉水を規則正しく飲めば新陳代謝の變更を招致し、一般に代謝速進を齎すのである。但しその作用機轉に就いては、消化器に泉水が働いた二次的のものであるか、或は直接に特種の効果があるものかそれは未定説である。

時に飲泉の結果、恰も酒の二日酔の如き現象が起る。之を温泉當りと云ふが、炭酸瓦斯の腦神經に及ぼした一種の軽い中毒である。 Mg^{2+} イオンが Ca^{2+} イオンより多いときは、交感神經中樞の亢奮を促すものである。

カチオン系ではカルチウムが目立つものである。その鹽類は僅に吸収せられる、カルクは細胞を膨大し細胞膜を密ならしめる。

鐵が造血効果を營むものであるとは、多數の研究で確實とせられてゐる。泉水の鐵は二價のフェロイオンと三價のフェリイオンに分れてゐる、そして前者が後者より効果あるものとせられる。

硫黄は物質代謝を充め、カリウム、カルシウムが多量に排出せられるときに、ナトリウムの蓄積を促し、皮膚からカルシウム、マグネシウム、ナトリウム及びカリウムの七〇%が排出せられる。

以上の説明は如何にも多岐多様に涉り、纏まりがつかぬやうに思はれるから、結論的に、温泉の効果を摘録しておかう。

一 温度 温熱は消化器の粘膜内に在る血管を擴張し、血流を強めて動脈性充血を現はし、その結果吸収がよくなる。

寒冷は之に反して血管を收縮し、血流は乏しくなるから吸収が不十分となる。

又温熱は胃腸の運動を弛め、寒冷はこれを促進するから、排出が遅くれ或は之が早められる。

體腔及び組織の吸収機能に、血流が温度によつて之を左右することは、有名なビールの實驗があるが、温度の消長は分泌液の吸収に影響すること著しいものである。

二 攝收水量 飲水すると、細胞内に流入し更に流出することから、新陳代謝に良好の影響を及ぼすこととなる而して滲濾性緊張の差の高き程、組織の膨張を來す。胃粘膜には腸粘膜よりも飲水の影響が少い。

三 鑛泉の物理化學的影響

(イ)炭酸は鹽酸分泌及びその構成を促進し併せて胃運動を充め、且つ粘膜の充血を招致するから、水溶解物質の吸収を良好となし、利尿は多くなる。

(ロ)過緊張の泉水は胃内容を濃縮し、低緊張性のものは之に反して低下せしめる。

水の透濾力によつて、胃腸の上皮は抵抗力の弱い爲めに剝離されて再生を新にする。即ち慢性胃腸炎の治療する所以である。又、體質の崩壞物が除去されて更生に効果を致すのである。新陳代謝障害、肝疾患、腺病等が癒る。

鹽類刺激、就中過緊張泉は消化時に際して血管を擴張せしめ吸収を可良とし、腸管腺の分泌を促進し、その他蠕動を高める(便通を良くす)。又過緊張性溶液を吸収して血液の濃度異常となり、利尿は多くなる。四―五%食鹽溶液は腸粘膜を糜爛せしめる恐れがあるから、一・五―二%の濃度を飲泉度とする。

鹽類の吸收度はその構成するイオンに關するもので、カチオン系の K 、 Na 、 Li は同程度に、 NH_4 は早く、 Ca 、 Mg は徐々に吸收せられる。アニオンでは Cl が最も早く、 Br 、 I 、 NO_3 はその次位に在り、 SO_4 は最も遅い、天然の鹽類泉ではイオンの早遅を相交ふるものである。 SO_4 イオンの流出作用は鹽刺激と腸に水の溜滞するに基づくのである。

(ハ)土類カチオン(カ)は腸の分泌と蠕動を抑制する(下痢を止む)。又末梢神経の亢奮を抑制し、炎性分泌作用を除き(肋膜炎滲出液浮腫、皮膚發疹の治療効果)、血液、尿のアルカリ性を強める。

五

泉水に含まれる瓦斯及び粉末状の水霧は、吸入に使用せらるることがある。そして此吸入が呼吸器に特效を奏することは敢て珍らしくない。泉水が發散するとき空氣と共に上氣道から肺臟の奥深く肺胞にまで到來するから、氣道に水分が働いて醫效を現はすことは容易に考へられる所である。又學者がこの方面に研究を重ねて實證してゐるから、毫も疑ふべき餘地はない。泉水の水霧が吸氣と共に呼吸器の病的障害あるべき所にまで進入するやう、特別の装置を仕懸けて行ふ場合がある。即ち室内に水霧を放送して充滿した室で呼吸するか、又は特別の孔口を作つて、恰も吸入器の如くに水霧束を放射して吸入するのである。

吸入用に食鹽泉を擇ぶが、それに炭酸を混ざると効果が多い。又硫黄泉を用ふることもあるが、それは硫化水素の吸入を求めるところである。

炭酸瓦斯の少量を混へると、呼吸道の粘膜が強く刺戟せられ、毛細管充血を招致して分泌を促進する效がある。炭酸は大氣中にも混在してゐるが、一四%となると既に苦悶を發するから、四%になるやうに注意すべきである。炭酸瓦斯吸入は慢性喉頭炎、氣管枝カタルに奏效し、粘稠濃厚の粘液が大量に排出せられる。又慢性アングーナ濾胞性喉頭炎に奏效するが、然し肺結核及び出血素質、肺充血あるものには禁忌である。

土類泉に含まれる窒素も吸入に應用するが、その効果は目立たない。吸入空氣を薄くしてその含有酸素量を寡くし、呼吸の必要に應ずるだけに増量すると効果が現はれる。然し必要酸素に代へて窒素を多分に用ふれば、酸素缺

乏に基づく有害作用を起すものである。

窒素の加減を適當したときには、特に吸入に努力せずして刺戟性咳嗽もなく、呼吸が深くなり、血行が調整せられる。窒素吸入は咳嗽を沈靜し、神經の興奮を緩和する效がある。

硫化水素は炭酸及び窒素と混和して用ひ、又水霧と共に吸入することがある。前者の場合はまづ炭酸の爲に粘膜が刺戟せらるゝも、やがて窒素と硫化水素とで沈靜せられ、痙攣的苦悶する咳嗽が良くなり、祛痰が樂になる。水霧を共に吸入する場合、例へば硫黄泉に漬つたときなどには、その作用は軟らかに働いて、沈靜の效があるから、呼吸器の炎衝、神經性咳嗽が緩和せられ、祛痰も樂になる。俗に痰の湯と云ふのは硫黄泉で、硫化水素の吸入が容易から名づけられたのである。硫化水素の吸入が奏效するのは、喉頭、咽喉、氣管、氣管枝の慢性炎にして咳嗽の特に劇甚なる患者である。

アルカリ泉の泉水も吸入に用ひられる、その他アルカリ炭酸泉、食鹽泉、鹽類泉、硫黄泉など、何れも咽喉、喉頭、氣管、氣管枝の慢性カタルに應用せられ、泉水を水霧状にして吸入することによつて、粘膜の腫脹は減退し、分泌は稀釋せられ、溶け易くなりて樂に咯出することが出来る。

吸入の方法には個人用の霧吸入器あり、又多人數が一夕所の室に籠つて吸入する方法もある。多數者が大室内に集ると、吸入時間も倦むことなく長時間續けても堪へられる利益がある。

佛蘭西、獨逸には、水霧状浴の特別装置があつて、全身裸體で霧浴をとると、皮膚の表面に霧滴が當り、神經を

静め鬱血を散じ、充血が少くなり、分泌を去りて爽快を覚えさせる。

日本には残念ながら吸入は家庭吸入用のみが行はれ、廣く眞に醫藥的に應用せられてゐない。

六

泉效上、必要な他成分が存在するものなることは明かでありながら、未だ研究の遂げられざるものがある。リチウムの尿酸溶解性の如きは不可思議とも謂ふべきもので、尿酸リチウムも水溶性であるのに、若し他のイオン、殊にナトリウムイオンが存在するときには、ナトリウムウラートとなる。体内にナトリウムイオンは豊富であるのに、リチウムの尿酸溶解性は話にならない。リチウム含有泉はアルカリ泉に屬するから此性能を發揮し、少量のリチウム含有に拘はらず、痛風などに特效を奏するのである。

温泉の效果に關する學理的研究に幾多の學者の努力は大なるものがあつた。しかし未だ實際に臨みて明白に攔む所の少いのを遺憾とする。泉水の個々の成分に就いて效果を討究しても、それは無用なるか、或は效果の少い業績で、寧ろ一泉水全體としての生理的藥物學的の研究を行はねばならない。今日に於て漸くその氣運に向いて來つたので、例へば炭酸泉とリンゲル液との比較、或は食鹽泉とリンゲル液との比較を研究して、變つた成績を擧げて來た。更に考ふべきは、飲用時に於ける体内性イオンと異物體イオン(炭酸、硫化水素、硼酸等)の關係の連鎖である。斯る方面から進むことによつて、泉效の學理の祕密は發かれるのであらう。

最後に人工温泉と天然泉の比較を一言したい。今日精巧なる化學分析の結果から、温泉の成分と同様なるものを

求め、泉水の物理化學的性質及びコロイド化學的状況、解離度、カタリセ性能、結晶水を結合せしめた人工泉は、天然泉の如く機能を發揮するものであらうか、この問題に對しては遺憾ながら同等なりと答ふることは出來ない。人工のものは自然界の要素の一部を造化したに過ぎないから、部分作用はあらうが全貌を示すものではない。部分作用が集つたからとて、必ずしも全體のものとはならない。温泉の作用は單價である、小なる部分的作用の集合體ではないからである。自然はあくまでも自然である。

氣候療法

如何なる場所に於ても、刻々吾人に影響を及ぼして居るものは氣候であらう。氣候と氣象又は天氣とは全く相異なるもので、決して兩者を混同してはならない。氣候は場合によつてはその土地でも之を避け得られるもので、不良の天氣には外出を中止するとか、又着物を重ねて寒い天氣は防ぐことが出来るが、氣候はその地方に特有なる狀況を現はすものであるから、その氣候を避けんとせば、他に轉地するより仕方はない。氣候と氣象とは似つかぬものである。地球面上の或る地面に於て隨時に起り、時に多少の變異あるも、概ね一樣に反應して現るゝが如き大氣の一位相を天候と謂ひ、その天氣を綜合したる長期の平均常態を氣候と云ふ。

氣候の要素となるべき温度、湿度、風向、風速、雲量、降水量等の現象を現す媒體は地球を取圍む氣海である。氣候に起る現象の變化異動は地理的關係に著しく支配されるもので、即ち風土を作る。海が近いか或は遠いか、或

は平地の地形か、或は山岳重疊の地方か、此等によつて氣候が異つてくるから、高山氣候、海上氣候（海濱氣候）、平地氣候、中高山氣候、森林氣候、盆地氣候と様々に分れてくるが、その閾界は必ずしも判然とするものでなく、又この分類に氣候が必ずしも當て嵌められるとも限らない。或る場所や、位置によつて、緯度を同じうしても特殊の氣候となる。又山岳の東側と西側とは同高の地域であるとしても、氣候的には著しい差別がある。東側では氣温が涼しく、風が多い、西側では濕潤した氣候となり、霧が多く、曇り勝となる。又南側と北側に於ても同様に兩者間の區別が甚しいのである、それは場所によつて一樣でない。殊に南側は冬季にても日光を強く受けるのである。

上述の如く、氣候の要素は、地方的特殊關係又は地理的位置の例外を除けば、氣象の因子と同一であるが、氣候の記録は、必ず主觀的要素を持つて居らねばならぬ。即ち人類、或は有生物、動植物との關係である。それに就いては、各現象の質及び量の相互を關係よく排列し、系統的に分類するのであるが、各現象は又氣象の因子となり、氣象學と氣候學とは相通じて異なることないやうに見えるのである。

氣壓は天氣との關係が深い、氣候學上には餘り干渉する所が少い、氣壓が動植物の生活に影響することは殆んどない。それには、たとひ氣壓の異動が起るとも、極めて徐々に行はれるから、左程に感じないが、急變する場合には健康人でも反應を現はしてくる。氣壓は之に釣合ふ水銀の高さを耗にて示し、土地の高度によりて水銀柱は低減するのである。氣壓は平地でも一日に多少の低減を來し、又一年に於ても變化する。即ち午前及び午後十時前後に最大、午前及午後二時に最小となる。その較差は平均三耗を越えない。又一月、二月には高く、七月及び八月に

は低い。日本内地の平均氣壓は七百六十耗で、冬季には平均七百六十四耗、夏季にては平均七百六十耗である。又朝鮮、滿洲は内地よりも平均氣壓は高く七百六十三耗である。

平地に於ては氣壓は著しい影響を示さざるも、氣壓の低減五〇〇耗以下となる時は反應を呈するもので、脈搏、呼吸數の増加、呼吸の深さの増加、心臟機能の亢進を來し、又酸素の缺乏から血液中の赤血球數が著しく増加し、全身機能及び物質代謝の増進を促すのである。而して氣壓が急速に變化する場合には反應を起すもので、例へば平地から急に高山に登攀するとか、又は高山から盆地に下ると所謂山嶽病なる現象を呈する。即ち呼吸促進、眩暈、昏倒、衄血、咯血等が起るのである。尤も此作用は體質、習慣により異なるもので、平地に居住するものが、高山に移るにその住所を次第に高くし、馴らむに従つて上昇するときには、何等の影響を蒙らないものである、アルプス連山の三千五百米から四千米の高さに至るも、未だ高山病に罹るものが少いと謂はれてゐる。これはつまり、漸次高壓に對する馴合が熟するから、危険はないことになるのである。

之れよりも生物に強く影響するものは温度である。温度は氣温と日温とに分つのである。氣温と日温とは互に密接なる關係を保ち、日光の照射なくば空氣の温みはなく、空氣なくんば温度はない。高山に於ては空氣が純粹であるから、地上に達する日光の強さは大で、紫外線に著しく富んで居る。日光の直射する所と蔭の所では、温度に二倍乃至三倍の差が起つて來る。

氣温は一日に於て高低の差があり、又一ヶ月に於ても昇降するから、平均氣温を以てその土地の氣温を示すので

あるが、詳細に検すれば、晝夜に於て温度の差の大なる所もあり、又小なる場合もある。吾人の望む所はその差異の小なることであるから、一日の最高、最低温度に注意せねばならぬ。温度と湿度とは人類に因果的影響を及ぼすもので、気温は同度なるも湿度が異なると、主観的感能は異なるもので、割合に気温が高い炎暑でも空気が乾燥すれば凌ぎよいが、湿度は低くしても湿度が多いときは蒸暑い苦しみに悩まされるものである。地上の空気は絶対に乾燥してゐない。微粒の水分を必ず含有して湿度を保つてゐる。然し空気は際限なく水蒸気を含むものでなく、湿度によりて異なり、湿度が高ければその容量も益々大きくなる。普通単位容積中に含まれる水蒸気量を以て示すもので、水蒸気が或る一定量に達し、最早やそれ以上を空気が含有せざる場合を飽和したと云ひ、飽和點は湿度につれて高まるもので、一旦飽和した空気も温度が高昇すれば忽ち乾燥し、温度下降すれば濕潤するが、實際水蒸気量が増減したる意味でない。空気中の湿度は水蒸気の重量又は張力を以て示し得るものである。言ひ換ふれば大氣の水蒸気を含み得る分量は湿度に比例して増大するから、水蒸気量に増減なきも温度の高低によつて吾人の感覺に差異あるは明かなること、例へば二十度にて飽和空気は一七・二瓦を含有するも、一度に於ては五・二瓦に過ぎないから、温度一度にして四・八瓦を含有せんか殆んど飽和に近く空気は濕潤するも、二十度となれば非常に乾燥となる。大氣乾燥度は現在含める水蒸気量と、同時に含み得べき水蒸気量との比、又は現在の水蒸気張力と同温度の最大張力との比を以て示し、百分率として、之を湿度と云ふ。前例を採れば、一度にて九二%、二十度にては二四%となる。乾濕の度を示す湿度計の目盛は%數を以て示してある。殊に、醫學上には比較的湿度飽差を用ふることがあ

る。即ち或る温度に於て空氣の單位容積中に現存する水蒸気量と、同温度に於ける飽和氣中の水蒸気量との差を示すので、觀測時の温度に於て空氣が飽和せらる可き水分に、現在その空氣が包容する水蒸気量(所謂絕對湿度)を比較したる比率である。地方の湿度の狀況を知るには、この比較湿度の如何を知ればよいのである。

湿度と比較的湿度に就いては學者間に論議する所あつて、比較的湿度に於ても温度を考察すべきを主張するが、通常吾々は比較的湿度七〇%以下を以て乾燥せるものと云ふのである。固より一日中に於ても時間に於て差あり、夕暮から夜間には湿度計は上騰する、気温が低下すれば湿度は増量するものである。

湿度が吾人の衛生に重大なる關係あることは、日常經驗する所であつて、濕潤寒冷なる天氣は健康上最も有害である。濕潤溫暖なる氣候は吾人に不快なる感を與ふること夥しいが、濕潤寒冷よりは多少軽い。吾人は一日中絶えず肺臟より皮膚より水分を排出する、その中には皮膚よりも蒸發するが、略ぼ肺臟呼吸量に匹敵するから、湿度一%の變化と雖も、その蒸發に著しい差異を生ずべきである。その水分の發散が困難なれば、濕熱の放散が妨げられて、餘分の水分と濕熱を體内に保有し、濕潤寒冷の氣候にありては濕熱は直接外界に放散せらるゝに反し、濕潤溫暖の場合には濕熱は體内に鬱積して壓迫感を覺え、身體弛緩倦怠となり物質代謝は不進となり、消化力が減退する。空氣乾燥は體内水分を發散し、濕熱も發散も多くなる、砂漠地方の住民が殆んど堪へがたき高温に浴しながら、能く勞役に堪へ得るも乾濕度の關係の如何を知るものである。

更に気温と共に人體に及ぼすものは氣流即ち風がある。大寒にても風が吹かざれば割合に堪へ得られ、夏季の濕

潤したる気温の時には、一陣の涼風によつて生々した氣分を得るのである。

大氣の變動する主因の一として、氣海内の運動、即ち氣體の流動がある。その現象を風と稱し、氣層の大小が位置を變動するが、その變動に最大の影響を與へるものは海陸の配置である。蓋し晝夜、夏冬に於て、兩者の間に温度の差異があるに基づくもので、海風、陸風と別けることが出来る。又場所によつて極地風、熱帯風にすることも出来る。又風向の季節によりて變更するものを氣候風と稱する。本邦冬季の氣候が寒冷なる大陸性を帯びるのは北西風の吹く爲めであり、夏季には海洋から温暖の風を運ぶのである。又山岳地方で、夜間溪谷より空氣の冷却する山頂に向つて氣流が流れ、それによりて谷風又は山風を生ずる。海濱湖岸は、夜間には温暖なる水面から冷却せる地面に暖風が動き、晝間は之れと反對に陸より海に流れる。

風の人體に及ぼすことは、皮膚面より急速に温熱を奪ふのである。風力の強い低温は人體に屢々有害となり、皮膚の抵抗弱きものには寒冒の原因となる。之に反し、緩和なる氣流は精神を爽快となし、疲勞を慰し、皮膚には適度の刺戟となり、健康上に効果を齎す所が多い。氣流は空氣中の塵埃汚物を他に運搬し、地方を清淨にすることもあれば、却て不潔とすることもある。氣流の通過に際し各氣流の出遇ふ所に於ては、一定の疾患例へば喘息、リウマチスムスを招き、或は疾患の素質を作り、面白からぬ土地となつて不健康地と見做される。

上述の氣象各現象の外、生物の生活に極めて重要な要素即ち放射線を忘れてはならない。太陽、天空及び地面から放射する温熱は大氣の温度の主因である。太陽の放射を日射と稱する。太陽光線をプリズムを通過せしめると

各波長のものに區別せられて、所謂七色光を呈する。即ち赤、黄、橙黄、綠、青、藍、紫である。そして各色は互にその性質を異にし、赤の近く、及び赤の外端には熱線を含み、他端の藍、紫、及びその外方には化學線を有しその中間は照輝線に富んで居る。日光に照らされると、皮膚は銅色の如く輝いてくる。毛髮、爪の發育は旺盛となり、血球數は多くなり、物質代謝が増進し、發汗及び排尿も多くなるなど、生物に及ぼす所ものは著大である。

日射の測定は緊要なることではあるが、未だ完全なる測定器の完成したものが無い。日射の地表に達して、その土地の温度を上昇せしめるのも地形によつて異なり、水面は地面よりも温度の上昇が遅く、綠地は裸地よりも遅い。而して地面から温度を反射し、地方の温度を左右することは大きい。更に一たび地面が日射によりて熱を受けると、又表面から放熱する。土地は水面に比すれば熱を吸収することが速いが、又地面から放熱することも速かである。

中空に懸る薄雲又は散亂雲等は太陽の光を反射することが甚大であり、又この散光の化學的作用に富むことは注意すべき事柄である。日光の生物的作用に及ぼすことは多大のもので、その詳細のことは拙著光と生物を参照されたい。

一地方の氣候には幾多の要素を含むのであるが、その要素の關係は略ぼ同等であるとするも、地方の地理的位置によりて左右せられる所が多い。盆地、高地、傾斜面などはその好例で、それら、氣候的關係を異にするから居住の選擇には豫めその地方の氣候的知識を備へて置かねばならない。一地方の氣候に伴ふ自然要素の關係は複雑で、

人體に及ぼす作用は頗る特殊のものとなる。然し、まづ大略、地方の地理的關係によつて、海（海濱）、平地、中間高山、高山、森林に基準を作る。固より之れによつて氣候型を直ちに定むることは嚴格に謂へば早計の非難があるも、實用上至便なる所から、通常レンケ氏の分類法に準據してゐる。

一 海洋氣候 之を更に細別すれば、海濱氣候、海洋氣候とに分れるが、一般に天候の急劇に變化せざる所で、内地よりも夏冬に於ける氣溫の差異は少く、酸素に富み、海波の飛散によつてクロール、ブローム、鹽類を混和し海風陸風は規則正しく交互に流れ、常に新鮮である。海洋氣候は海流によつて支配せらるゝことが夥しく、黒潮に洗はれる本邦沿岸の、冬季に於て溫暖なるは著明なる事實である。本邦の如き島國にありては、海洋氣候の選擇には注意を要する、殊に夏季は一般に炎暑甚しくなるが、冬季には溫暖乾燥となり、虚弱者にも適する。原榮博士が製鹽事業の盛なる地方を一般に海洋氣候の良好なる基準とせられるのは卓見である。同地方は晴天多く空氣も比較的乾燥し、日光の照輝も多きを推定するに難からずと説いてゐる。

二 高山氣候 海拔一千米以上の高地の氣候を謂ふ、その平均溫度は平地よりは低いが、低地より屢々溫暖なることがある。海岸よりは氣溫の昇低が甚しく、溫度は低いが變動があつて殊に夜間には高くなる。日光の照射は強く、紫外線に富み、空氣は稀薄となり塵埃を含むことはない。氣壓は低いのである。高山氣候の人體に及ぼす中にて、氣壓の減少は主なるもので、呼吸は深くなり、脈搏は多くなり、白血球は増加し、血流循環は促進せられ、食慾は増進するのである。

三 中高山氣候 一千米以下の高地の氣候で、谷風、山風による氣流の變動が多い。地理的位置、方位の如何、周囲の地勢によつて、その土地の氣候は著しく支配せられる。同一の海拔高さに於ても、山嶺の高さと平地に聳びゆる孤峰とは、全く異なりたる性状を現はすものである。

四 平地氣候 四百米以下の地を云ひ、氣溫、湿度は晝夜によりて差があり、季節によつても異なる。密林ありて風を防ぐが、又谿谷に沿つた所では氣溫の變化は少い。殊に海洋を去ること遠からぬ地方では、氣溫は比較的平均を保ち、夏季には大氣が變換せざる爲めに陰鬱の傾きとなる。

五 森林氣候 森林と氣候との關係は從來學者が論議する所である。森林は地面を覆ひ、放射すべき部面を増加し、蒸發面は増大し、雲霧の發生を饒多ならしめて溫度の變化を緩和ならしめる。森林地帯の空氣は清淨にしてオゾンに富み、防風帯を作るから空氣浴に適する。

六 砂漠氣候 日本には求む可からざるも、特殊の氣候性質を有し、乾燥にして清淨に、また溫暖を帶び、晝夜の溫差は甚しい。日光照輝は強く、且つ長いのである。

以上氣候の一般の概念を紹介した。氣候療法は古くからの經驗の上に築かれて、それを科學的に説明するのであるが、未だ眞諦を得ざる所があり、従つてその選擇には十分に誤りなきやう注意せねばならぬ。

一言に轉地と云ふも、果して轉地の效果に就いて、幾千の知識あるかは疑はざるを得ない。轉地必ずしも永久の效果を擧ぐるものでなく、又轉地によりて却つて疾患の増進することもあることは、轉地即ち氣候療法と居住地變

更の單なる轉地とを混同し、又疾患に對する氣候要素の條件を深く討究せずして、漫然として他の地方に移住することを以て満足するからである。故に所謂轉地をして一時良好の轉期となり、百日咳の小兒の如きは急に治癒するも、その多くは一時的で永久の效なきものがある。合理的の轉地によれば、療養の效果は永久のものとならねばならぬ。従つて轉地には氣候要素の點のみならず、それが自己の疾患に適するか適せざるかを考量すべきである。更に病者の個性、性格をも顧みる必要がある。或る者には満足せらるゝ土地なるも、他者には却つて不滿なることがあるから、決して輕卒に判斷すべきではない。

氣候療法の適應症として、まづ第一に指を屈するものは肺結核である。結核の氣候療法の選擇は極めて慎重に行はねばならぬ。同一の氣候に在りても、患者の體質、病勢の如何によりて、その効果は必ずしも同じからず、甲患者は輕癒するも乙患者には反つて増悪の傾となり、實際的にも困難なるものである。適當の季節に、適當の地方に隨時移ることは良いが、又病者の體質によりては、年餘を通じて同一所に止むるも良い場合がある。

喘息は轉地によりて著しく良好となり、喜んで郷關に歸るや再起することがある。若しかゝる適當の地方を發見せば、その所に永住する覺悟が必要である。

腺病患者は海洋氣候、森林氣候を擇ぶべきである。患者の過敏ならざるものは高山又は中間高山氣候を適當とする。外科結核は高山氣候が最も良好なるものである。

貧血は高山氣候によつて治癒すべきである。なるべく階級的に漸次登山し、數日づゝ滞在して氣候に馴れ合ひて、

次第に山上に達すべきである。全身の機能を充進し、血液造生の機能を催進する效がある。

動脈硬化症のものは、高山氣候療法を避けて、森林、山間氣候を擇ぶべきである。その他、消化器病者は、夏季には山間氣候、森林氣候を可とし、冬季には海濱氣候を擇ぶべきである。これによつて消化液の分泌を促進し、頑固の消化障害も恢復する。尙且つ消化器病患者が食養療法を嚴守すべきは當然である。神經疾患の中、過敏症候のものは緩和なる氣候を必要とし、他の患者には高山氣候を良とする。一般に周圍の環境と患者の嗜好とを考慮して選擇すべきである。精神病者が山深き瀧に打たれるのも、崇高雄大なる自然の偉力によつてその苦惱を轉ずるにあるのである。バセドウ病の如きは高山氣候によつて良好となる。

重病後又は心身疲勞後の恢復を計らんが爲めに氣候療法を施す場合は多い。氣候の刺戟作用を利用して恢復力を強めるのである。

温泉治療各論

消化器疾患

胃腸系の疾患治療には、入湯の外、飲泉療法がある。飲泉療法は入浴萬能と心得てゐる邦人間には餘り重視されてゐない。まゝ飲泉することあるも、多くは入湯の折湯口からコップに汲んで手當りに數回から十數回に互つて飲んで、満足してゐる。飲泉の時間、泉水の温度、飲み量などは、全く等閑に附せられてゐる、飲泉効果は斯る手段では決して現るゝものでない。能く胃腸疾患の状況と、之れに適應する泉質の知識を豫め求めて置かねばならぬ。飲むにも適量が必要である、而して泉水を極めて徐々に飲むのである。日本温泉協會指定の飲泉コップがある。通常飲用に供せらるゝ泉水は

- 一 アルカリ泉屬、單純アルカリ泉、炭酸瓦斯含有アルカリ泉、食鹽性アルカリ泉、石膏性アルカリ泉。
- 二 食鹽泉屬、炭酸食鹽泉、石膏性食鹽泉。
- 三 苦味泉。芒硝泉。

胃腸には入浴よりも飲泉法が、一層必要である。前述する所と重複する嫌あるも、各泉の胃腸に及す作用の概略を記して置かう。

アルカリ泉は胃の鹽酸を稀釋し、一部は之を中和するのが主なる作用である。従て胃粘膜に働きて、胃粘液を溶解し、胃酸分泌を制止し、酸度を弱くし、幽門攣縮を緩和す。食後一時間半乃至二時間過ぎに、アルカリ泉水を飲めば胃内食餌滞在時間を短縮する。此場合必ずしも大量を攝收する必要はない。蓋し、胃内に乳糜が充實せるときに、アルカリ泉水の大量を收容すると、未だ消化の働が十二分に現れざる内に胃は空虚となる。又中和したる胃酸はアルカリ泉水により、クロロイド及び炭酸瓦斯を生成し、新に酸を作成して目的に反したる結果となる。更にかゝる胃内容物は化學的作用を受けず、唯その食餌塊の刺激によつて酸緩和を接くるのみである。

若し前夜より残留せる胃内容物の洗滌の目的に、朝起床前に二〇〇—三〇〇㊦の泉水を暖めて炭酸瓦斯を驅除したる後、徐々に緩るゝと飲むか、或は一〇〇乃至一五〇㊦、半時間隔きに二度に飲めば、効果がある。

胃排出時間の遅くることが反射的のものであつて、器質的變化に由來せざる場合なれば、晝食後二時間を経て、一〇〇—二〇〇㊦のアルカリ泉水を飲み、且つ左側臥すると、刺激せられ易き幽門附近の胃部は暫くして軽くなり穩になり、又胃底に滞積した胃酸は稀薄せられ、幽門に瓦斯泡が溜る。而して十分—十五分後に更に半右臥位をとると、稀釋せられた胃内容は、弛みたる幽門を経て十二指腸に流通するのである。

アルカリ土類泉は抗炎症、鎮靜性を現し、酸結合力を示す。これはカルチウムと少量のマグネシウムとを含有す

るからである。即ち胃酸と結合してマグネシウムクロリド、カルチウムクロリドを作成す。此兩者は何れも小腸に於て一部は炭酸に移行し、小腸及び盲腸の醱酵作用によりて殊に生成せられた脂肪から游離脂肪酸を奪取して、その刺戟による慢性炎症衝作用を除き、下痢を抑止するのである。

又カルク鹽類も胃腸に働くことの多大なるものありて、炎性變化せし粘膜異常を緩和し靜穩に導くから、カタル性炎症衝に奏效することになる。その他、表在性粘膜炎衝による分泌過多を制止し。又組織の炎衝に對しても之を緩和する效力を現すものである。

食鹽泉水は前述の如く、過緊張、正緊張に分けられる。過緊張性泉水は刺戟作用を招くもので、一・一・二%以上の濃厚強食鹽泉水を飲むと、幽門は閉鎖し、胃分泌も増加する。若し此強食鹽泉水を大量に飲むと、嘔氣を催すものである。海水に游泳した際、誤ちて海水を嚥んだとき屢々胸が悪くなるのである。少量なれば、酸分泌を援けるから、弱酸性の場合、例へば神経性胃弱酸、又は胃炎が宿痼となつて胃内分泌機能の弱き人々が飲むと効果が現れる。食前五廻〇を一回又は二回に分飲するが良い。泉水温度の冷きときは分泌機能を刺戟す、この際炭酸瓦斯が含まれて居れば一層効果的である。器質的の弱酸に悩む人も、少量を空腹時に攝收すると奏效し、又食慾不振の場合にも同様效能がある。更に腸管に於ては、水分が増えてくる、又腸粘膜を刺戟して腸蠕動を亢進さす。

均等及び低緊張性食鹽泉には遊離炭酸瓦斯を含有するものと、然らざるものとあり、又石膏を多少含むものと、之を缺くものがある。本泉は胃腸の病的粘膜炎衝に對して效果的に作用するもので、日々一五〇乃至二〇〇噸を一回

或は二回に分ちて空腹時に飲むときには、格別、刺戟を招起することもなくして、弛緩せる胃状態に在つても、ペプシン分泌を強めるのである。此泉水の良好なる結果を呈するのは、低緊張水の酸イオンが透竅吸收せらるゝ結果なるかは、活ける組織には確的に説明し得ざる所であるが、又或る學者は、本泉には少量のラチウムを含有するに基くものと主張するが、是亦空中樓閣を描いた説明で眞實にはない。何れにしても臨床上の立場からは、この效果的事實を特に究むべき必要はそれ程にないと思ふ。

胃を刺戟せず、又胃液を稀釋し、内容を融解する一般的作用のあるのが、本泉の特徴とも謂ふべきである。胃腸カタルのみならず、他の慢性炎症衝にも本泉は近時賞用せらる。本泉の大量を攝收するから自然消化器に廣く働いて、胃内容の溶解を援け、一般作用を良好ならしむるのである。老廢物を排出する低緊張性泉水は、胃腸病の外、慢性炎症衝の醫療に供せらる。又食鹽減少榮養法と同様に此泉水によつても餘分の鹽分を除去する效がある。又本泉は土類鹽を多かれ、少かれ、含有するから、體内にカルチウムを輸送す。更にリチウム及びマグネシウムによつてもカルチウムを貯蓄するに至る。而してカルクク的作用から慢性炎症衝に效く所以となる。

低緊張水を早朝飲めば胃洗滌の目的を遂げることゝなる。夜を越して滯積した胃内容物は、容易に腸管に輸送排出せらる。若し臥床前に胃洗滌を行へば、一層効果がある。

芒硝泉、苦味泉は純なるもの、遊離炭酸瓦斯を含有するものあり、又ナトリウム鹽類、カルチウム鹽類、マグネシウム鹽類を含有するものもあれば、更に石膏を含有し、それ等の作用効果を現すものである。石膏の少量を含有の

ものは胃粘膜の刺激を緩和し、炎衝に働いて良影響を與へ、消化を援くるから、石膏含有苦味泉は空腹時に飲むべきものである。又本泉は腸液、胆汁の排出輸送を援け、幽門疾患に賞用せられるのである。今二五%マグネシウム石膏八〇%を十二指腸消息子を以て十二指腸内に送入するに膽嚢は反射作用を蒙りて胆汁排出を促すから、石膏泉は古來から膽嚢炎、膽道炎、膽石の治療として喜ばれた泉水である。

石膏は腸管に於て僅に吸収せらるゝが、その大部分は他の液と共に腸内に残留し、腸内容を弛めて硬化を防ぐ効果があれば、便秘患者にして、それが器質的に基くか、又は神経性的のものであるかの區別なく、催下剤の効果を現すのである。此泉水を應用するに當りて、一回に腸内容を完全に空虚となすべきか、或は徐々に少量づゝ泉水を採つて、消化を正調すべきは豫め考へ置かねばならぬ。前者には濃厚なものを飲用す、此場合に、若し腸管に器械的障害なければ、能く便通を得るが、餘り濃厚なる石膏泉は腸粘膜を刺激し、且つ數回反復して飲めば、カタルを招き、或はこれが常習となつて、質的にも量的にも別段反應もなくなつてくる。之に反し均等性石膏泉水、即ち二五%の苦味泉にては、組織に強い刺激も加ふることなく、緩和的に働くものである。朝食前の空腹時に飲めば良い。その際、體温と同温度の泉水ならば、胃を速に流れ、半時間后には胆汁が旺んに腸内に流出し、別に緊張性疼痛も起さず、程よき具合に便通を催す下剤効果を現すものである。

腸管筋肉の強い收縮性攣縮による便秘に對しては本泉の効果は無いのである。かゝる便秘は横行結腸始部二分の一の邊から、下行結腸の下部の間に腸異常があつて、攣縮し内容推進は徐々に行はれて、飲泉するも、別に影響する所がない。寧ろ入浴によつて治療するが良いのである。

以上各温泉の消化器に對する一般作用を概述したから、各疾患にその温泉治療を述べる。

胃粘膜が萎縮したときには、乳糜が十分に出来ない。此場合に泉水を飲んでも胃液分泌は嵩まらないから、寧ろ先づ鹽酸ペプシンを服用し、榮養療法を行ふことが肝要である。患者は食慾不振に陥つてゐるから、強緊張性食鹽泉水を朝夕食前に飲んで、まづ食慾を促進せねばならぬ。又朝に均等性及び低緊張性食鹽泉水を攝つて、胃カタルによる粘液を除けば、胃壁粘膜は新鮮となつて活力を帯び、食慾は之によつて増進することになる。又石膏及びマグネシウム鹽類を含む泉水は腸管の排出力を援け、カルチウムを含有するものは、胃性下痢、輕き小腸カタル、大腸カタルから起る疼痛を緩解する。若し夕刻に此泉水にて胃洗滌を行へば、刺激が鎮まり、疼痛が弛み、安眠を得ることが出来る。

胃酸の弱いものには低緊張性又は均等緊張性食鹽泉、又は食鹽含有石膏泉を飲めばよいのである。

飲泉時は、一般に空腹時を撰ぶ。他の時間であると胃液を薄めて、消化力を鈍くする恐れがある。空腹時であると胃粘膜に直接働くから効果が現れ易くなる。

胃酸過多のものにても低緊張性又は均等緊張性食鹽泉を飲む。但し此泉水には炭酸瓦斯を含有するものがあるから、加温して瓦斯を放散して飲むが良い。又アルカリ泉も同様効果がある。食前食後の二回に飲むと共に前述したる體位を保つことが必要である。

胃及び十二指腸潰瘍の爲に出血して居るときには、温泉飲療は禁忌せねばならぬ。急性症を脱したる場合に至りて、飲泉すれば、保護的效果を奏す。その飲泉水には低緊張性食鹽泉水が適するものである。

胃下垂及び胃擴張には飲泉するも効果は少い。寝前に低緊張性食鹽泉水を以て胃洗滌すれば、粘膜を新鮮となし、胃の負擔を軽くし、胃部に快感を覺ゆるも根治し得ず。

神経性胃障害は全身障害の分症として現れる。此のものには低緊張性泉水を飲む。時に暗示的效果の顯著なることがある。此神経性胃障害は、時に器質性胃障害と誤まられることがあり、又器質的障害にも神経性障害を伴ふことがあるから、その診断を確的にする必要があるのである。而して患者には規則正しい生活を守らしめ、栄養に努め、而して少量の泉水を續けて飲むのである。

下痢ある場合には、まづその原因、症候を究むる必要がある。慢性下痢は、腸管炎現象であり、小腸、大腸の何の部處にも限局して炎衝が起る。下痢に續いて、やがて便秘が起る。特に腸内容が長く滯積し、又は糞塊が不動となることが刺戟となつて、糞性下痢を催すことがある。この炎衝は大腸筋層までも犯してゐる。下痢にはアレルギー性下痢ある、例へば肺結核初期に現るゝことがある。又酸酵性乃至腐敗性消化不良は腸管粘膜のカタールを起し、粘膜のアルカリ性分泌から病的崩壊を易からしむ。下痢の場合には温泉療法、食養療法が共に重要なものとして、行はれてゐる。

泉水を飲むに、その症候は良好とするも、根本的治療を望み得ないことがある。従て飲泉療法は必然的のものといへない。唯刺戟せられ易い腸管の下痢に陥るのを未然に防ぐだけである。この目的に食鹽泉、アルカリ泉、若しくは硫化泉を撰ぶ。殊に後者を加温して飲むと效く率が多い。此等の泉水は腸管粘膜の刺戟を弛め、腸下部に在る内容物を軟くして、移動し易からしむ效がある。

又石膏含有泉は促緊張作用があるから、鼓腸を制止し、又過酸の傾向あるものに制酸作用となる。食鹽泉、芒硝泉は、洗腸用の目的に大量を大口に飲んで、便通を開通せしむ。若し泉水の温きものを徐々に飲めば、却つて便秘を來すことになる。

大腸の攣縮性便秘並に運動に乏しい安逸生活から起る便秘には均等性芒硝泉を毎朝空腹のときに、四〇〇㊦を飲み、更に栄養に注意し、食餌を慎むことが一層效を現す。濃厚泉水は刺戟が強く、寧ろ有害となるものである。

長く便秘が續く慢性のものを治療するには、均等緊張性若しくは低緊張性泉水四〇〇㊦を、早朝空腹時に飲むと效くのである。此際大口に飲めば胃腸の蠕動を高め、それが腸管下部にまでも傳達して便通を促すことになるのである。

石膏泉は膽汁分泌を促すもので、膽汁酸が流れ、腸管蠕動を強める。冷泉水は温泉水よりも、一層良く働くものである。この際胃を十分に検査して診断を的確にする必要がある。

便秘は佳食した結果、起ることが屢々ある。又便秘すると腸粘膜を刺戟してカタールを起し、下痢を催すことがあるから、豫め醫師を訪ね、その原因を確めて貰つてから、温泉療法を行ふべきである。

胃腸疾患には、飲泉療法が主役であるが、尙入湯及び水治療法を併用する必要もある。更に氣候療法を兼ねて行へば、効果は益々顯著となるものである。

呼吸器病

呼吸器粘膜の慢性カタルには、アルカリ泉と食鹽泉とが、殊に奏效するものであるが、又アルカリ食鹽含有硫黄泉之に續いて效があり、更に土類泉も效くものである。

炭酸含有アルカリ泉には炭酸ナトロン、クロールナトリウムを含むが、そのカタル治療作用に就いては、未だ十分なる説明を缺くる所あるも、經驗上からは確定的である。炭酸泉水(人工的のものでも)を、牛乳に混へて暖めたる後ち飲むと、急性咽喉カタルに罹りて、咳嗽の激しい場合に、又慢性氣管枝炎に著しく良效を奏する場合がある。

アルカリ鹽類の稀釋液は弛緩した粘膜纖毛運動を復活することは、醫學上既知の事實である。而して粘液が容易にとれて、咯出するから、咳嗽發作は寛やかになる。アルカリ泉水に此作用が顯著である。又食鹽泉水は呼吸道粘膜の分泌機能を強めて、稀薄の粘液を旺かに排出する。此アルカリ炭酸泉を温き牛乳に混せて飲むのが良い。

アルカリ泉は聲音家、その他喉を使ふ人々の咽喉カタル、氣管枝カタルに賞用せられ、又蒲柳兒童の健康増進にも効果がある。従て氣候療養を兼ね得る高地温泉地を擇ぶべきである。

弱食鹽泉もアルカリ含有炭酸泉と同様に咯痰の多い氣管枝カタルに適し、又氣管の弱い虚弱者にも喜ばるゝ泉水である。小循環による血液障害、血行から來る咽喉、氣管枝カタル、その他、暴飲暴食から招致せられた慢性氣管枝カタルにも此泉水の效果がある。

食鹽を含む硫黄泉、土類泉も亦咳嗽、咯痰の甚しい場合に推薦せらる。殊に土類泉に窒素を含有せば、之を吸入用に使せば、一層有效となる。

小兒の咽喉カタルに犯されて、口蓋粘膜が腫脹し著しい苦惱を呈するとき、硫黄泉を飲むこと、四乃至六週間に及べば、之を軽くして良效を奏するに至る。即ち此泉水を朝の空腹時に小コップ一二杯、及び夕方にも一杯の泉水を飲むのである。冷泉水であると、硫化水素の不快感が餘りに氣に留らない。

飲用の外、アルカリ泉、アルリ食鹽含有硫黄泉、冷飲泉を吸入することがある。殊に此際窒素が共に吸入せらるると、咯血の傾向、化膿性氣管枝肺炎に效くのである。

肺結核の温泉療法を施すに際し、嚴格に注意して行へば、身體の健康を強め、榮養を恢復し、結核に對する抵抗力を増進する。殊に結核罹疾の素質あるものには豫防の働きとなるものである。土類泉及び硫黄泉に含有せらるゝ窒素又は硫化水素を吸入する場合に有效であるが、結核菌に働く作用に就いては、詳細を缺き未知の領域となつてゐる。しかし、泉水が結核に隨伴する氣管枝炎を治し、咳嗽を鎮め、肺充血を制限して、經過を良好とならしむるから、結核に對しても自ら制止作用を呈するのである。又泉水は消化を助くる結果、胃腸の機能を整調し、榮養を

高め、血行を良くするから患者の身體は丈夫となる。結核病竈が相當に蔓りて居るか、又年齢の若いものには泉水に據る効果の望は薄い、従て泉效は未だ罹疾期の浅い病勢の強くない場合に限らるゝものである。

結核病には入浴するよりも、寧ろ飲泉を試みるのが常用で、温い泉水を飲むべきであるが、炭酸瓦斯を含有する泉水であるならば、温泉コップに泉水を酌みたるまゝ暫らく放置し、瓦斯を離散せしめて飲むべきである。而して牛乳を混んじて飲むでも良い。泉水を飲むに、餘りに多量を探る必要はない、却つて消化を害することがある。

結核患者には消化を助成すべく、又榮養を良くする目的として、クロールナトリウムを必要とすることから、弱食鹽泉、アルカリ食鹽泉水を擇ぶが良い。此際更に氣候影響のあるべきを考量して、適當の高山温泉を擇ぶべきである。

蒲柳の若者にて、殊に腺病に罹り、衄血が屢々起り、榮養の不良となつた場合には、努めて氣候と温泉とに注意を拂つて嚴格に療養すべきである。又幼若者が肺尖カタルに罹つた場合にも、同様温泉氣候療法を兼行すべきものである。

慢性に進行したものにて、泉水によつて症候が輕減し、無熱となり、咯血も杜絶するに至る。空洞は飲泉法によるも消失しないが、肺尖浸潤は輕減し、濁音は消失するに至るのである。

純鐵泉は結核の疑を受けたものには、寧ろ避けるのが良い。鐵泉は血行を強めるから、肺充血を招き、咯血を促す恐れあり。

硫黄泉は肺尖カタルの治療薬として、吸入、飲泉及び入浴として用ひ、又併用することがある。佛蘭西學者は一般に呼吸器病に硫黄泉を賞用してゐるのに、獨逸側の方では、之に反して餘りに推選して居らぬ。我が國にては未だ確的な經驗がないが、時に奏效してゐる。一般に硫黄泉は、無熱であり、元氣が未だ衰へず、胃腸の働きが良く、下痢のない場合に勧められてゐる。硫黄泉は飲泉、入浴の外、吸入にも用ひらるゝことが多い。

結核患者の一般の入湯には、餘り熱くない、三十八九度の常水湯なれば差支ないと佛蘭西醫師は説いて居る、自分の經驗でも結核患者には必ずしも禁忌する必要はない。通常温るい水溫に四十二分から四十五分間浴し、浴後、直ちに身體を十分に拭き乾かしてから、暫らく安眠せしむ。浴後風邪を引かぬ注意することが大事なことである。而して食前に入浴し、隔日壹回の割でよい。餘り發汗がなければ、各日浴するも差支はない。

患者が入浴すると、輕い胸苦を感じ、脈搏も早まるも、二三分を経れば正常に復し、患者は却て快感を覺えてくる。浴後には咳嗽も靜まり、痰も輕くなる。病床に横るよりも、寧ろ浴中の方が爽快である。體溫も下行し、脈搏數も少くなりて、浴後まで持續し、呼吸は輕く、食慾は平素よりも進むから、患者は自から朗らかとなり、皮膚は艶を帯びてくる。又容態のやゝ悪いものですら、三時間位は浴後の爽快を續けることが出来る。經過の緩慢のものには發熱が低下し、盜汗は止むに至る。三四回の入浴後には安眠が續けらるゝに至る。

謂ふまでもないが、肺結核の氣候療法は頗る有意義のもので、温泉のみの療法よりは遙に偉效を奏するものである。

氣管枝カタルは肺氣腫を併發することがある、肺氣腫に起る呼吸困難を脱し、鬱積症候を軽くし、消化を援け、全身榮養を補ふ目的として、氣管枝カタルの温泉療法に準ずると、肺氣腫は善くなつてくる。又肺氣腫患者には消化器障害、門脈系の血行障害を伴ふことが多いから、温泉療法を施すと共に、森林地帯の空氣療法を兼ね得る温泉場を撰ぶべきである。殊に夏期には永く滞在することが結果をよくする。代償性障害を來したときには芒硝性食鹽泉を避くべきものである。

血行循環障害

西洋では、心臟病と謂へば、病症の如何を問はず、温泉療法によつて奏效するものと過信せられてゐる。かゝる情勢を促したのも、温泉療法を科學的に處理した賜で、これまで心臟病は温泉には適せぬものとの定説を打破した學績であつたが、過ぎたるは及ばざる諺の如く、餘り過信の弊不治の心臟病者が無理にも敢行する有様である。心臟疾患の温泉治療の成績は、その温泉療法に醫學的設備と醫師の嚴重なる監督を要するも、我が國にては、その手合の未だ整はざる爲めに、治療効果を擧ぐるまでには至らないのは残念である。今日の日本に心臟温泉療法を説くのは木によつて魚を求むると同一で、何等効果はない。

心臟病に各炭酸泉、人工炭酸瓦斯浴が行れてゐる。炭酸含有冷鐵泉、炭酸含有冷食鹽泉、炭酸含有食鹽泉、人工炭酸瓦斯浴等が通常用ひられてゐる泉水である。人工炭酸浴と天然炭酸泉とはその放出する瓦斯泡が相異なるもので

前者は粗らく後者は微かいのである。従て瓦斯泡の人體に及ぼす力學的作用、溫度及び化學的刺戟の働は多少異なる所がある。

心臟病の炭酸泉浴に對する適否を忘れてはならない。

急性關節リュマチスに併發した心臟内膜炎にて、未だ著明の障害を帯びず、唯、心臟の異常興奮、脈搏頻數、動悸、胸痛を覺えたる場合で、發病後未だ三ヶ月以上の經過を採つたときか、又は既に心臟瓣膜症を呈しながらも、尙調整作用が營まれてゐるもの、血壓低下、心臟肥大、肺肝の鬱血を起し、尿量減少、輕度の浮腫を呈せるものに、炭酸泉浴が奏效するもので、心臟の機能はよく調整せられて、恢復するに至る、泉效の持續力の永きことはジキタリス葉の効果よりも甚大である。

神經性心悸亢進のものには、食鹽泉によつて鎮靜が誘致せられてくる。初期動脈硬化症には土類炭酸泉が特效である。その他、間歇性跛行、特發性脱疽にも炭酸泉が用ひられてゐる。

とかく、我が國に於ては、温泉場に醫師の駐在もなく、浴客の温泉療養法に就いて相談もなく、監督がなく、浴者が勝手氣儘に入浴して、泉效を諳へてゐる有様であるが、入湯には必ず體質疾患の狀況を考慮し、入湯溫度にも注意すべきに、徒らに高温のものを悦び入浴心得も忘れて、長時間も浸つてゐる幼稚な、不規則なる温泉療法である。従て必然治癒すべき疾病の却つて温泉の爲に悪化することもあり、又治癒の早くなるものも遅々として快癒しないことにもなる。殊に心臟病の如き温泉療法の微妙なる働きあるものには、經驗ある醫師と相談し、十二分の監

督の下に浴すべきである。

神 經 疾 患

腦充血殊に飽食安佚生活者、或は亢奮し易いものに起る慢性のものは、温泉療法によつて皮膚及び腸管の方に腦の血液を誘導して、その苦惱を緩解せしむ。

心臟辨膜症より起る腦充血には苦味泉を良しとす。該泉は腸管に働いて、誘導効果を齎すものである。

美食飽逸の生活者に現る、腦充血、又副行血管充血、多血性肥滿者には芒硝性食鹽泉の冷泉水を飲むのである。

又食鹽水を飲むも良いことがある。時に泉水を使用する間に、却て不眠に陥り、顔貌の不安、耳鳴、眩暈等が現れて、患者は不安を覺ゆるも、これは一時的の發作に過ぎないから、敢て憂ふるに足らない、間もなく爽快の氣味が現れてくる。但し温湯全身浴併びに炭酸泉浴は避く可きものであるが、温足浴は寧ろ効果がある。

腦充血の習慣になつた者は、頭部を冷却しつゝ全身濕布を施したる後、續いて微温半身浴に沐せしむること數分間持續してから全身摩擦を行ふ。但し、此際強く摩擦することは適切でない。

腦充血に續いて不眠症に陥つた者には、夜間足浴を採つて、下腿を強く摩擦するか、又は長き靴下を半ば冷水に浸して絞り、之を穿いて、その上を更に乾燥したる繻帯にて取り巻いて寝ると效がある。

腦充血が起つて間のないときは、一切の浴法は危険である。麻痺などを後貽したときに、始めて温泉療法を施す

が良いのである。泉水の熱からざるものに浴するが、それにも頭部冷水器法を施して入浴するのである。

腦溢血後に殘留した麻痺には單純泉が著效である。凡て此場合の水温度は餘り高からぬものを賞用す。始め半身浴から始めて全身浴に移る、之れは外國人などに施されてゐる入浴法である。日本人にも餘り風呂を好かない人々に此法を試みるが良い。しかし、温泉療法による完全治療は必ずしも望まれるものでないが、年々入湯を引續いて行く間には効果が徐々に現るゝのである。

食鹽泉も同様に入浴せらるゝが、病症の舊くなつたものに限られてゐる。硫黃泉、土類泉には餘り期待せらるゝ効果は無い。筋肉の硬くなる場合には、泥浴又は砂浴を施行することがある。熱氣浴、蒸氣浴、海水浴は何れも不適當である。

腦溢血から來した麻痺のものに飲泉療法を施すと、その溢血襲來の原因を除き、一般に榮養を良好とし、再發を防ぐ効果がある。多血性肥滿者は飲泉を繰り返して遣るが良い。

消耗性疾患に續く麻痺には純鐵泉、炭酸含有鐵泉が適す。冬期には海濱に居住し海氣に當ることは有效である。

海水浴は一般に效が薄い。

ヒステリー性麻痺には、炭酸鐵泉、食鹽泉の入湯と共に冷水灌注などを行ふが良い。體質の頑健なるものには、冷水と共に冷水摩擦を併用すべきである。

婦人病に現る、反射麻痺、或は膀胱疾患、腸管異常から麻痺を起した人々には、その原因に適應する泉水を擇ぶ

ものである。通常、單純泉、食鹽泉、炭酸含有鐵泉、土類泉が一般に行れてゐる。リユマチスミス、關節炎、外傷及び微毒に原因した麻痺には、それらの原因に對する温泉療法をまづ第一に施行せねばならぬ。

礦物中毒から起きた麻痺には硫黄泉が第一に賞用せられてゐる。更に硫黄泥浴を併用すれば、一層効果が現れる。單純泉も有効であるが前者に比して効果が劣るも、硫黄泉に適せざる患者に應用すべきである。

脊髄疾患のものは温浴を採る。温浴から誘導せられて、局所を温め、血行を旺んにし、神経の興奮力を促進し、物質代謝が良くなつて、吸収力が強くなり、又、榮養障害を去り、炎衝を除き、退行物質を排除することになる。温感が直接神経に働くことの立證は難事であるが、皮膚神経を介して、反射性作用を營爲することは疑ふべき餘地はない。冷刺激は直接脊髄に作用するものであるが、軽い冷刺激では直接作用力を缺いてゐるが、皮膚からの刺激にて誘發せらるゝのである。

寒熱作用を全身に働かしむることは避けて、局所に、しかも短時間に加温するか、又は減熱法を施すが良い、即ち寒熱を交互に短時間働かしめるのである。

刺戟現象が顯著に現れるか、又刺戟せられ易いものには、沈靜を促すべき浴法を施す。之に反し沈鈍なる場合には高温度にて興奮さすやうにする。脊髄の機能障害から榮養の不良となつたものには、單純泉、及び瓦斯泡の多い泉水、例へば炭酸鐵泉を採ぶ。又冷水浴、海水浴も良い。高山氣候も適しておる。

脊髄充血のときは冷水にて軽く摩擦するか、半身を冷水浴に浸すか、又は冷水包纏を十五分間位施行した後、微温湯に入らしむ。その他、局所に冷水灌注を施し、又冷巻法を試みる。

脊髄反射の亢進した場合には、水囊を全脊髄に、又はその一部の處に施すのである。

脊髄の慢性炎衝、殊に内壓の昇進したのものには、その吸収する方法を講ず。

膀胱、腸管の麻痺、下肢の知覺異常あるものには、微温湯に長くつかりて、沈靜を誘導するが良い。

飲泉も脊髄疾患に用ひるもので、脊髄性充血には芒硝性食鹽泉、食鹽泉、殊に食鹽性炭酸含有鐵泉が效くのである。

神経過敏、血管運動神経痛には、神経鎮靜、痙攣緩解の效ある温泉、例へば單純泉に入浴を試みる。又淡水浴に、かみつれ葉、鉄(ふすま)を煎じて加ふるも効果がある。此浴後に、餘り高からぬ山地に在る鐵泉に入湯する。此際、患者の體質及び神経障害等のそれ／＼を顧慮し、氣候の影響する事情を鑑み、温泉地の環境等を十二分に考査して適當の温泉地を求むるのである。

神経痛はその發生の部位、患者の體質とを考へて適當の温泉を採べきもので、リユマチスミス又は痛風に基いた神経痛に在りてはアルカリ泉を、又胃腸から來た神経痛には胃腸に適する温泉を採ぶ。習慣性腸内異物停積症(便秘)に原く神経痛、又三叉神経痛や、坐骨神経痛のあるものには苦味泉によつて便通を第一につける必要がある。蒲柳のものには、食鹽泉を、又マラリヤによるものには砒素泉を、貧血を伴へるものには鐵泉又は炭酸鐵泉の飲用

を試みるべきである。

入湯には、單純泉、硫黄泉、食鹽泉、炭酸鐵泉を良しとす。即ち食鹽泉、強食鹽泉、弱食鹽泉はリュマチスムスによる神經痛及び腺病性のものに適し、鐵泉は子宮疾患、貧血、萎黄病を伴へる神經痛に宜く、泥土温卷法は鎮痛に一段の効果を擧ぐるものである。

偏頭痛、胃痛、肋間神經痛、腰痛のものには鐵泉及び鐵泥土浴が最も有効である。

特發性神經痛には海水浴が往々奏效することがある。

坐骨神經痛には食鹽泉、芒硝性食鹽泉の内服を併用すべきである。

知覺及び運動神經の刺戟強きときには、カミツレ葉、麩(ふすま)を煎じて、常湯に混じて用ゆ。又香料、バルサム劑の混合浴が好まれる。その他、纈草、薄荷、メリツキ草の煎汁を加へて用ひ、又サビナ、針葉樹油を混じて應用することがある。

ヒポコンデリーには、精神上にも榮養上にも注意を拂ひて、治療を講ずるは勿論であるが、患者に能く病氣たる觀念を除去することを求め、一般の症候を可良に向けしむるべき必要がある。之れにはアルカリ食鹽泉又は食鹽泉を第一に使用すべきであるが、又鐵泉の效く場合もある。治後に、體力恢復の目的として海水浴を行はしめ、波浪の刺戟を受け、大氣を吸ひ、精神を爽快に維持せしむることに努めねばならぬ。又船に乗つて海洋を航し廻り、或は數日間の沿岸航海を續けるも良い。夏期には登山することを獎勵する、但し餘り高からぬ山を擇ばねばならぬ。

高い山嶽の氣候は割合に強く心身に影響するから、之を避くべきである。冬季には南方の暖地に轉じ休養するが良いのである。

ヒステリー患者も前者と同様の療養方法を講ずることによつて良好の成績を納む。子宮異常に原くものには、鐵泉、炭酸鐵泉の入浴及び飲泉を併用せねばならぬ。又食鹽泉の飲用、強食鹽泉の入湯を勧めてよい。知覺過敏の強いものには、温るい單純泉に入ることを先づ第一に行つてから、飲泉療法を續ける。知覺の餘り過敏でないヒステリー患者には海水浴を採らることが良い結果となる。

舞踏病には單純泉に入湯せしむるが良い、然し水温の餘り高からぬものを選ぶべきである。硫黄泉の奏效する場合もある。貧血のあるものには鐵泉を、又腺病性のものには食鹽泉、海水浴を行ふがよい、水治療法の奏效する場合もある。

癩癩には温泉は特別效くものと思はれない。食鹽泉、芒硝食鹽泉を通常擇んで入湯するのであるが、芒硝食鹽泉と苦味泉とを併用すると比較的效果の多いことがある。

慢性リュマチスムスには何れの温泉も有効である。入湯によつて疼痛を緩和し、病竈の變化する進行を中止し、且つ多少恢復せしむ、從て關節の形態が良くなる。即ち温泉によつて、物質代謝を旺んにし、血管を擴張して血流を十分になし、組織を濕潤して、異常産物を他方に輸送除去する。殊に患部に温包纏(蒸氣浴、砂浴、泥土、氈布)を施し、温鬱積を催さしむると効果は多い。體內物質代謝は體温の上昇と共に増加するものである。即ち酸化

機能が旺んとなり、局部に充血すると、炎性産出物は分解せられて吸収せらるゝに好都合となる。尙患部を同時に按摩すると一層効率を擧げる。茲に注意すべきは心臓及び血管に故障ない限りは泉水の高温度でも良いが、温度にも、入浴回数、入浴時間にも注意せねばならぬ場合がある。何れにしても、浴後には直ちに冷水を以て手拭にて摩擦するか、又はシャワーにて軽く水を注ぎかけることは特に必要である。

各温泉の泉水は何れも皮膚の知覺神経を刺戟するが、その程度は、或は強く、或は緩く、或は暫時間、或は長時間間續くことがある。この差別は泉水に含まれてゐる瓦斯と臓器内に透竄する成分の大小によつて起るが、又入湯の方法にも左右せられるのである。而して呼吸、血行に影響する所となる。然しその効果の現るゝ最後の機能に就いては、未だ説明の出來ざる所である。各泉水による効果は多様である。

温泉入湯と共に、泉地の氣候の及ぶ影響にも顧慮して、良影響ある場合は、巧に之を採つて泉效を一層擧げることとは大切である。

局部に加温する場合、温度高きときには、患部の過敏を緩和し、疼痛を鎮靜し、且つ同時に末梢血管は充血して、吸収を促進すると共に、加温する材料の器械的作用、即ち壓重が加り、之に摩擦を行へば局部の吸収せらるゝことが良くなつて、過剰の液體のみならず、炎性産物、例へば、肉芽、海綿様組織を崩壊し、又此病竈を養ふ血管を破碎して、退行性變化の促進となり、分解物を血流と共に他に送出して治療の轉機となさしむるのである。

泥浴はリュマチスムスに續いた麻痺に效果があり、又麻痺に續發した筋萎縮の治療に奏效す。泥浴の温度は患部

の温感を高くし、麻痺部の活力を恢復さすのである。それには、泥浴に含まれてゐる瓦斯、有機性酸類が、知覺及び運動神経を刺戟して、筋肉の營養を促し、又この際摩擦する器械的作用は麻痺した筋肉の硬直を緩解するに效がある。

股關節強直を手術した後ちに、泥浴を行ふと経過が良くなる。泥浴の温度は四十度以上とし、三十分間も之れに漬る。殊に患部には一時間以上泥巻法を纏包する。

高温の單純泉は寒冒又は濡れて發した慢性筋肉リュマチスムス、又皮膚の保護の注意を缺いた場合、或は天氣に過敏にて、不快なる刺戟を覺ゆるもの、その他關節リュマチスムスに罹り、關節内に漿液が集溜し、腫厚し、運動障害の起きた場合に適用するのである。

入浴の外、尙患部に蒸氣浴を施すと、吸収の促進を一層強むるものである。患部の皮膚は潮紅し、且つ可なり温まるのである。患部の周圍より蒸氣を廣くに當てること、約十數分間に及び、次第に他の患部に移つて施治するのである。蒸氣浴後更に全身浴をとらすか、或は患部をフランネルを以て纏包する。若し蒸氣浴によつて患部に餘りに刺戟が過度となると、却つて漿液の滲出を促し、炎衝を強める危険となるから注意を要す。

入湯温度と入浴時間とは個人によつて差異があり、必ずしも一定すべきではない。患部程度、體質、患者入湯好、又平素の慣習を顧慮して行ふべきであるが、概論的に謂へば、始めは短時間の入湯から、漸次延長して最後には一時間に及ぶのである。浴後には患者の寒冒に罹らぬ様注意し、浴後身體に乾燥摩擦を施し、毛布にて全身を纏ひ、

暫らく横臥静養せしむる方法を講ずべきである。且つ中樞神経の興奮を避け、皮膚の潮紅充血を持續し、分泌減退、吸収力促進、組織の再生恢復を援くる爲に臥床すべきである。

頑固の疼痛あるものは、浴後直ちに臥床し、尋温によつて入浴によつて起きた皮膚充血をなるべく長く持續保存せしめねばならぬ。注意すれば尋温により數時間も維持し得るものである。

筋肉及び關節の慢性リウマチスミスには飲泉法は二次のもので主法ではないが、水温の高いものを飲む。單純泉、硫黄泉の飲泉は、浴による發汗を援け有機物の排除を促し、アルカリ泉、アルカリ食鹽泉、食鹽泉では物質代謝を強め、榮養を可良にす。貧血には鐵泉を用ゆ。

魯西亞風呂は急性のものには効果があるが、慢性のものには少い。

氣候も此疾病に及す影響があるから、霧の少い場所を撰ぶべきである。湿度の少き程、爽快を覺ゆるものである。慢性となれば氣候療法を期待しても効は少い。

血液病

二次的貧血は温泉治療に適するも、萎黄病の色素率一より小なるものには餘り効果がない。

貧血に鐵が効果あることは古くから知られてゐる。従て鐵泉が推賞された温泉である。約四乃至六週間、鐵泉を飲めば、赤血球數、血色素が増加し、更に物質代謝機能が良好となり、體重も増加して来る。その他、炭酸鐵泉も

實用せらる。此鐵泉を早朝四〇〇㊦、更に日中二〇〇乃至四〇〇㊦、飲むのである。鐵の含有量少きも、水酸化炭酸イオン、及び鐵イオンの作用によつて効果を奏する所以である。

炭酸含有鐵泉は入浴用として一般に行はれる。獨逸では特に *Frankfurter* と稱してゐる。炭酸瓦斯の皮膚血管、神經に働いて、血行中樞及び各神經に反射的に作用するから、神經疾患、貧血に伴ふ心臓苦惱の治療に供せられる。此泉には比較的低温にて十分から二十分間入湯する。

綠礬泉、砒素泉も貧血に實用せられる温泉である。綠礬泉は硫酸イオン、フェロイオン、及びフェリイオンを有し、炭化水素イオンに乏しい特別の成分を保つものである。而して砒素を含有するから飲泉により特效を奏するのである。此泉水は、赤血球生成を援くる。蓋し鐵アルビナートの作用に基くのであるが、一方腸管粘膜炎收斂薬ともなり、砒素の含有少量なるにも不拘、主效を奏するに至るものである。

鐵泉及び砒素泉を用ふるに先だち、アルカリ性食鹽含有炭酸鐵泉を豫め飲用するが良い。殊に慢性胃カタル、腸炎、頑固の便秘、重症の消化不良に陥つたときに然りとす。泉水の食鹽によつて、消化器は軽い運動を營みて活力を保ち、消化液の性状も善良となつてくる。

貧血が腺病質に起きたものには、土類炭酸鐵泉を飲むが良い。此泉水に含まるゝカルク鹽類が鐵分と共に働くのである。

淡水浴を採つても、水温の熱い場合には貧血に效あるとは、歐洲學者が研究して發表してゐる。入湯するに従ひ、

外貌が良くなり、力が付き、頭痛は消散し、安眠が出来、又心雑音も消失して、健康を復す。これは發汗する爲に、體組織から水分が排出せられて血液が濃厚となる結果であると説く人もある。

高山轉地は原發性及び續發性貧血何れにも効果が顯れる。殊にマラリヤ罹疾後、萎黃病、造血障礙症に奏效する。山の高さは必ずしも、千米以上を要しない。海拔八百米以下に於て、既に山嶽氣候の影響は十二分に現れて效くものであるから、この高さの山脈中から湧出する鐵泉を求めて治療し、而して此地で十二分に療養してから、更に千米以上の高山に登りて、第二の療養を試みるが良い。

二次的貧血の場合には、原發病の適する温泉地を擇べは良いのである。例へば、海濱に轉住して原病が良くなつたものには、海濱療養を勧める。生來頑健の人が、軽い貧血に陥いつたときには、冷海水浴をとらしむると著しく良效となる。他の病氣のあるときは温海水に浴せしむ。但し虚弱質のもの、心臟病のある人々には海水浴は避けねばならぬ。貧血と神經症候とを兼ねてゐるもの、殊に婦人には海は適しない。

萎黃病と腸管機能とは因果關係が深いから、常に腸内容を十二分に排除し得る目的として、鐵含有泉水にて灌腸することが有效である。

藥湯としてバルサム油、又は針葉樹油を常湯水に混和して入湯すると效がある。

又重病後の貧血、痔漏に悩むものは氣候療法を兼ねる温泉地に赴くが良いのである。

糖 尿 病

糖尿病患者はまづ第一に食餌法を嚴守し、一般的治療を施してから、アルカリ泉、アルカリ性食鹽泉、純鐵泉及びアルカリ炭酸泉を擇ぶのである。しかし、糖尿病の根治は尙的確でない。或る學者に泉水は糖の析出を杜絶すると論じてゐるものがあるが、又之に反した論者もある、かゝる見解の相違は畢竟研究の不備であると共に、飲泉期だけの觀察であるから不結果に陥るのである。研究範圍を一段廣げて、食養、氣候、環境、泉效を多年に涉つて多數實驗例を聚めて調査した上で結論に達することが出来る。

しかし、患者が日常煩雜の生活から離れ、精神の休養、閑居の生活に親しむところに、温泉療法の大なる意味があるのである。

糖尿病に泉水の效くのは、炭酸ナトリウムの糖生成を遅延するにある。泉水温度は温るのが良い。泉浴によつて口渴、尿利、糖量が減じてくる。

放射能泉も前泉水と同様の効果を奏する。

糖尿病の輕症のものは、飲泉によつて糖は減退するか又は消失するに至る。含水炭素の同化機能は良くなる。中等度のものにも効果を齎すが、その治癒期限は續かず一時の場合もあれば、又割合に長くまで持續することもあつて、必ずしも一定しない。

アルカリ泉は患者の栄養もよく、羸瘦も未だ甚しからず、消化力もあつて、肉食にも耐へるときに有効である。飲泉によつて患者は口渴を忘れ、口内乾燥が去り、夜間安静が保たれて、安眠を貪り、體力も出來てくる。重症の患者でも泉效が現れ、著しく症状が良くなる。

糖の析出も、泉療養を重ねる中には次第に減じ、終り頃には消失するに至る。時には三分の一か、四分の一位遺存し、現状を続ける場合もある。若し泉療によつても、糖の減少せぬときは悪性のものである。

泉療によつて體重は増加するが、若し重症であると寧ろ減少する。顔貌が疲れた容子を呈するものは、脂肪性糖尿尿病に見る所である。

若し、泉療中にも不拘、糖の減少が現れずして、経過が良好となつたものは、效果的でないが、糖の減少したときはまづ良效と謂ふも差支ない。

近時砒素泉は、神経症状を伴ふ糖尿患者に效があると思はれる。

一般に温泉には五週間から二ヶ月間滞在せねばならぬ。それより短くも良くないが、餘り長くなりすぎても、特に效くでもない。アルカリ泉に餘り長く浴すると、精力消耗の恐れとなる。但しこのアルカリ泉は貧血の強い、肺結核の併發、骨髓の障害ある人には禁忌である。

糖尿病患者が胃症状を起し、口渴を覺えたときには、單純炭酸泉、アルカリ炭酸泉を飲むが良い。

硫黄泉も賞用せられる、患者は飲泉と共に入浴すると、皮膚の乾燥を防ぐことが出来る。

尚體力が十分に保たれてゐるときには、海岸に轉地して、身體の抵抗力を増すことをするが良い。冬季は暖地に寒を避け、日光に親しむが良い。

慢性礦物中毒

水銀中毒の温泉療法の目的は二様になる、各臓器に固著してゐる水銀を、再び臓器から離解し、之れに引續き悪液性衰弱に陥つたのを恢復さすのにある。その爲に前者には、硫黄泉、單純泉、沃度含有食鹽泉を専用し、後者には鐵泉を推すのである。

蓋し、硫黄泉の慢性水銀中毒に效く所以は、硫酸アルカリが組織内に固著してゐる水銀アルミナドを溶解して、水銀を分泌臓器によつて排泄さすのである。此排泄機能を飲泉及び入浴することによつて更に一層よりよく働かむる。

入浴するには泉水温度の高いのが良い。發汗を旺んにして、水銀の排出を助成せしめる必要がある。

アルカリ泉、アルカリ食鹽泉、食鹽泉、單純泉が用ひらる。

水銀中毒から慢性貧血に陥つた場合には鐵泉が效く。これによつて貧血を治し、氣力を恢復するに至る。

海水浴は水銀中毒の治後尙輕い悪液質を残し、神経痛が劇しく起つた場合に適し、長く滞在すると益強壯となる。鉛毒にも硫黄泉が適す。鉛毒に伴へる痲痛には芒硝泉を飲むが良い。硫黄含有せるものが殊に效がある。又苦味

泉も良い。泉水温度の高いのに入浴するのである。又下腹部に氈布を施し、芳香料を加へた加温湯で灌腸す。

鉛毒から續發した關節痛、麻痺には硫黄泉又は單純泉に入湯するが良い。泥湯、硫黄泥濕布も效くのである。

鉛毒から悪液質に陥り、羸瘦、蒼白、消化不良、悪心、嘔吐を催し、萎縮腎に罹る。この場合には食鹽含有炭酸泉を選ぶのである。

脂肪病

本病にはアルカリ性食鹽泉(芒硝泉)を長く飲用すると著效が現れるので、古くから該温泉が好まれてゐる。此際食餌を慎み、運動を適宜に行ひ、又酸素吸入を併用すると一層の效果がある。硫酸ナトロンを攝收すると含窒素性成分の補足を制限し、酸化機轉をよくする。又芒硝から尿よりの窒素排出物が減少し、又溶鹽類から酸素増入、炭酸排出が一〇—一五%も増加し、脂肪の燃焼も旺んとなる、而して酸化機能の旺盛なることから溶鹽の脱脂作用を援ける。腸管の機能は進み、物質代謝の働は善くなり、血液のアルカリ性は、酸素が絶えず増加する爲めに一五%も多くなる。従て脱脂效果が現れてくる。此泉水を四乃至六週間も續けて飲むと、體量の減することが的確に現れてくる。此際、特に下痢を促さする必要は無いから、臓器の豫備蛋白を犯す憂は無い。

泉水温度は低温のものが高温よりは有效である。蓋し血管を刺戟すること少い。竭經期の婦人脂肪症にもアルカリ性食鹽泉が效く。又食鹽泉も脂肪吸收作用がある。若し誤つて度を過せば、羸瘦する場合もある。

多血性肥満者はアルカリ性食鹽泉を用ふるが良い。又貧血性肥満者にも同様の效目を現はし、顔色が良くなり、赤血球減少等の貧血症候が恢復す。泉水を一度に大量飲むよりは、日々少量づゝ長く飲み續けるが良い、又鐵泉を併用しても效くのである。

飲泉と同時に入浴する、浴泉として炭酸泉、食鹽泉、沃度泉の何れも良い。蒸氣浴も使用してよい。月經閉止又竭經からの肥満婦人には泥浴を薦める。

温泉療法(入湯、飲泉)を了つてから、更に高山に滞在し、酸素に富んだ新しい空氣を吸つて物質同化の機能を促進せしむるが良い。海水浴、冷水浴でも物質代謝の機能を促し脂肪消耗を援けるのである、脂肪心臓に罹つてない肥満者は海水浴が有效である、危険は無いのである。

肝臓及び脾臓病

鬱血肝が心臓病の機能減退に基いて現れたときには、炭酸泉殊に、炭酸鐵泉によつて本病を治せば良くなる。又門脈系の鬱滞に基いた鬱血肝にはアルカリ食鹽泉の飲泉法を施すべきである。

脂肪肝は飽食安佚生活、飲酒家に發生するものである。芒硝泉、食鹽泉の飲泉療法が必要である。飲泉法と共に温泉にも入湯し、且つ腹部に泥土を塗る。

萎縮肝にはアルカリ食鹽泉、食鹽泉が屢々奏效する。但し、末期のものには入湯も飲泉も奏效はしない。

カタル性黄疸の尙未だ、重變なく、肝臓の腫大の著しからず、膽道のカタルも、割合に新らしいもので若し腸管の刺戟、下痢と併有せば、アルカリ泉、アルカリ性食鹽泉を飲むのである。黄疸が永らく続き便秘を起した場合には芒硝泉、食鹽泉を選ぶ。同時に温湯に浴すると、皮膚搔痒が忘れらる。膽石痛あるときには高温度の温湯(四〇—五〇度)に入るが良い。平素強壯のものが、寒冒に罹り黄疸を發したときには、熱冷刺戟を交々取り換へて施行すると、熱作用は肝の排出機能を促し、冷作用は膽囊の排出を旺んにし、結局、膽汁の排出量が過多となる。鬱血肝は發汗療法によつても效がある。

膽石、膽石痛に芒硝類が效あるとは古くからの經驗で教へられてゐる。その炭酸と硫酸ナトロンは共に膽汁分泌を旺盛す、その際飲んだ水は膽汁を稀釋するも、結石にも別段影響する所少きも、腸管蠕動を促進興起し、且つ膽囊の運動も之と共に旺んになる。膽石に及すことは實證出來難きも、此事實から排出せらるゝと推定するのである。而して、膽道の輸送が旺んとなれば炎症産物は自から治療の轉機をとる、飲泉法と共に温き泉湯に浴し又は泥土巻法を施すによりて膽囊の收縮を緩解して痛痛を和らぐのである。慢性になつた人は横臥し、局部温巻法を施し、温きアルカリ泉、アルカリ食鹽泉を少量づゝ飲めば奏效するも、既に周圍に化膿を波及したもの、又は膽囊膿化したものには此泉療は見込がない。

脾臓の急性疾患、例へば梗塞化膿などのある場合に温泉療法が奏效する。脾臓の慢性疾患は他の疾患に隨伴するが、原因病に對する泉水療法を施せば自然に治癒するに至る。チブス又は他の傳染病後の脾腫又は膽囊炎、マラリ

ヤ、肝硬變、肝臓炎、パンチ氏病、チフテリアに續發する脾腫にはアルカリ泉、殊に芒硝含有アルカリ泉が第一である。心臟疾患に伴へる鬱血脾、又は血液性黄疸等の血液性脾腫にはアルカリ泉又はアルカリ食鹽泉、食鹽泉を用ふれば、同時に胃腸の障害を治療することになる。貧血の強いものには鐵泉を飲むと、著しい效を奏するに至る。更に高地氣候療法を併用せば一倍有效である。

腺 病

腺病患者は泉水を飲み、温泉に浴し、兼ねるに氣候療法を行ふべきである。而して食養に意を用ゆべきは當然である。

温泉としてはアルカリ食鹽性炭酸泉、食鹽泉が第一である。泉水に含まるゝクロールナトリウムにその效を歸するものである。腺病の症候の未だ甚しからぬもの、無力性のものには、まづ飲泉法を行ふべきである。その他腺腫、粘膜に輕き症候を現し居るもの、又その素質を有するものにも、同様に飲泉療法を施すべきである。有痛性のものには食鹽泉よりもアルカリ性食鹽含有炭酸泉が喜ばるゝ場合もある。泉水に牛乳を混じて飲用するが良い。

腺腫のあるものには沃度、又は臭素を含有する食鹽泉が效くのである。飲泉法と共に入湯を試みるのであるが、その泉質は前記のものを選ぶ。食鹽泉は腺腫が炎衝を伴ふて居るとき、又粘膜カタル、皮膚潰瘍のあるものに適し、炭酸含有食鹽泉は小兒に效が多い。此泉水は腺病の外、尙瘰癧、心

臟疾患、リユマチスミス、傳染病後の衰弱、麻痺の後胎したのにも適する泉水である。

小兒が呼吸器の慢性カタルを再三繰り返したときには、食鹽炭酸泉、食鹽泉の湧出する中高山を選び温泉療法と高山療養とを兼ねるやうに心懸くべきである。又海濱に轉住するも良い。海濱では空氣清淨、オゾン多く紫外線に富んで居ると共に、一日の氣温の變異が少いから、虚弱兒童の療養に適するのである。

腺病者には沃度含有食鹽泉の有效なるは既述した所であるが、沃度ナトリウム、炭酸ナトリウム、臭素ナトリウムを含有するから効果が現れる。

沃度含有食鹽泉は淋巴腺腫の吸収を促し、全身營養の状態を良效に導くもので、理想的には此泉水の應用には、泉水の温度の高低、泉水濃度を個人によつて、適當に按配するが効果を擧ぐるものであるが、實際には之れが實現は固より困難であるから、餘り之に抵觸せず入湯すべきである。しかし年々入湯することは賢明の方法である。又沃度泉水の濕布療法を患部に施し、温度を十分に保存せば、腫脹した腺腫は減退し、潰瘍の肉芽も良好となり、活力を帶んで治療を速かならしむるものである。

高地に湧く食鹽泉に入湯して居る内には腺病は快癒する、殊に輕少のものには一段と效が見える。又蒲柳の小兒、青年者にも高山温泉は良い湯治場である。

若い婦人の體質が悪く、月經が潮來せず、嘗て小兒時代には腺病に罹つた既往症のあるもの、又結核性生殖器病に悩める人、その他、腺病體格者、及びその素質ある人々は努めて高山温泉療養を行はねばならぬのである。

食鹽泉は皮下腺即ち汗腺皮脂腺の分泌機能を大に援け、淋巴腺の吸収を促し、一般の物質代謝を旺んにして効果を齎らすのである。

腺病兒童の食鹽泉療法を施すに當りてホイベル氏は温泉によつて、第一には體質を更生し、病的物質を體外から排除して、再染の機會を少くする。第二には全身を温める結果、皮膚、粘膜、爪甲、頬に潮紅を促し、脈搏の正調を致し、爽快の感を起さす。而して浴後に臥床すれば一層有效である。若し、浴後に爽快感が起らぬが如き場合があれば、爾後の入浴は中止するが良い。此食鹽泉に入浴すること通常一週間後に良反應が現れ、食慾は進み、體重は増すが、時に然らざることあるも減退はしない。尙引續き入浴するが良いと説いてゐる。

その他、鐵泉、土類泉、硫黄泉も腺病に奏效する泉水である。土類泉の效果に就いては、その含有するカルク鹽類が有効で、過剰の胃酸を中和し、滯積せる食餌の消化を援け、結局營養を良くするものである。土類泉の中に炭酸瓦斯を含有するものは飲用に適してゐる。此等の泉水に牛乳を混へて飲むと効果が一層大い。

硫黄泉水は今日には餘り推薦されてはゐない。硫黄泉水に含まる、炭酸瓦斯に主治作用あると謂れてゐる。此泉水は腺病者の皮膚落屑の多いものか、又は微毒を併發したものに適してゐる。

單純泉は過敏性の腺病者に穩かに效く、此場合でも中高山、高山氣候の影響を忘れてはならない。

海水浴は保存療養の目的に適するから、病竈の餘り大きくならないときに適してゐる。五歳からの小兒に限る。日中氣温の高い間に行ふものである。海水浴を施すよりも海濱を逍遙して海氣に當るのが効果が多いが、粘膜の炎

衝あるものにも適してゐる。然し腺病性の疾患のあるものは時に海濱に滞在して却つて増悪することがあるから避けるが良い。

此機会に一言したいのは、腺病性患兒の爲に、佛蘭西、伊太利、英吉利に於ては、公共事業の一つとして適當なる保養院を海岸に建て收容してゐる。獨逸國にも此十數年來この運動が旺んになつて、腺病兒童の治療が五〇乃至八〇%に達してゐる。我國に於ても結核救濟事業が旺盛になつたのは國家の爲に慶賀すべきであるが、まだ特種の結核殊に腺病の少年收容療養所の振はないのは遺憾である。體力増進、國民保健の旺ならんとする今日、一日も早くこの事業の現實を希望して止まない次第である。

外 傷

創傷の温泉療養は古くから知られ、戰國時代には兵士の治療機關と云はれた浴場は多く、而してそれを祕密にして餘り世間に漏さぬのであつた。隠し湯と呼ばれた、この名稱は今日にも傳へられてゐる。

骨關節の外傷、後遺したる化膿、瘻孔、運動障害等も温泉療法の惠澤によつて治癒することが出来る。單純泉、食鹽泉、硫黄泉何れも之に適する泉水である。全身浴は勿論、泉水にて患部を濕布し、或は蒸す等、種々の方法がある。泉浴によつて神経を適度に刺激し血行を良好となして、その治癒機轉は深き所にまで及ぶ。泉温には温るく又は高いものもあるが、何れも入浴するに従つて、患者の疼痛を和らげ、反射の亢進は低下し、肉芽はよくなる。

患部に高温の濕布、泥土纏包を施せば、血行を進め、浸出液の吸収を速にし、關節、筋肉の浸潤を散じ、栄養は良くなり、機能は整調せらる。但し關節に既に解剖的異常が現れたるものには、完全の恢復が望めないが、ある程度までは恢復することが出来る。浴によつて、患部の腫脹、疼痛は去り、運動の恢復は早いものである。

浴中又は浴後にマッサージ、或は加動的屈伸運動を行ふことは合理である。努めて行ふのが良い。

骨折後、温泉に湯治せんと欲せば化骨の完成を待ちてから行くが良い。銃傷後に軟組織が偽性强直を起し易いのであるが、かゝる場合、又は關節挫創後の輕き運動障害あるものは單純泉に氣永に、例へば六週間から八週間滯在入湯すると効果が現れる。

關節囊の肥厚、若しくは萎縮、骨折後の異常石灰附著、浸出液の殘留、筋肉の弛緩、瘢痕があるときにも、温泉療養は效くもので、筋肉中に骨片の如き異物を殘して出來た瘻孔には泉水を注入して洗ふと經過が良くなる。即ち瘻管の口が開き、膿液が多く流出し、異物もその内に除かれて、自然瘻孔は閉塞する。

銃傷、又は骨折後の疼痛は温泉に入湯すると緩和され、又患部に巻布しても奏效する。殊に泥土の濕濕布は特に效くものである。銃傷の治後直ちに温泉湯治すると、後ちに症候を残さずに済むものである。

婦 人 病

婦人病に温泉が效くことは、古くから謂はれ、又その效能が多いのも周知の事實である。温泉療法は泉水作用を

接くべき薬物効果の外に、水の力学的効果も加はり、更に煩らばしい家事から遁れて安静に心身を保ち得る環境の作用、食餌の好くなること等が相働いて効果を現すもので、身體の物質代謝機能が良くなり、各臓器殊に婦人生殖器に又神経に良影響を及ぼすことになる。

飲泉と入湯とを併用することによつて、子宮及び子宮周囲に於ける組織機能の働きが良くなり、有害物を吸収し、子宮栄養が十二分にとれてくる。又罹疾した生殖器にも誘導的に働くことがあり、腸粘膜は刺戟せられて分泌を旺んにし、入浴すると皮膚神経の刺戟から子宮に二次的に働いて子宮の機能が盛り返へされてくる。

子宮及び附屬器の急性炎又は充血あるときには入湯すると消炎的に働き、又骨盤内臓器の充血、子宮血管の弛緩、擴張、分泌過剰のある場合には收斂吸収するやう促進し、又強壯作用を發起し、榮養、造血神経分布にそれぞれ好影響を與ふることになる。

妊婦の温泉に漬かることは、決して禁忌すべき事柄ではない、寧ろ入湯によつて體力が一層つけらるゝに至る。唯流産の傾向あるもの、又甚しい腸の違和ある婦人には妊娠中の入湯を戒むるのである。

慢性子宮實質炎、内膜炎に悩む婦人は食鹽含有芒硝泉、食鹽泉、鐵泉を選んで入湯す。若し慢性子宮實質炎が、血行障害から來り、又は下腹部の靜脈滯滯から起きた場合、又消化不良あれば芒硝泉、食鹽泉を飲むのである。

泉水を絶えず飲み續けて週餘になると、下腹部の血管の負擔が軽くなり、血液滯積も去り、且つ此泉水の腸管淨化作用のあることから便秘を制して、之れ等による、子宮に對する器械的壓迫を緩和して身體の調子を善くなさし

むるものである。炭酸泉、鐵泉の冷泉水も亦效くものである。

心臟疾患が進んで居り、又腦充血に悩む婦人には、炭酸泉を避けて苦味泉を飲んで便通をつけるが良い。但し苦味泉は時に消化を阻害し羸瘦せしむる恐れがあるから暫定に用ふるのみ。

蒲柳の體質ではあるが、腸管の機能も整ひ、貧血も少いが、唯輕い慢性子宮實質炎に悩み、その割合に白帯下の甚しい場合か、又は子宮内膜炎があるときにはアルカリ性食鹽含有炭酸泉が效くのである。

貧血の婦人は鐵泉を選んで飲む。此泉水は更に消化不良、神経性便秘の場合にも奏效する。若し貧血が餘り強からぬときには、食鹽性炭酸泉が效くのである。

慢性子宮實質炎に罹つて局部の知覺過敏となつた場合には、單純泉が效くことがある。子宮内に泉水を注いで居ることを、よく浴場で見ることがあるが、この取扱には注意せねばならぬ。注入によつて多くは有效となるが、子宮炎衝、子宮過敏、月經多量のあるときは、注入によつて却つて刺戟を増すことがあり、又腔に潰瘍、糜爛があると、出血を促す原因となるから、豫め注意せねばならぬ。子宮注入泉水の溫度は體溫よりも多少高い方がよいのである。注入時の水力は子宮の疾患の状態に應じて夫れ々々に加減せねばならぬ。舊き炎衝、硬結の強いもの、月經閉止して居るときには強く注入し、泉水温も高い方がよい。性的興奮の甚しいものには注入法は絶対禁止である。又子宮弛緩、分泌過多、子宮血管充血には冷水度のものを使用すべきである。

子宮附屬器の慢性炎衝には微温の坐湯をとらしむるがよい。又骨盤腹膜炎、子宮外膜炎、骨盤内組織炎、卵巣炎

も温泉入湯で効くのである。含鐵芒硝鹽類泉、泥浴、食鹽泉の全身浴か腰湯、或は下腹部の温浴法が有効である。此際子宮注入は却つて有害となる。泉浴に氣候療法を兼ねると、子宮分泌が可なり良く吸収せられ、且つ食慾を旺盛にし、精神を爽快ならしむる利益がある。

急性の婦人病には餘り泉浴の効果は期待せられない。子宮筋腫、良性の卵巢腫瘍等には泉効は全く裏切られてゐる、唯之に續發する疼痛を緩和するに過ぎない。子宮筋腫の爲に出血強くなつて居るものには食鹽泉を飲用すると止血し、従つて心臓障害も良くなつてくる。卵巢腫瘍の新らしきものは泉浴によつて、その生長を阻止し得る場合もあるが、消失することは出来ないのである。卵巢腫瘍に悩む婦人には肥胖者が多いから、芒硝泉又は食鹽泉の飲用法によつて脱脂を試みるも一策である。

月經閉止は貧血から來る場合もあり、又生殖器發育不全に原因する場合もある。此等には鐵泉又はアルカリ性食鹽含有鐵泉の入湯と飲用とを併用する必要がある。骨盤内に充血を招致する目的として炭酸泉を利用する。肥胖者に現はるゝ月經閉止には冷き芒硝性食鹽泉を飲むのである。脱脂を促すと共に之と並行して月經が潮來しくるものである。しかし、長期に亘つて持續利用せねばならぬ。

淋巴腺體質、又は腺病性の女子にて、發育が悪しく、月經が不整若しくは閉止し、神經性の症候を併起して居るものには海水浴が効く。又モヒ、アルコール、水銀、鉛の中毒から來た月經閉止のものは、温泉に入湯して利尿、發汗、物質代謝を促進せしめて、毒物の排除を計らねばならぬ。

月經過多のものには、まづその原因の治療法を講ずべきである。例へば門脈鬱血、骨盤内血行障害から起つたものか、或は竭經前の異常か、子宮退行の原因から起つたものには含鐵芒硝食鹽泉の冷水を飲み、又月經過多に由る貧血なれば炭酸鐵泉を飲むのである。又此貧血には綠礬泉の有效なることがある。その他の原因によつて來るものには、その原因に對する有効温泉を選ぶべきは謂ふまでもないことである。月經過多のとき腔内に冷泉水の雨狀灌注を又子宮に温水灌注を施すのである。然し、その用器に就ては一應醫師の指圖を要する。冷水を腹部に灌注すると、一層有效となる。

健康なる處女の初回月經潮來のときは冷水摩擦を、起床前又は起床後直ちに行ふか、或は半分間雨注を行つても良い。これによつて健康を維持することが出来る。若し初回の月經が遅れるか、又は規則正しく潮來せぬ場合には冷水坐浴を行ふが良い。軽い貧血がある女子には温い牛乳、若しくは紅茶を啜らしめて坐浴せしめ、而して浴後就床安靜すれば保温が続きて良くなる。又中等度の貧血、萎黃病のある女子には微温湯に漬つて穩かに刺戟を加ふることが必要である。殊に若年のものには長く入湯せしむるもので、初めに十五分間、後ちには半時間とする。その他電光浴、蒸氣風呂も效がある。

此場合の温泉には炭酸泉が最も有効である。殊に鐵泉の炭酸瓦斯を含有して居るものが喜ばるゝのである。泉水の温度は低くあつても、入湯して居る間に皮膚は温感を増し、爽快を覺えてくる。入湯時間は十五分から二十分間でよい。

初月經の際、種々の苦情を訴へる者には、鐵泥浴が偉效を奏す。溫度は高い方が良く、入湯時間も十五分間から四十五分間とする。泥土の器械的化學的刺戟が強く作用を奏するものである。

腺病性のもので月經不順であるときには、海水浴をとつて波浪の運動で身體を揉まれるのが良い。豫め海水を汲んで温めてまづ之れに浴してから、海水浴を行ふのが安全である。

神經質の處女の初月經の潮來、又は不順のものには、中等溫度單純泉に割合に長く入湯するのである。且つ氣候療養を兼ねることは賢明の方法である。

月經期止期に身體違和を覺えたときには、微温湯に十五分から二十分間漬かり、皮膚の機能を高め、一面には知覺過敏、神經痛を鎮靜する。又竭經期の婦人にて視覺の過敏、疼痛、輕度の心悸亢進、胃腸障害の如き症候があれば、微温湯に浴せしむ。時に溫度高き湯に浴せしめて、皮膚充血を誘導し、皮膚發汗を促し、皮膚呼吸をよくし、物質代謝を促さしむることによつて奏效する場合がある。又眩暈、灼熱感等を覺ふる婦人にはまづ低温湯に入湯せしめ、徐々に水温を高めて皮膚血管を擴大し、動脈壓を低下せしむる方法を講ず。脂肪過多、痛風に苦むときには炭酸泉又は食鹽泉に浴せしむ。炭酸泉は時に卵巢機能を恢復する場合もある。

家庭に於ては日常入浴時に人工炭酸浴、食鹽(又は満汁)を加へて入湯するが良い。竭經婦人は海水浴を避けるが良い。しかし、海濱を逍遙して、海氣に當り、之を呼吸することは良い。海水を温めて入浴するは差支ない。弱食鹽泉に似た働がある。

流産又は不妊者に對する泉效は一概に論ぜられない。その特種温泉として著名のものがある。恐らく原因に對する温泉奏效から、成績が現るゝものであらう。學理的には一應その原因を律すべき必要あるは謂ふまでもないことである。

皮膚病

皮膚には、各温泉何れも作用するものである。蓋し泉水が絶えず皮膚に密接し、器械的作用を附與し、水は皮膚を浸し、透竄するから效果を現すものである。器械的作用としては、皮膚を摩擦し、壓力を加へ、皮膚を清淨と成す。即ち皮面に蓄積附著する汚物を溶かし、或は離散せしめる。その際水温が高ければ、附屬物は早く溶けて脱落し、又皮膚の血行を旺んになり、白血球の遊走を増す。而して温感は知覺神經に働き、皮膚の分泌を促がし、泉水の薬成分の吸収を媒介せしめるからである。

皮膚病に泉水の影響する所以も、上皮を軟らげ、その皮面を被ふ汚穢物、落屑、痂皮等の病的産物を軟化し、或は之を溶解して除去し、損失したる上皮を保護して、瘡面を醫するが、更に泉水に含まるゝ薬物は治癒効果を迅速ならしむるのである。泉水の深達作用から、入浴によつて泉水作用が深く及ぶ爲に浸潤を減退して、皮下の硬結を解き、病勢の進行を制止する役目をなす。しかし、一般に急性の皮膚病には入浴は寧ろ禁忌すべきである。慢性のものか、悪急性で、局部が乾きかけたときに入浴すると、濕疹の如きものゝ奏效は顯著である。落屑のあるときに

は泉水に浸つた後ち、アカルリ石鹼、テール膏、殊に硫黄膏をつけると良效を獲。

皮膚病には硫黄泉、食鹽泉、アルカリ泉、單純泉が多く使用せらる。皮膚の浸潤が除かれ、緊張は弛み、搔痒は消え、疼痛は軽くなる。單純泉の泉水温度が高ければ、皮膚の血行障害は除かれ、血管の張力が恢復し、栄養が可良となり、皮膚の知覺も平穩となる效がある。

脂漏疹、瘰癧、多汗症の如き皮膚分泌異常から來た病症は、單純泉か、アルカリ温泉に入浴するが良い。此泉水によつて、皮膚分泌が制限せられ、乾燥し、皮膚は清潔となる。婦人病に伴ふ皮膚病のあるときには、此等の泉水を飲むのである。瘰癧は安逸生活者又は竭經期の婦人、或は門脈系の障害から發するもので、食鹽泉の入湯と飲泉とを兼ね行ふ。又患部に泉水の濕布を施せば良好となる場合がある。但し硬結の餘りに強大になつたものには好結果が擧らないことがある。硫黄泉は殊の外、效能ある。酒渣鼻には硫黄泉水に濕したる布片を以て壓重する氣持にて洗ふか、又は硫化水素を含んだ水の壓注、或は蒸氣浴を施せば、效果を見るから大に試みるべき方法である。

天氣の變り目、空氣の變動から、皮膚の知覺に異常を覺える者は單純泉、又はアルカリ泉(温い)に氣長に入湯を續けて居る内に良くなるのである。入浴によつて皮膚の緊張も施み、軟みを帶び、刺戟にも餘り感しがたくなる。冷水にて摩擦しても皮膚の硬化は消える。

皮膚の慢性炎衝、丹毒に再三罹つた人はアルカリ泉、又は單純泉に入浴するが良い。

蕁麻疹の消化器の障害から來り、又は子宮病から起るものにはアルカリ泉の入湯飲泉を併用し、更にその原因を

根治せねばならぬ。食鹽泉、鐵泉も有效である。食餌に注意し、適當の運動を行ふべきは必要の條件である。發疹が長く續いて、多少衰弱が加つたときには、食鹽鐵含有炭酸泉を飲み且つ同泉に入湯すべきである。

慢性濕疹には食鹽泉、硫黄泉が一番效く。此の泉水は常に病體を癒すのみでなく、皮膚の機能を更生する力がある。濕疹の擴がる傾向の場合にも泉效があり、又恢復期に入浴すると一層效果が高くなる。若し濕潤が擴がり、結痂が厚くなり、上皮の成生が不良である場合には、食鹽泉の入湯と同時に、その泉水の濕布を施すと、濕潤が解消し、病的産物の排除せらるゝことが旺んとなり、組織の活力を復して、新組織成生を促すに至る。その際一時病體の悪化したかの如き外見を呈するも、それは治癒の前兆で敢て意とするに足らない。温泉療法は忍耐して長くまで続け、又年々反復して同一泉に浴して、根治を計らねばならぬ。

慢性膿疱疹様濕疹には硫黄泉が適す。しかし、此泉に過度に入浴し、又は温度の高き泉水であると、却つて不結果に了ることがある。硫黄泉の飲泉療法を併用すると有効率が高くなる。

悪液質になつた濕疹患者には、その原因に對する温泉療法を行ふべきである。腺病質、佝僂病、栄養不良、淋巴腺腫の著大となり、粘膜に炎衝があるときには沃度含有食鹽泉の飲泉と入浴とを併用すべきである。而して規則正しく法を守り、六週間から八週間温泉地に滞在して、效果を完全せねばならぬ。

萎黄病、月經異常、生殖器疾患に併發した慢性濕疹には硫黄泉の飲用と入浴を併せて實施すべきである。又砒素泉を内服するも良い。

顔面又は毛髪間に生じた濕疹には、温度の餘り高からぬ程度の蒸氣浴を施すのである。

生殖器濕疹にはアルカリ泉が良い、時に此泉水にカルミンを混和して用ひて奏效する。肛門周囲の濕疹には冷水坐浴が效く、下肢の濕疹には食鹽泉に入湯す、長く入浴を続ける内に皮膚の硬さが軟らき、肥厚もとれて行くのである。

慢性糠枇疹にはアルカリ泉が效く。

乾癬には食鹽泉、土類泉、硫黄泉が適してゐる。落屑が減じ、充血も去つて著しく快癒す。砒素泉が適すると主張してゐる人もある。此泉水を飲み、又入湯するのである。

乾癬の頑固のもの、例へば異常性乾癬には硫黄泉最も效き、早く奏效す。その他、過滿俺加里、或は昇禾温浴に浴しても良い。又小兒の天疱疹にも此藥湯が效くのである。

海水浴後には癩瘡を起し易いものであるが、同浴にて治癒す。小兒の癩疹にも硫黄泉が效く。泉水によつて浸潤、及び結節が消散し、又掻痒も減じ、續發し易き濕疹も減退す。

多くの皮膚病者が悩む掻痒に對しては、温るい單純の湯浴にて阻止することが出来る。單純泉、アルカリ泉、土類泉、硫黄泉も效く。入湯中、この泉水をシャワにて患部に當てると効果が一層早くなる。

海濱氣候又海水浴は皮膚病、腺病、皮膚結核、結核性濕疹、生殖器結核、狼瘡、その他痲毒性浸潤又は微毒性浸潤の消散に奏效するが、但し急性のものには不適當である。又開放性肺結核、糖尿病、高度の神經衰弱、増悪した

微毒、精神病者には海水は禁忌である。

泌尿器疾患

急性腎臟炎に基く蛋白の證明せられしときは、まづ家庭又は療養所にて、十二分の安靜療養を續け、食餌に注意すべきである。

腎臟疾患は飲泉法にて治療すべきである。腎臟患者が温泉に旅行すると却つて病症を増悪するもの、如く懸念する人もあるが、それは病氣の治療時期を顧みず、急性の場合、心臟疾患を併發し、血壓の高いのを無理するからである。

温泉の療養期は急性症候が去り、下熱し、頭痛も和いて、外見上から、異常を認めぬか、或は僅かに残つて居る時を選ばねばならぬ。

土類泉、炭酸泉は效く温泉である。泉水のカルクは利尿を援け、食鹽の排出を促し、蛋白が減じ、尿圓嚙を消化せしむ。殊に食餌に注意して食鹽少く、又プリン含有少き食餌に注意すべきである。更に空氣浴に親しみ、心身を安んじ、労働を避けねばならぬ。

慢性膀胱炎、腎盂炎にはアルカリ泉が多分に効果を奏して、利尿が著しく増してくる。その他アルカリ炭酸泉、アルカリ食鹽泉も效く。尿道の膿漏淋に後發する膀胱炎、老人の膀胱カタルにも同泉が有效である。

リチウム含有泉水は利尿促進の效があると近時謂はれて来た。但し長期に飲泉せねばならぬ。アルカリ泉を使用するに臨み、検尿して、尿のアルカリ反應を呈するか、中性反應である場合には、アルカリ泉を禁忌すべきである。

安逸飽食、贅澤生活に慣れたものによる下腹部血液循環障害に由つて現れた膀胱炎には、食鹽泉、又はアルカリ性炭酸泉を選べば良いのである。

尿に粘液が交り、結石の爲に濁濁尿となり、放尿時の疼痛、排尿困難、閉尿を起してゐるものには、土類泉、殊に炭酸含有土類泉が喜ばる。土類泉のカルクは粘液と結合し、しかも水浴するから放尿し易くなる。

尿酸鹽遊離尿酸から出来た尿結石、即ち尿砂、尿管、腎砂等も發見せば、アルカリ泉、土類泉を飲用す。之に由つて尿酸鹽類の排出を阻止し、遂には結石生成を防ぐに至る。此泉水の尿酸融合作用は相當なるもので、土類泉のカルクより血液及び尿のアルカリ成分を増加する。

凡て結石に悩む人は飲泉療法を氣永に續ける必要があると共に、豫防の意味から炭酸泉を規則正しく使用するは良き方法である。

結石には飲泉法によつて有機物の生成を防ぎ、尿に及す故障なく排尿量の多かるべきことを、努めて行ふべきである。而して尿酸結石の場合には尿の酸度が減じ、磷酸結石に於ては、之に反して増加する様處置して、利尿を促し、尿道内壓を除き膀胱カタルを戒め、結石を作るべき有機物の停滯を防ぐに努むべきであるが、既成の結石の泉水によつて溶解し得るかは多く期待を裏切るものである。

尿酸結石に悩む患者はアルカリ性炭酸泉、アルカリ性食鹽泉を選ぶ。この泉水は、また物質代謝にも働き、腎臓の分泌を良くするから、腎臓の苦惱、膀胱部の疼痛、尿利漸數、反射現象が緩和せられ、尿酸度も低下して結石の下降を促す。此際餘りアルカリ度の強い泉水よりは、中等度の泉水を持続飲用するが良い。疼痛あるときには冷泉水より温泉水の效く場合が屢々ある。而して飲冷泉を持続し居る内に尿のアルカリ性となつたときには、飲泉を中止する、その折に尿酸結石が排出せらるゝことがある。

アルカリ泉水の飲み高は個人によつて差異あるも、炭酸ナトロンによつて尿のアルカリ性となるまで飲み續けてよい。此際下痢を催す心配は無い。少量づゝ一日數回に分用すれば、消化器を害せずして月餘に續けらるゝのである。結石の大なるものによる疼痛も温泉水によつて軽くなるのである。

尿酸結石あるもの、又その素質あるものが腹部鬱血、關節痛を起した場合にはアルカリ性食鹽泉を選んで飲用す。膀胱結石を碎石術にて破砕除去したる後にも、飲泉を續けると膀胱内に遺存したる破片が排出せられ、又更らに結石生成を防ぐ效ともなる。

下腹部の違和、膀胱カタルを起し、尿中に雲絮片が現れ、刺戟が強くなつた場合には、炭酸含有土類泉を選び、長く續けて用ふるが良い。例へば始めの四―六週間は日々三―六杯(四分三―一・半リットル)を飲む。小き結石であるならば自然に排泄せられるが、大なるものには外科的處置を施さねばならぬ。日本では残念ながら温泉場

で、すぐ様手術を行ひ得ることが出来ぬが、獨逸のウイルツゲン温泉地は尿結石温泉治療地として世界的に有名であり、且つ醫師が温泉療法、外科處置の關係を詳しく觀察し、多年の經驗から、兩者の處置期を誤まらないから治療成績が良好で、一ヶ年に百五十名以上も手術してゐる。ナウハイム温泉の心臟温泉療養所と共に獨逸温泉の雙璧のものである。

近時に至り、炭酸リチウムの尿酸溶解力の強きことを知り、リチオン含有の多い泉水を賞用してゐる。又人工的に、一リートル水中に、〇・六炭酸リチウムを加へて使用するも效がある。

磷酸結石には炭酸泉が好まる。鹽類含有の少きものが良い、單純炭酸泉が第一に效がある。人工炭酸泉にても使用し得。尿酸結石には單純炭酸泉、アルカリ炭酸泉が適す。

結石による痛痛には温湯に漬ると鎮靜す。又蒸氣浴、泥土纏包を腰部に施すも良い方法である。芥子泥も效く。

微毒性腎臟疾患には水銀塗擦と硫黄泉浴とを併用すると著效を現すのである。

慢性腎臟炎にて窒素代謝障害あるときには、まづアルカリ泉を規則正しく飲み、又消化障害を除くことに努力せねばならぬ。尿毒症の疑あるものにはアルカリ性食鹽泉を飲むと奏效することがある。砂浴、温浴、泥湯も慢性腎臟炎に效くのである。

腎血腎にも、アルカリ泉を飲み、弛き便通を促し、門脈系の鬱滯を解除するに努むれば、經過は良效となり、蛋白尿も完全に消失す。心臟疾患を起したものは炭酸泉が適す。腎硬化症には芒硝食鹽泉の飲泉が必要である。

微毒

微毒の温泉浴養は水銀塗擦したる場合に著效である。泉温によつて皮膚の水銀受容力が高まり、水銀の效を高め、蛋白質崩壊が強くなる。微毒に併發した疾患例へば、皮膚落屑、腺塊、關節炎、骨膜炎、骨瘍、リュマチス様疼痛、腺腫の治療にも效くのである。

本病に選ぼるゝ泉水は硫黄泉である。且つ同時に、食養を嚴規にし、規則正しい泉浴及び一般治療を施す必要がある。ナイセル氏は此際、物質代謝を旺盛にすることは治療效果を大ならしむると説いてゐる。硫黄泉、食鹽泉の飲用は必要である。飲水によつて、水銀は可溶性結合物に移行し、物質代謝の旺んになると共に、病竈、起病體に水銀が融通し、而して排出せらる。飲泉すれば、尿量が増え、尿素排出も多くなり、鹽化物の析出が容易となる結果、水銀が排出し易くなるのである。

微毒の温泉療法は前述の説明の如く水銀療法を兼ねることによつて効果率が高まるのである。硫黄泉の外、食鹽泉、單純泉の温度高いものに浴すると、皮膚刺戟から、物質代謝が促進せられ、酸素の攝收、炭酸瓦斯の排出量が増加し、これと共に臟器に存在する病素も排出せらるゝに至る。従て入浴時間も長くならねばならぬ。殊に發汗するは有效であるから、魯西亞風呂、熱氣浴を施すのである。

微毒第二期第三期、又は併發のもの、例へば脊髄癆の如きものにも泉浴が屢々奏效す。潰瘍にも泉效が現れ癒痕

を結びて消失するに至る。

沃度泉は第二期微毒の水銀療法を了りたる後ちか、又は第三期に至りて骨膜炎、骨疾患、微毒性發疹を生じたものに適し、入浴と共に飲水を兼ねぬるものである。

又第二期の場合に、苦味泉、芒硝泉、單純食鹽泉を飲水して、利尿を援け、腸作用を促し、淨化の目的を行はしむるを要す。飲泉によつても、皮膚機能は良好となるものである。

鐵泉は微毒から起きた麻痺のある場合に效く。又微毒治療後に、貧血、消化障害、下痢、羸瘦等を貽してゐるときに、飲水と入湯とを兼ね行ふと一層効果がある。又炭酸泉浴の效く場合もある。

眼 病

眼病に温泉が效くとは昔から言ひ傳へられてゐる。結膜炎、眼瞼炎、角膜炎、慢性脈絡膜炎、緑内障が、その適應である。

結膜慢性カタルは往々下腹部鬱血に續發す。その他、リュマチスムス、痛風からも起り、網膜出血からも起るものであるが、何れも單純泉が適す。

トラフオーム、眼瞼炎、マイボーム腺炎には沃度含有食鹽泉、食鹽含有炭酸泉を飲む、又食鹽泉の入湯が效くのである。

網膜の知覺過敏あれば、その原因たる腦神經に效く温泉を選ぶ。又腸管機能を此際整頓する必要あるから、食鹽含有炭酸泉、炭酸鐵泉、弱食鹽泉、芒硝泉、苦味泉に入浴飲泉すべきである。月經異常がある婦人にも同泉が效く。網膜剝離には芒硝泉が著效を現すことがある。靜脈性鬱血、脈絡膜の慢性炎術には強食鹽泉、芒硝泉が有效である。

白内障患者は一先づ温泉療法してから、手術を受けるが良いのである。

鼻 病

鼻の疾患にて特に温泉療法を推薦する場合は殆んど無い。腺病に誘發する慢性鼻炎には、全身更生の目的として、食鹽泉を選び、入浴と飲泉すると同時に、泉水を鼻腔内に注入して洗滌することも有効の一法である。

聽 器 疾 患

此方面の温泉應用は稀れである。寧ろ全身に働かしめて、その泉效、栄養から局部の病變を良好に轉機せしむるのである。

中耳炎の再發し易いもの、又局部の治癒の遅々して抄らぬ場合に温泉療法を試みる。又小兒腺病質に來たものにも泉效が現れる、後者は特に海濱に轉住して保養するが良い。大人の慢性中耳炎、鼻臭あるときには、沃度含有食

鹽泉が適す。泉水にて洗滌すると鼻腔、咽腔の硬化が融けてくる。鼻炎を併發せば飲泉と、吸入とを併用すべきである。

重聽あり、且つ眩暈を催すものには芒硝泉又は食鹽泉を飲むが良い。何れも腸管に働いて、主觀的の良效を現してくる。貧血に因る耳鳴があるときには、鐵泉又は砒素泉を飲み、且つ入湯して、貧血を恢復することによつて耳鳴は消散するものである。耳硬化のある人は、中高山の氣候によつて治療を求めると良い。高山は寧ろ有害で、却つて眩暈を起し易く、耳鳴を誘發する。

耳漏、慢性炎衝、外聽道の頑固の濕疹、鼓膜のカタルあるものには沃度泉が良い、又食鹽泉の入湯も適くのである。

内外聽道の知覺不敏から來た重聽の場合には、炭酸瓦斯を含んだ温水の壓注で洗ふが良い。

咽頭炎から歐氏管に炎衝が波及して重聽となつた場合には、食鹽泉の吸入を試みて、カタルを驅除する必要がある。

寒冒に續發した外聽道炎衝には硫化水素泉が適す。

耳鳴、不快音の繼ぐ場合には往々便秘から現るゝことがあるから、腹部の淨化を必要とし、芒硝泉、アルカリ泉を飲水するが良いのである。

老人の耳鳴、頭痛、眩暈あるときには沃度泉、又は臭素泉を選ぶ。耳の疾患、又は故障のある人には、頭から冷

水を被ぶることは、却つて結果は良くない。又海水浴を避けねばならぬ。耳疾患の再發は多くは海水浴の不注意から起る場合が多いものである。

巻 法

巻法のこと世人が熟知し、簡単に施し易くして、その効果が割合に著しいから、夙に家庭に於ても病院に於ても、少し身體に異常があれば、すぐ巻法を施すのが一般の通則になつてゐる。抑も巻法は、ブリースニッツ氏と云ふ奥太利の百姓が、思ひついた民間療法から發達したものであるが、しかし、今日弘く行れてゐる巻法の實施の有様を見るに、巻法の理解がなく漫然と出鱈目にやつて居るのみで、頗る遺憾に思はれる。前章に屢々泉水の濕布など云ふ事項を掲げて置いたから一通の説明するも、決して徒爾でないと思ふ。

巻法には根本的に二様に區別することが出来る。一は冷水に浸したる濕布を身體に密著せしめて、冷刺戟を與へ、續いて該部に温の反應性充血を招致するものと、他は濕布を同一温度に保ちて局所を包み、温度は温、又は冷、何れにせよ長くその温度を續かして作用せしめる方法である。この温又は冷を長く維持する爲に、濕布の上を被覆して保温(冷)するか、或は屢々冷濕布、温濕布を交り換へて同一温度を新にして刺戟を働かしむるものと別れてゐる。前者を反應性又は刺戟性巻法と謂ひ、後者を持續同温度巻法と稱す。

巻法

反応性(刺戟性)巻法
ブリースニッツ巻法
不透性反応巻法

持続同温度巻法
冷巻法
温巻法

と大別することが出来る。

反応性巻法とは、必ず冷水を用ひて冷刺戟を皮膚に加へて反應を起さすもので、冷水の温度は場合によつて加減する。此の實行法は、まづ冷水に綿片又は布片を浸して半絞りして、適當の水分を含ませたものを、直接患部に廣く能く密接せしめ、更にその上に適當の物を以て十二分に被覆すべきである。此被覆材料によつてブリースニッツ巻法と不透性反応巻法とに分けられる。前者にては毛織物、殊にフランネルにて濕布を被ふのみである。決して油紙、護膜布の如く、透熱を許さざる物質を使用しないことが必要條件である。フランネルにて數回纏絡すれば良いのである。若し、油紙ゴム布の如き不透熱性材料を以て被覆したときは不透性反應巻法と稱し、その兩者の使用目的は異つて居る。

ブリースニッツ巻法は鎮痛、鎮靜、血液誘導、喀痰溶解、吸收促進、營養増進に効果がある。
不透性巻法は捻挫、挫傷、化膿性炎症等外科的疾患の場合に適用するものである。

ブリースニッツ巻法を施すに當り、濕潤したる布片は皮膚に接著することから、刺戟のなきものが必要である。毛織は皮膚を刺戟し易く、絹布は含水量が不足勝ちとなる。綿布が一番理想的で皮膚にも軟く當り含水量も適當に加減し得るのである。水の温度は、患者の皮膚の反應程度によるもので、營養よく皮膚反應の十分なるものには冷水程反應が良く現はれ攝氏十度前後にて差支ない、之に反して營養不良皮膚反應の悪しきときには攝氏二十度乃至三十度とす。冬季には之れよりも水温を高くし、且つ室温を温め置くものとす。ブリースニッツ巻法を施すに當り豫め身體を温め置くは有利である。

濕布を取り包むには、通常フランネルを用ゆ。フランネルは氣孔に富み、透氣性が大であるから濕布の水分が蒸發が出来る。而して譬令濕潤しても透氣性を保有し、又吸水が遅いから濕傳導を増すことが少い利益があるから、之に適する。フランネルは濕布の全幅以上に身體を包むべきであるが、フランネルの下に一枚の乾燥ガーゼを敷いてフランネルの皮膚刺戟を避くべきである。二三時間にて乾燥するを以て、その都度交換し、材料は十分に清潔にして日光乾燥を行ふものとす。

油紙護膜布を以て被ふときには、水分の蒸氣が全く妨げられ、水分は再び凝結し、皮膚を浸漬して不快の感を生じ、やがては濕疹を生ずるから、長い巻法には不適當である。

持続性冷巻法及び温巻法は、濕布を冷水又は温水に浸して短時間頻回交換して、常に同一温度に續けるのであるが、その手續の煩しき爲めに、冰囊又は蛇管を患部に置いて、冷却又は加温することもある。

此療法は急性炎衝に續く腫脹、熱感、疼痛の甚しい場合に有効であり、又打撲、外傷にも用ひられ、心動鎮靜の目的にも適用せらる。氷嚢を使用するのを見るに、直接皮上に接著するものが多いが、必ず、ガーゼ二三枚を重ねたる上に安置するが良いのである。蛇管には種々のものがあるが、餘り必要がないから省略して置かう。

湯治中慎並養生の心得

- 一 憤怒すべからず腹立する時は其氣上逆して悪しく度重る時は吐血鼻血の憂あり慎べし
- 一 色欲かたく慎べし湯にて五臓を轉倒し血脈をくるはし筋骨ゆるみ陽氣薄くなるもの也その上房に入時は五體をもみ心氣を亂し精を漏す故に病癒ざるのみならず必大なる害あり堅慎べし
- 一 悪き魚肉青物等喰へからず、夫身の養生は食物にあり況や病人に於てをや大酒すべからず夫酒は心氣を亂し血脈を動搖すその上入湯にて氣根薄くなりし時多く吞は病いさざるのみか反て害なり堅慎べし
- 一 著の儘にて晝寢すべからずふとんをしき上よりも著ていぬべし然ざる時は湯にて表薄き故邪氣入やすし
- 一 湯の中にて身をもづくべからず身を動搖すれば汗つひゆること多くして液を亡し氣根薄くなる也然ル時は體勞れて湯の驗も遅者也
- 一 體勞多者は先服藥して肉を強し其上氣力を調ふ藥を持行日々服用して入湯すべし兩用かくべからず凡て温泉は濕氣を去り氣血を順すを能とし虚損を補ふこと能はずと知べし

湯治指南車

海氣候と海水浴

我が國に海水浴が行れたことは古くからあつた、大穴幸通命が稻羽の八上姫を獲んとして同國の海濱を行き給へる時、毛を剝がれて痛ましげなる兎に逢ひ、此海水に浴し、風通しよき丘に臥せば傷は直ちに治すべしと命じ玉へる古き傳説がある。

尾張名所圖繪に「知多郡大野村海音寺西北の方に當る海濱は岩石多くありて暑氣の頃は、遠近諸人は海濱に出で湖水に浴ししかして又巖上に憩ひなど、終日に幾度も出沒すること五日さする時は、あらゆる諸病を治す、之を世に大野の鹽湯治と云ふ」。今から約七百八十餘年前、即ち應保年中、後鳥羽上皇の和歌所寄人鴨の長明此地に遊び海水浴を試み、

生魚の御あへもよし酒もよし大野のゆあみ日かすかさねむ

又琵琶彦が

あがこまの赤はだかにて荒磯の石にはら匍ひしは湯浴かな

と詠じた。今日の海水浴日光浴を試みたのである。



(會圖所名張尾)浴水海野大郡多知國張尾

日本に於て海水浴の効果を醫學的に唱導したのは後藤新平氏である、氏は明治十四年愛知縣々令國貞廉平氏と愛知縣に海水場の設備をしたのが、近代海水浴の嚆矢である。明治十八年八月松本順氏は大磯に海水浴を設けた。

歐洲で海水浴を醫療法として試みしは百年を出でない。一七九四年、ハイリーゲンダムに海水浴場を設け、暖めた海水に入湯し、それより二三年を経て直接海水に漬つたのである。英國にも漸くその頃から海水浴が行れ來つた、爾來海水浴は世界到る處に旺んに行はれて來た。海水浴を一つの治療法と見做すべきか、或は單に身體強壯の補助法たるべきか、將た又一種の流行であるかに就いて學者間に討議せられたのである。今日に於ても嚴格に海水浴効果の意義を論議するのは困難なる問題であるが、海水浴

圖三十六第

は生理的作用を發揮し且つ治療的效果を現すものである。然しそれは單に海水のみに由來するものではない。

海濱に居住すると、既に海濱氣候の影響を蒙るものである。海水浴には氣候因子の作用を受くことが可なり著大なること他に類がないのである。海水浴場は空氣が清淨であり、浴者は眞裸體であるから、太陽、風、放射線、波濤の作用がそれらに加つて共に働くからである。

海濱に近い海水は鹽類を含有するが、就中食鹽の多きは當然なるが、その他に土類アルカリのクロロイド及びその硫化物を含有す。大洋にて三・五%の鹽分を有し、入海などでは之よりも多少少い。海水にも放射能物を含有してゐると謂れてゐるが、頗る少量で實用價値以下である。海水温度は攝氏十七度から十八度である、冬季はこれより二―四度低い、但し海岸の形勢、河口の關係、風の方向によつて可なり影響を蒙るものである。

海氣候及びその生理的效果に就いては、最近その研究が深く進んで闡明する所が多い。高山では雪からの反射で紫外線の放射が強いと同様、海面からも放射は相當量であつて海面に浪立ちても餘りに變りがない。紫外線の内で波長320―390mμの短紫外線、所謂ドルノ線、一名ラエ線と云ふものは人體に效目の多い光線である。

ラ線と云ふ名稱は、佝僂病(Rachitis)に奏效多き波長であると共に、埃及の日の大神Raから採つたものである。ドルノ線は瑞西のドルノ(Dorno)に於て日光の波長を測定し、各波長の生物學作用を研究したるに、此波長のものが最優秀なるを知り得たから、ドルノ線と命じたのである。平地及び餘り高からぬ山地にては、空氣中に浮遊する微粒の塵埃が多く、それに水蒸氣が凝集する爲に、紫外線の大半は吸収せらるゝものである。日光浴を採ると謂つ

ても平地又は低地にては長き波長のものであるから、皮膚を刺戟する効果を齎らせない。海上の空氣は之に反し塵埃を含まざるから短波長のもものが大量に透徹す。漁夫が銅の如き光つた肌色は正しく紫外線の賜である。皮膚に色素が着いて赭黒となるのみでなく、物質代謝も進むが、筋肉運動から來たグリコーゲン、脂肪の酸化作用の増進のみでなく、細胞成形質に影響するものあれば終局組織乃至臓器の更新再生を營む。海濱に吹く風、海水の動は、恰も紫外線と同様に刺戟となる故に、海氣候は刺戟氣候と謂ひ得る次第である。海氣候の特記すべき點は虚弱體質の補正に有效である。皮膚に及した作用は免疫及び内分泌に影響してエジプティラキシーを作る。更に赤色素を増加し、血球数は殖え色素指數も多くなり、呼吸は深く且つ徐々に營まれ、胃酸産出及び酵素が増し蠕動は進み、礦物性物質代謝の内でも石灰及び燐の代謝が良くなる。

海濱に於ては沃度が重要な意義を有し、空氣中にも、又昆布類に含有し、不知々々の間に身體に影響する所がある。海氣候はまづ第一に皮膚に働いて、二次的に體内に及ぶものである。それには裸體であらねばならぬ。衣服を纏ひ居室に閉ぢ込んで問題はならない。更に又海濱に在りては風がさなき、氣温の程良き氣候作用である。體質の如何によつて海氣候の刺戟の受くる状況を異にするから、餘り健康ならざる者は、醫師と相談し注意せねばならぬ。蓋し海氣候は刺戟氣候であるが、その場所の地理的關係によつて強度を異にするものである。更に謂ふまでもなく、海岸の風光、地形、植物の茂生等より受くる影響も無言裡に大なるものである。

海水浴も理學的療法の範圍に屬するもので海水浴は寒冷刺戟であると共に、他面には波動よりの抵抗、水泳など

の動は所謂抵抗體育訓練で、終局、催温の作用である、海水浴は食鹽浴と同様であるが、氣候の影響の至大なることを忘れてはならない。海水浴の効果は大人には餘りに的確の成績を求め得られざるも、都會の虚弱兒童が規則正しい海水浴を行へば、體温の調整となり、毛細管反應も強壯となる。體質の弱き程、海水浴後に於ける體温の一時低下は強く、更に常温に復するまでに時間を要するものである。此低下温度は海水浴を持續して居る間に、兒童の多數に於て著しく調整が早く出來、且つ同時に毛細管の反應も強くなる。この成績を見んと欲せば皮上に氷塊一片を置いて充血の出現する時間を測れば良い。

海濱生活又は海水浴を行ふものは、虚弱兒童及び寒冒に罹り易き素質のものである。それには長期の滞在を要するが、やがては健康強壯の更生を得て、食慾は増進し、偏食の弊は消えて、家庭に光明を齎すことになる。外科的結核も海氣候による奏效は偉大のものである。肺結核患者の轉地療養として海濱療養は至適であるが、進行性のものには暫らくその機會を待つべきである。唯小兒の結核には何れの場合たりとも良好である。富山縣の奇病たる尙儂病患兒が海岸に轉移すれば著效を得。大人には海水浴は氣晴しである。若し歸宅後、却て疲勞を覺え、催眠し易くなる場合は、明らかに海水浴が適せざる實證である、豫め醫師と相談せねばならない。

冬期海岸に轉地するも、至極良好なことである。我が國には未だ海濱に療養所が少いから、嚴格に日常生活を監督すること出來ない。故に家庭が此點に注意して、兒童愛に誤まれぬやう注意せねばならぬ。而して一地方の氣候に馴致するよりも、時々場所を換へて新しい刺戟を受くべきやう手段を採る必要がある。

附
錄

圖四十六第



(藏所者著)附番泉温國諸

特效の温泉

胃腸病

關東地方——門川。堂ヶ島。木賀。熱海。伊東。伊豆長岡。修善寺。熱川。峯。下賀茂。新島。黒山。松ノ湯。八鹽。磯部。鹿澤。香草。四万。草津。上牧。白根。那須。甲子。青堀。成東。

東北地方——遠刈田。秋保。酸ヶ湯。大湯。蛾々。須川。鶯宿。夏油。鳴子。瀬見。元車。新車。河原湯。最上。今神。赤湯。東根。銀山。矢立。鷹ノ湯。碓ヶ關。湯岱。中ノ澤。沼尻。八町。玉梨。瀬波。湯ノ濱。

中部地方——下部。靈泉寺。鹿教湯。山田。澁。關。廣田。萬座。増富。西山。大藪。岩崎山ラヂウム。東光寺。田野。嵯峨鹽。上高地。中ノ湯。下呂。平湯。宇奈月。蘆原。片山津。岩間。中宮。白山。和倉。大牧。鳥越。稻荷。合田。立山。須川(富山)。蒲原。梶山。

近畿地方——寶塚。六甲苦樂園ラヂウム。鳥谷。鹽田。有馬。湯村(兵庫)。龍神。川湯(和歌山)。白濱。湯崎。菰江。

中國地方——湯原。俵山。東郷。松崎。温泉津。川棚。小原(島根)。道後。

特效の温泉

九州地方—熊之川。船小屋。立願寺。小天。山鹿。戸下。湯ノ原。七里田。長湯。湯ノ平。由布院。別府。筋湯。鶯來ヶ迫。龜川。柴石。鐵輪。觀海寺。京町。霧島。吉田。指宿。日當山。人吉。折橋。妙見。安樂。山之湯。ラムネ。蓮太郎。金桁。湯ノ兒。阿久根。副田。

北海道地方—湯ノ川。根崎。紅葉谷。層雲峽。弟子屈。定山溪。松山。洞爺湖。鶴ノ湯(北海道)。島ノ下。雨宮。黒田。途別。

朝鮮地方—儒城。東萊。海雲臺。達泉。龍岡。金剛山。朱乙。
臺灣地方—烏來。四重溪。

神經痛 リウマチスミス

關東地方—門川。廣河原。塔ノ澤。伊豆山。熱海。伊東。畑毛。修善寺。嵯峨澤。古奈。船原。湯ヶ島。峯。河内。蓮臺寺。下賀茂。名栗。黒山。松ノ湯。美女谷。八鹽。梨木。伊香保。四萬。上牧。水上。越後湯澤。大湯。鬼怒川。川治。板室。白河ラヂウム。常磐湯本。白鳥。高崎。青堀。

東北地方—飯坂。穴原。天王寺。鎌先。土湯。桑折。遠刈田。作並。青根。秋保。花巻。志度平。大澤。鉛。臺。鶯宿。酸ヶ湯。大湯。湯本(岩手)。湯川(岩手)。川渡。栗駒五湯。小野川。上ノ山。赤湯。羽根澤。稻住。日景。矢立。鶴ノ湯。大鱒。湯ノ澤(秋田)。湯岱。藏館。東山。西ノ澤。早戸。温海。出湯。

中部地方—湯ノ山。丸子ラヂウム。岡部。鹿教湯。別所。戸倉。上山田。湯田中。澁。安代。上林。地獄谷。發哺。熊の湯。野澤。燕。松之山。三島ノ湯。増富。甘利山。岩崎山ラヂウム。鶴。海州。上諏訪。御母家。葛。中ノ湯。上高地。下呂。鬼岩。宇奈月。山代。蘆原。カルクス。粟津。吹上。高熊。春日。頭川。

近畿地方—雄琴。笠置。鮎川。武田尾。城崎。白崎。呂崎。椿。湯川(和歌山)。勝浦。
中國地方—眞賀。湯原。湯田。長門湯本。俵山。岩井。濱村。三朝。關金。湯町。玉造。海湖。有福。五郷谿。九州地方—原鶴。武雄。嬉野。熊之川。古湯。雲仙。小濱。杖立。道ノ尾。宮原。平島。長湯。由布院。別府。龜川。鐵輪。京町。霧島。指宿。妙見。安樂。濱之市。湯之尾。赤瀬。湯出。湯田。湯之元。

北海道地方—湯ノ川。根崎。熊ノ湯(北海道)。駒ノ湯。山越。蘭越新見。仁世古。川湯(仁伏)。雄阿寒。黒田。途別。吐鯤保澤。樂磨。湯ノ澤(樺太)。
朝鮮地方—温陽。儒城。東萊。陽德。金剛山。朱乙。
臺灣地方—關子嶺。四重溪。
滿洲地方—五龍骨。湯崗子。熊岳城。

婦人病

關東地方—箱根湯本。底倉。吉奈。船原。土肥。熱川。蓮臺寺。下賀茂。新島。網代。八鹽。伊香保。川中。松ノ島。湯宿。析尾又。那須。高野。
東北地方—飯坂。土湯。青根。花巻。淺蟲。蛾々。定義。國見。馬門。恐山。下風呂。湯本(岩手)。鳴子。元

車。新車。鬼首。栗駒五湯。五色。新五色。赤湯。銀山。蒸ノ湯。横向。鷺倉。東山。熱鹽。温海。湯ノ濱。村杉。

中部地方——山田。蕪。松之山。寺泊。海洲。白狐。平湯。小川。カルクス。瀬領。大牧。北山。

近畿地方——有馬。湯ノ峰。椿。周參見。

中國地方——湯ノ郷。眞賀。鳥取。東郷。松崎。新東郷。三朝。湯村(島根)。志學。

九州地方——嬉野。湯ノ平。別府。人吉。山之湯。金桁。副田(入來)。

北海道地方——鹿部。弟子屈。定山溪。洞爺湖。登別。

朝鮮地方——海雲臺。

子寶の湯

關東地方——吉奈。伊香保。栃尾又。湯西川。

東北地方——五色。新五色。熱鹽。

皮膚病

關東地方——湯河原。門川。木賀。仙石原。蘆ノ湯。強羅。熱海。近藤ノ湯。畑毛。船原。蓮臺寺。湯ヶ野。湯ノ澤。霧積。花敷。老神。川原湯。大塚。川中。松ノ島。穴原。越後湯澤。藪塚。川治。日光湯元。

鹽原。那須。袋田。常磐湯本。

東北地方——信夫高湯。青根。花巻。志戸平。鉛。西鉛。臺。繫。網張。酸ヶ湯。恐山。湯瀬。下風呂。鳴子。

栗駒五湯。小玉川。姥湯。藏王高湯。銀山。日景。田澤湖。嶽。湯ノ澤(青森)。嶽(青森)。湯段。

岩代熱海。東山。磐梯。八町。玉梨。日中。瀬波。温海。湯澤。新山。

中部地方——梅ヶ島。志太。別所。田澤。湯田中。萬座。澁。野澤。赤倉(新潟)。池ノ平。妙高。岩室。緒立。

親湯。淺間。中房。白狐。櫻堂。下呂。平湯。片山津。粟津。吹上。立山。山田(富山)。新保。瀬

領。舟見。蓮華。蒲原。

近畿地方——湯村(兵庫)。湯ノ峯。勝浦。菰江。

中國地方——奥津。湯田。長門湯本。山野。鬼ヶ嶽。湯野。鳥取。濱村。新東郷。湯ノ川。川棚。湯村(島根)。

小原(島根)。鹽ノ江。圓行寺。

九州地方——原鶴。雲仙。小天。垂玉。湯ノ平。由布院。堀田。寒ノ地獄。鐵輪。霧崎。吉田。折橋。安樂。濱

之市。栗之嶽。鹽浸。湯之元(市來)。伊作。

北海道地方——川湯(仁伏)。登別。雄阿寒。温根湯。ボンユ。谷地頭。濁川。山田(北海道)。若松。和琴。鶴ノ湯

(北海道)。川上。吐鯤保澤。

朝鮮地方——温陽。

臺灣地方——北投。草山。烏來。

滿洲地方——熊岳城。

腦神經病

關東地方—箱根湯本。堂ヶ島。宮ノ下。木賀。小涌谷。底倉。鶴卷。小瀬。鹿澤。法師。白根。川俣。甲子。母畑。

東北地方—青根。定義。酸ヶ湯。眞湯。蔦。藥研。夏油。小野川。新高湯。藏王高湯。下内澤。川上。

九州地方—垂玉。朽木。寒ノ地獄。柴石。

北海道地方—銀婚湯。湯本(北海道)。鹽狩。豐富。吹上。カルルス。

臺灣地方—關子嶺。

脊髓病

關東地方—小涌谷。土肥。小瀧。花敷。草津。

中部地方—妙高。池ノ平。山梨瀧。山代。

外傷 火傷 打撲

關東地方—門川。湯河原。畑毛。下賀茂。湯ヶ野。鳩ノ湯。湯ノ澤。霧積。星野。川古。川場。鬼怒川。川治。湯西川。日光湯元。鹽原。母畑。

東北地方—鎌先。青根。酸ヶ湯。眞湯。鶯宿。中山。小玉川。新五色。肘折。湯ノ澤(秋田)。嶽(青森)。湯段。

岩代熱海。川上。湯野上。中ノ川。早戸。日中。箱澤。村杉。

中部地方—下部。戸倉。上山田。杵掛。緒立。上諏訪。下諏訪。辰ノ口。山田(富山)。舟見。小谷。笹倉。

近畿地方—木津。有馬。

中國地方—奥津。俵山。皆生。溫泉津。有福。

九州地方—武藏。杖立。朽木。長湯。日當山。日奈久。湯出。

北海道地方—留ノ湯。二股ラチオ。層雲峽。ボンユ。

朝鮮地方—信川。三泉。陽徳。朱乙。玉里。

痔疾

關東地方—湯河原。廣河原。蘆ノ湯。伊豆山。伊豆長岡。河内。鳩ノ湯。湯宿。湯島。上牧。鉾塚。湯西川。鹽原。高野。

東北地方—飯坂。作並。淺蟲。鳴子。瀬見。鬼首。肘折。板留。東山。蘆ノ牧。小谷(福島)。湯澤(新潟)。

中部地方—川浦。鹽山。小齋。御母家。淺間。片山津。城端ラチウム。稻荷。深谷。

近畿地方—寶塚。龍神。川湯(和歌山)。周參見。吉岡。

九州地方—濱之市。鹽浸。

北海道地方—層雲峽。

樺太地方—梅香。

滿洲地方——五龍背。湯崗子。

呼吸器病

關東地方——蘆ノ湯。花敷。香草。草津。日光湯元。鹽原。那須。
 東北地方——須川(岩手)。新高湯。滑川。秋田。中ノ川(喘息)。高瀬(新潟)。
 中部地方——戸倉(喘息)。上山田(喘息)。田澤。關。萬座。増富。小齋。瀧。親湯。淺間。中房。和倉。
 中國地方——湯ノ郷。志學。道後。
 九州地方——河内(熊本)。内牧。
 北海道地方——登別。

中風 動脈硬化症

關東地方——湯島(群馬)。越後湯澤。板室。湯岐。
 東北地方——鎌先。小原。定義。淺蟲。葛。中山。高玉。湯田川。
 中部地方——鹿教湯。中野。御母家。山代。白山。城端ラヂウム。
 九州地方——霧島。
 朝鮮地方——溫陽。

腺病

關東地方——門川。仙石原。強羅。姥子。熱海。土肥。八鹽。星野。花敷。川原湯。大湯。那須。
 東北地方——恐山。藥研。最上。大鰐。
 中部地方——湯田中。發哺。上林。地獄谷。赤倉(新潟)。瀬領。
 近畿地方——白濱。湯崎。
 九州地方——日奈久。
 北海道地方——鹿部。豊富。
 樺太地方——川上。
 朝鮮地方——海雲臺。

新陳代謝病

關東地方——湯河原。門川。船原。吉奈。下賀茂。上牧。水上。飯坂。東山。
 東北地方——瀨見。元車。新車。鬼首。赤倉(山形)。上ノ山。小玉川。白布高湯。天童。板留。芦ノ牧。小谷
 (福島)。湯田川。鷹ノ巣。高瀬(新潟)。
 中部地方——靈泉寺。上林。湯村(山梨)。白狐。山中。和倉。湯泊。倉見。新宮。生地。
 近畿地方——城崎。

中國地方—三朝。關金。
 九州地方—小濱。山鹿。長湯。別府。湯ノ原。七里田。ラムネ。湯浦。
 朝鮮地方—達泉。
 臺灣地方—北投。草山。

脚氣

關東地方—黑山。川場。湯岐。
 東北地方—秋保。湯瀬。湯川(岩手)。川渡。稻佳。大鱈。湯ノ澤。温湯。湯野上。出湯。
 中部地方—角間。大藪。山中。湯谷。
 近畿地方—鹽野。宮乃。
 九州地方—入船。湯兒。
 北海道地方—熊ノ湯(北海道)。昆布(成田)。紅葉谷。
 朝鮮地方—烏來。

眼病

關東地方—姥子。湯西川。
 東北地方—青根。秋保。馬門。下内澤。横向。鷺倉。

九州地方—長湯。湯之元(市來)。

性病瘡毒

關東地方—底倉。老神。草津。穴原。湯西川。那須。
 東北地方—信夫高湯。朝日。中ノ澤。沼尻。磐梯。
 中部地方—杓掛。鹽山。蓮華。
 中國地方—湯町。玉造。
 九州地方—由布院。明礬。堀田。寒ノ地獄。鷺來ヶ迫。觀海寺。指宿(掛宿)。
 北海道地方—湯本。(北海道)。山田(北海道)。
 樺太地方—梅香。
 朝鮮地方—朱乙。
 臺灣地方—北投。草山。

子供の疳

東北地方—藏王高湯。

色を白くする治浴場

特效の温泉

一三八四	神龜元年	吉奈	靜岡	同	僧	泰澄
一三八四		中宮	石川			
一三八四		海湖(牛尾)	島根			
一三八四		山之内	長野			
一三八四		鹽之	香川			
一三八五	神龜二年	山代	石川			
一三八五		草津	群馬			
一三八五		蓮台	靜岡			
一三八五		栃又	新潟			
一三八五		大湯	同			
一三八九	天平元年	東山	福島			
一三八九		山中	石川			
一三八九		武雄	佐賀			
一三九三	天平五年	湯村(三澤)	島根			
一三九九	天平十一年	箱根湯本	神奈川			
一四〇四	天平十六年	木津	京都			
一四一七	天平寶字元年	熱海	靜岡			
一四二七	神護景雲元年	日光湯本	栃木			

一三四二	天武在位	谷津(石田)	靜岡			
一三四五	天武在位	湯河原	神奈川			
一三四六	朱鳥元年	天谷	福井			
一三六八	和銅元年	綱張	岩手			
一三七二	和銅五年	湯田	山形			
一三七七	養老元年	養老	福島			
一三七七		大神	同			
一三七七		大川	岐阜			
一三七七		湯浦	石川			
一三七七		草津	群馬			
一三七七		辰口	石川			
一三七七		白山(市瀬)	同			
一三七七		關金	鳥取			
一三七八	養老二年	栗津	石川			
一三八〇	養老四年	湯崎(湯島)	三重			
一三八一	養老五年	鷹城	兵庫			

温泉知識

一五二八	天安二年	岩	鳥取	藤原冬文
一五一九	貞觀元年	鷺ノ湯	岡山	
一五二〇	貞觀二年	在ノ内(湯川)	和歌山	
一五二〇	貞觀二年	栗津	石川	
一五二〇	貞觀二年	湯郷	岡山	仁曾丹
一五六〇	昌泰三年	川渡(大湯)	宮城	
一五六一	延喜元年	宮	岐	
一五八八	延長六年	鹿	群	貞保親王
一五九三	承平三年	繫	岩手	
一六〇七	天曆元年	野	長	
一六〇七	天曆元年	淺	同	太飼半右衛門
一六一四	天曆八年	霧	群	碓米貞光
一六二八	安和元年	多田(平野)	兵	源滿仲
一六五〇	正暦元年	武雄	佐	
一六七二	長和元年	田深(姥ヶ湯)	長	坂田公時の母
一六八五	萬壽二年	吉岡(上の温泉)	鳥取	葦岡長者判部某
一七〇五	寛徳二年	湯	群	阿部貞任

温泉發見年代記

一七二三	天喜元年	湯野(上の湯)	山形	那須三郎宗重
一七一九	康平二年	那須(鹽澤)	栃	
一七二六	治暦二年	木	福	
一七四一	永保元年	吉	静	
一七四七	寛治元年	赤	山	源義家
一七九五	保延元年	上	茨	
一八〇〇	保延六年	山	長	村農清介
一八〇二	康治元年	那須(三斗小屋)	栃	生島某
一八一五	久壽二年	野澤(寺澤)	長	一齋夫
一八一六	保元元年	山	熊	宇野親治
一八二四	長寛二年	三朝(枕株湯)	鳥	源義朝の臣大久保左馬之祐
一八三三	承安三年	赤倉	新	僧親鸞
一八四二	壽永元年	籠	兵	平氏の臣紀人鷲尾重助
一八四五	壽永四年	新宮(薬師野)	石	
一八四七	文治三年	瀬見(薬研)	山	武藏坊辨慶
一八五〇	建久元年	小原(古湯)	宮	常陸坊海尊
一八五〇		藏館(丑の湯)	青	唐僧圓智
一八五〇		下	同	

一八五〇	建久元年	有馬(新湯)	兵庫	大友能直
一八五一	建久二年			
一八五二	建久三年			
一八五四	建久五年	河原湯	同馬	
一八五九	正治九年	川浦	梨分	
一八八五	嘉祥元年	新宮(藥師野)	石川	源義經の臣岡山幸光平右衛門
一九〇〇	仁治元年	湯海	宮城	
一九二五	文永二年	下田	岐阜	
一九四六	弘安九年	草津	馬形	
一九七二	正和元年	白布高湯	山形	出羽の人佐藤宗純 米野與總右衛門
一九七三	正和二年	赤河	同京	
一九九一	元弘元年	小賀内		
一九九五	建武二年	村杉	新山	足利の陪臣荒木正高
一九九六	延元元年	日奈久	熊本	濱田某
二〇〇六	正平元年	松之山	新湯	一樵夫
二〇〇七	正平二年	湯村(野湯)	山梨	僧大學

二〇〇七	正平二十三年	湯村(島)	山梨	僧大學
二〇二八	天授元年	熱鹽	和歌山	南朝の臣菟治郎平豐明 熱鹽山寺開基の僧某
二〇三五	天授五年	谷川	群馬	
二〇四四	元中元年	湯澤	新湯	小瀬川徳右衛門
二〇四七	元中四年	臺山	富山	
二〇五〇	元中七年	祖山	熊山	大寧寺三世の主僧定庵
二〇六九	應永十六年	日奈久(本湯)	日本	一農夫
二〇八七	應永三十四年	深川	山口	
二〇八八	正長元年	鎌先	宮城	
二一〇〇	永享十二年	車湯	同馬	
二一〇九	寶徳元年	川古	群馬	
二一一〇	寶徳二年	上ノ湯	奈良	
二一一八	長祿二年	士の山(鶴脛)	山形	僧月秀
二二二八	應仁二年	塔の	神奈川	
二二二九	文明元年	大神	茨城	
二二二九		大湯(上の湯)	秋田	
二二二九		角間(本湯)	長野	僧蓮如

二二二〇	元龜元年	勝見	鳥取
二二一七	弘治三年	黒平	梨島
二二一七	弘治二年	西窪	福森
二二〇八	天文十七年	下風呂(大湯)	青森
二二〇六	天文十五年	青根(大湯)	宮城
二二〇一	天文十年	桃原	阜城
二一九七	天文六年	姥湯	山形
二一九五	天文四年	遠刈田(東の湯)	宮城
二一九四	天文三年	湯岐	福島
二一九二	天文元年	熊谷(元湯)	佐賀
二一八八	享祿元年	青根	長野
二一八一	大永元年	寶塚(武庫山)	兵庫
二一六四	永正元年	湯田	茨城
二一六一	文明三年	黒神	山口
二一六四	文明三年	湯の目	秋田
二一三一	文明三年	黒神	鹿兒島

本村の一姫
佐藤掃部
平倉の城主飯森春盛
播磨の人某
板谷驛の人大内藏
美濃の人奥山治命
佐藤彦惣佐藤喜右衛門外二名
馬場信房
穴戸豊后

二二五八	慶長三年	塔根の湯	同奈川
二二五八	慶長三年	箱根の湯	神奈川
二二五六	慶長元年	湯元	宮城
二二五六	慶長元年	銀山	山形
二二五六	慶長元年	荒湯	宮城
二二五三		大鰯	青森
二二五三		堀田	大分
二二五三		別役	高知
二二五三		平湯	同知
二二五三		蒲田	岐阜
二二五三		和倉	石川
二二五三		深宿	群馬
二二五三		營地	岩手
二二五二	元龜三年	赤湯(丹波湯)	愛知
二二五二	元龜三年	碓ヶ關	山形
二二五〇		休石	青森
二二五〇		碓ヶ關	福島

主殿助
郷士安藤守春
農民某
武田信玄の將山縣昌景
領主津輕爲信
塔ヶ峯阿彌陀寺開基の僧單誓

二二〇八	慶安元年	市	鹿兒島	前田利明
二二一〇	慶安三年	武雄	佐賀	村民治郎右衛門
二二一二	承應元年	片山	石川	
二二一八	萬治元年	筋湯	大分	
二二一九	萬治二年	湯岐	福岡	
二二一九	萬治二年	高瀬	新潟	
二二二一	寬文元年	明礬	福島	村醫某
二二二一	寬文元年	飯野	愛知	
二二二二	寬文元年	温泉	長崎	
二二二四	寬文四年	鹽河	群馬	
二二二四	寬文四年	栃木	熊本	藩主細川氏の家臣某
二二二五	寬文五年	湯田	岩手	村民瀧澤久助
二二二九	寬文九年	關山 <small>(燕)</small>	新潟	
二二三〇	寬文十年	湯田	岩手	
二二三三	延寶元年	臺森	宮城	芝田某
二二三三	延寶元年	湯川	青森	
二三四一	天和元年	湯澤	新潟	
二三四一	天和元年	鹽田	兵庫	

二二六〇	慶長五年	甲子 <small>(湯神)</small>	福島	菊地將監
二二六一	慶長六年	遠刈田 <small>(上の湯)</small>	宮城	大沼勘十郎
二二六二	慶長七年	信失 <small>(王子熱湯)</small>	福島	
二二六五	慶長十年	高湯 <small>(瀧の湯)</small>	神奈川	
二二七五	元和元年	上高	宮城	
二二七五	元和元年	葛湯	茨城	
二二七五	元和元年	小川	長野	野日村の農西澤九郎七
二二七七	元和三年	駒湯	富山	僧秀惠
二二八四	寬永元年	荒湯	宮城	蒼澤村小野寺與惣右衛門
二二八四	寬永元年	明礬	鹿島	
二二八四	寬永元年	梶山	新潟	
二二八四	寬永元年	伊東	鹿島	
二二九二	寬永九年	湯澤	福島	横谷善十郎
二二九八	寬永十五年	鰻湯 <small>(鳴子)</small>	宮城	
二三〇〇	寬永十七年	多田 <small>(平野)</small>	兵庫	
二三〇一	寬永十八年	武田	同島	武田尾直藏
二三〇六	正保三年	磐梯	福島	

温泉知識

二三四二	天和二年	鹽原(中の湯)	栃木	
二三四八	元禄元年	袋田	茨城	
二三四八		柳本	奈良	村民炭焼某
二三四八		串野	大分	
二三四九	元禄二年	志戸	岩手	
二三五〇	元禄三年	黒平	山梨	御岳神社詞官内藤嘉芳
二三五四	元禄七年	窪平	岐阜	一農夫
二三五七	元禄十年	川中	群馬	一農夫
二三五九	元禄十二年	湯島	同	
二三六一	元禄十四年	白骨	同	
二三六二	元禄十五年	鶯の	長野	
二三六五	寶永二年	老狐	同	
二三六七	寶永四年	白狐	同	天猷寺の僧大雲
二三七二	正徳元年	湯川(下の湯)	岐阜	
二三七三	正徳三年	杉井	大分	
二三七四	正徳四年	岩室	同	

温泉發見年代記

二二七六	享保元年	山田	茨城	
二二七六		仙石	神奈川	
二二七六		吹上	富山	
二二七七	享保二年	湯の澤	富山	宮野四郎兵衛
二二八〇	享保五年	青根(新湯)	北秋田郡	
二二八〇		垂玉	宮城	
二二八一	享保六年	赤倉	山形	
二二八二	享保七年	赤湯(甘湯)	同	長左衛門
二二八三	享保八年	川治	栃木	
二二八四	享保九年	湯段	青森	
二二八五	享保十年	矢田	新潟	
二二八七	享保十二年	瀬領	石川	
二二九六	元文元年	肘折(石抱)	山形	村醫村井松謙
二二九六		壁湯	大分	
二二九七	元文二年	田上	新潟	
二四〇〇	元文五年	遠刈田(東の湯)	宮城	
二四〇三	寛保三年	滑川	山形	大澤驛の人齋藤盛房
二四〇四	延享元年	鶯の湯	福島	

温泉知識

二四五三	寛政五年	夏油(瀬目)	岩手	高橋嘉吉
二四五五	寛政七年	水山(眞鏡泉)	同	宮田某 槻山某
二四五七	寛政九年	瀧	秋田	
二四六一	享和元年	成	茨城	
二四六四	文化元年	湯	山形	
二四六四		荳	福島	
二四六四		地	熊本	
二四六四		櫻	秋田	
二四六四		砂	茨城	
二四六四		田	熊本	
二四六四		寒	大分	
二四六五	文化二年	鶴	中津又村	村民 兒玉七左衛門
二四六五		新	宮城栗原村	村民 佐々木善藏
二四六六	文化三年	椿	和歌山	村民 佐五兵衛
二四六九	文化六年	肘折(疝氣)	山形	
二四七二	文化九年	飯坂(赤川端)	秋田	
二四七二		小谷(熱の湯)	長野	

温泉發見年代記

二四七五	文化十二年	瀧	福島	
二四七七	文化十四年	針	同	
二四七八	文政元年	如法寺	新湯	
二四七八		熊	和歌山	
二四七八		殿	鹿兒島	鹿兒島市民黒葛原五郎右衛門
二四七八		木	同	村民 新村新三
二四七八		下	宮城	村民 三浦新助
二四七九	文政二年	定	同	一農夫
二四八〇	文政三年	湯	長野	村民 三浦幸四郎
二四八〇	文政三年	中	長野	百瀬某
二四八〇	文政三年	平	鹿兒島	村民 有馬新兵衛
二四八一	文政四年	中	山形	
二四八一		中	福島	
二四八一		片	熊本	
二四八二	文政五年	壺	石川	
二四八三	文政六年	船	鹿兒島	
二四八五	文政八年	小	福島	

二四八六	文政九年	山横澤	新湯(東の鑛泉)	鹿島湯
二四八七	文政十年	二月	熊本	同
二四八八	文政十一年	石田	宮崎	山崎
二四八八	文政十二年	連太郎(高原)	宮崎	山崎
二四八九	天保元年	辰湯	宮崎	山崎
二四九〇		車湯	宮崎	山崎
二四九〇		間水	鹿島	宮崎
二四九〇		大前	青森	鹿島
二四九〇		道部	新湯	鹿島
二四九〇		關屋	長湯	鹿島
二四九〇		湖東(明治湯)	岡野	鹿島
二四九一	天保二年	湯川(中の湯)	鹿島	鹿島
二四九一	天保三年	手洗	鹿島	鹿島
二四九二	天保五年	山野目	鹿島	鹿島
二四九四	天保六年	新湯(西の鑛泉)	鹿島	鹿島

向花村の人坂元周八郎

村民中野金兵衛

二四九六	天保七年	米丸	同	
二四九八	天保九年	鹽原(大湖)	栃木	
二四九八		河内	靜岡	
二四九八		關平	鹿島	
二五〇〇	天保十一年	鹿の湯	福島	
二五〇一	天保十二年	川の浦	兵庫	
二五〇二	天保十三年	蟹の湯	秋田	
二五〇二		薬師湯	新潟	
二五〇二		奴留湯	熊本	
二五〇三	天保十四年	葛尾	同	
二五〇四	弘化元年	伊作(鎌田湯)	鹿島	
二五〇四		寺田	宮崎	
二五〇六	弘化三年	立願寺	熊本	
二五〇六	弘化四年	安久	宮崎	
二五〇七		水山(泉鑛泉)	岩手	
二五〇七		畑下	和歌山	
二五〇七		峨々	宮崎	
二五〇八	嘉永元年	平戸小澤	秋田	

上久徳村士馬渡善之丞の妻女菊子
關谷村の農庄之助

本村の士原田丑太郎

太田元泰
高田の人高橋孫左衛門

村民宮田某 五串村民鈴木長左衛門

獵師寶澤の獵六
村民甚助

温泉發見年代記

二五三〇	明治三年	諏訪山	兵庫	英國人カール
二五三〇	明治四年	名尾	宮崎	
二五三〇	明治五年	登別	北海道	
二五三一		金地山	青森	
二五三一		小倉山	新潟	
二五三一		磐梯新鑛泉	福島	
二五三一		地切	同	
二五三一		長堀	千葉	
二五三一		稲籠	京都	
二五三一		引地	鳥取	
二五三一		川合	島根	
二五三一		天河内	同	
二五三二		湯の谷	熊本	村民下野仲右衛門
二五三二		湯野原	鹿兒島	
二五三三	明治六年	山田	福岡	
二五三三		難波	同	
二五三三		有馬	兵庫	本村戸長梶木源治郎

温泉知識

二五二三	文久三年	田妻	山形	
二五二三		有留	廣島	
二五二三		日奈久(安西清)	熊本	
二五二三		日奈久(松本)	同	
二五二四	元治元年	大赤川	青森	
二五二四		敷根	鹿兒島	村民小牧甚左衛門
二五二四		辨慶	北海道	村民トント
二五二五	慶應元年	白鳥	宮崎	
二五二七	慶應三年	積翠寺(要害)	山梨	
二五二八	明治元年	山寺	山形	
二五二八		小津	茨城	
二五二八		蕪生	新潟	
二五二八		太平	鹿兒島	
二五二九	明治二年	大瀧(藤原)	栃木	
二五二九		飛越	兵庫	
二五二九		大作(松崎湯)	宮崎	
二五二九		伊谷	鹿兒島	
二五二九		定山	北海道	美泉定山

二五三九	明治十二年	上	天
二五三八		堺	半
二五三八		御	中
二五三八		野	帖
二五三八		大	佐
二五三八		六	岩
二五三八		築	淵
二五三八		三	谷
二五三八		漆	田
二五三八		艸	寺
二五三七	明治十一年	嵐	
二五三七		阿	
二五三七		宮	
二五三七		論	
二五三六	明治十年	帖	
二五三六		中	
二五三六		半	
二五三六		天	

天龍寺の僧某
 村民川崎林太郎

二五三三	明治六年	大	鹿
二五三四	明治七年	猿	岡
二五三四		三	山
二五三四		長	鹿
二五三五	明治八年	高	兒
二五三五		鍋	鳥
二五三五		館	形
二五三五		廳	山
二五三五		諸	鹿
二五三五		吉	兒
二五三五		牛	本
二五三五		新	川
二五三五		總	湯
二五三六	明治九年	石	
二五三六		有	
二五三六		東	
二五三六		春	

大豆村 田中平四郎

温泉知識

二五三九	明治十二年	手向	山形
二五三九		成澤	福島
二五三九		依柳	新潟
二五三九		五味の	和歌山
二五三九		鶴木の	熊本
二五三九		金山花	鹿島
二五三九		福山宮の	同
二五三九		福山宮の	同
二五三九		盤川の	北海道
二五四〇	明治十三年	下原	青森
二五四〇		赤石	同
二五四〇		上館	新潟
二五四〇		刈羽	同
二五四〇		楠田	福岡
二五四〇	明治十四年	湯の	秋田
二五四三	明治十六年	池ヶ野	愛媛
二五四三		ハリキ	同
二五四三		武陵	同

本村の市民坂元甚兵衛
市民川畑清右衛門

温泉發見年代記

二五四四	明治十七年	菅原	福井	長島永峰
二五四四		定山溪(中の湯)	北海道	
二五四五	明治十八年	千倉	千葉	
二五四九	明治二十二年	西鉛	岩手	
二五四九		伊作(株式湯)	鹿島	
二五五三	明治二十六年	戸倉	長野	
二五六〇	明治三十三年	皆生	鳥取	一漁夫
二五六一	明治三十四年	上林	長野	
二五六四	明治三十七年	瀬波	新潟	
二五六四		鳥取	鳥取	
二五六五	明治三十八年	川渡(不二の湯)	宮城	
二五六六	明治三十九年	カールス	北海道	
二五六七	明治四十年	長岡	静岡県	
二五七〇	明治四十三年	東根	山形	
二五七三	大正二年	武雄(新湯)	佐賀	
二五七三		伊作(大正湯)	鹿島	
二五七四	大正三年	赤湯(新温泉)	山形	須藤瀧藏
二五七七	大正六年	月岡	新潟	

二五八六	二五八四	二五八一	二五八一
昭和元年	大正十三年	大正十年	大正十年
峯	松	鮎	田
		川	泊
	崎	同	新
静	鳥	和	湯
岡	取	歌	山
		田	
		中瀬三兒	日本石油株式会社
		戸田知	田邊町大字上屋敷新地遊廓組合
		田島吉兵衛	

延喜式内温泉神社
 下野國十一座
 那須郡三座 温泉神社
 陸奥國一百座
 玉造郡三座 温泉神社 荒雄河神社 温泉石神社
 磐城郡七座 温泉神社
 出雲國一百八十七座
 意字郡廿八座 玉作湯國神社
 因幡國
 巨濃郡 御湯神社
 伊豫國
 温泉郡四座 湯神社
 攝津國
 有馬郡三座 湯泉神社

讀み難き温泉地名

鶯宿(アウシユク)	岩手	巖 (イハホ)	長野	小日向(チビナタ)	群馬
秋保(アキウ)	宮城	飯坂(イヒサカ)	福島	御母家(オホケ)	長野
熱海(アタミ)	静岡・福島	指宿(イブスキ)	鹿児島	温陽(オンヤウ)	朝鮮
熱川(アタカハ)	静岡	祭之尾(エノオ)	鹿児島	温根(オンネ)	北海道
熱鹽(アツシホ)	福島	鹽山(エンザン)	山梨	カ	鳥取
温海(アツミ)	山形	オ	山梨	皆生(カイケ)	山梨
芦原(アハラ)	福井	小天(チアマ)	熊本	海州(カイシュウ)	山梨
有福(アリフク)	兵庫	老神(オイカミ)	熊本	河内(カウチ)	静岡
安代(アンダイ)	長野	奥津(オキツ)	群馬	鹿教湯(カケユ)	長野
イ		小谷(オタリ)	岡山	鹿澤(カザラ)	群馬
生地(イクザ)	富山	小谷(オヤ)	長野	甲子(カシ)	福島
稻住(イナツミ)	秋田	小濱(オハマ)	福島	上牧(カミモク)	群馬
			長崎	川渡(カハタビ)	宮城

川合田(カハヒタ) 富山
 川古(カハフル) 群馬
 川治(カハヂ) 栃木
 鐵輪(カンナワ) 大分
 上林(カンバヤシ) 長野
 木津(キツ) 京都
 鬼怒川(キヌガハ) 栃木
 城崎(キノサキ) 兵庫
 夏油(ゲトウ) 岩手
 下呂(ゲロ) 岐阜
 河頭(コガシラ) 鹿兒島
 桑折(コナリ) 福島
 小齊(コサイ) 長野
 越瀬(コロセ) 和歌山

草山(サウザン) 臺灣
 砂石(サハラシ) 鹿兒島
 澤渡(サハタリ) 福島
 四萬(シマン) 群馬
 下部(シモベ) 山梨
 朱乙(シユオウ) 朝鮮
 入之波(シホノハ) 長野
 親湯(シンユ) 長野
 酸ヶ湯(スガユ) 青森
 周參見(スサミ) 和歌山
 關金(セキカネ) 鳥取
 瀬見(セミ) 山形
 道後(ダウゴ) 愛媛
 湯岡子(タウカウシ) 滿洲

武田尾(タケダナ) 兵庫
 嶽(ダケ) 福島
 垂玉(タルタマ) 熊本
 定義(ヂョウギ) 宮城
 杖立(ツエダテ) 熊本
 弟子屈(テシカガ) 北海道
 栃木(トチノキ) 熊本
 栃尾又(トチナマタ) 新潟
 土肥(トヒ) 静岡
 遠刈田(トホカツタ) 宮城
 途別(トベツ) 北海道
 ナ 七澤(ナラサハ) 神奈川
 鳴子(ナルゴ) 宮城

畑下戸(ハタオリ) 栃木
 祖母谷(ババダニ) 富山
 ヒ 日景(ヒカゲ) 秋田
 東根(ヒガシネ) 山形
 日奈久(ヒナク) 熊本
 日當山(ヒナタヤマ) 鹿兒島
 白狐(ビヤッコ) 岐阜
 フ 福渡戸(フクロタ) 栃木
 蒸ノ湯(フケノユ) 秋田
 ヘ 別所(ベツシヨ) 長野
 別府(ベツフ) 大分
 ホ 北投(ホクト) 臺灣
 發哺(ホツポ) 長野

戸畑(ホバタ) 福島
 マ 馬門(マカド) 青森
 眞賀(マガ) 岡山
 眞奈深(マナザハ) 群馬
 ミ 三朝(ミササ) 鳥取
 水上(ミナカミ) 群馬
 神漣(ミタキ) 宮城
 宮原(ミヤバル) 熊本
 メ 妙高(メウカウ) 新潟
 モ 門川(モガハ) 神奈川
 ヤ 茂原(モバラ) 千葉
 ヨ 八鹽(ヤシオ) 群馬

湯宿(ユシユク) 群馬
 湯岐(ユジマタ) 福島
 温泉津(ユノツ) 島根
 湯檜曾(ユビソ) 越後
 山布院(ユアイン) 大分
 湯涌(ユウク) 石川

温泉典籍現在書目録 (昭和十二年現在)

前編

醫學新論	緒方正清撰	一册	大正五年
浮世風呂	式亭三馬	九册	文化六年刊行
遠西假泉説	二洲散人著	一册	安政六年自筆
温泉小説	服部範忠著	一册	享保九年自筆本
温泉考	原雙桂著	一册	寛政六年版
温泉論	拓植龍洲著	三册	文化十三年刊行
温泉一得抄	淵修禮	一册	文政十三年寫本

温泉記浴法拔萃(道後)

温泉浴法辨

温泉一件嘆願書

温泉辨(古訓醫傳 第二十五卷)

温泉紀

温泉志

温泉摘

温泉起源老略

温泉論

温泉めぐり

温泉春秋

温泉の研究

温泉畫集

温泉と疾病

温泉療法

温泉展覽會記録

温泉療養指針

山崎法橋著

宇津木昆豪著

香川太沖

林貞裕著

(諸本)

竹中邦香著

太田雄寧譯

田山花袋著

赤川菊村編

小川琢治編

中澤弘光畫

酒井谷平著

藤浪剛一著

文部省科學博物館編

高安慎一著

一册

一通

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

一册

文化十五年寫本

天保五年刊行

元治元年

刊本

自筆

寫本

刊行年不明

明治初年寫本

明治十一年刊行

大正七年活版

大正十年活版

大正十四年活版

大正十五年活版

昭和三年活版

昭和三年活版

昭和五年活版

温泉知識

温泉日本	國民新聞社編	一冊	昭和五年活版
温泉療養の栞	板澤庄五郎著	一冊	昭和五年活版
温泉研究	日本温泉協會發行	一冊	昭和六年活版
温泉案内	鐵道省編纂	一冊	昭和六年活版
温泉と健康	西川義方著	一著	昭和七年活版
温泉と其掘鑿	佐伯謙吉著	一冊	昭和八年活版
温泉の栞	日本温泉協會	一冊	昭和八年活版
温泉療養	酒井谷平著	一冊	昭和九年活版
温泉大鑑	日本温泉協會編	一冊	昭和十年活版
温泉の物理	福富孝治著	一冊	昭和十一年活版
各地ニ於ケル登山ニ適スル山嶽並海水浴場ニ關スル概況	内務省衛生局纂	一冊	大正十一年
教訓洗湯論	爪生政和著	一冊	明治年間木版
灌漑水論	古宇田知常著	一冊	文化八年寫本
灌漑水伊呂波歌	古宇田知常著	一冊	天保八年刊行

火山温泉ノ記	日賀田守蔭撰(原本帝國圖書館ニ在リ)	一冊	寫本
温泉氣候療法論	大塚陸太郎	一冊	明治三十七年
光線療法	大里俊吾	一冊	昭和六年
賢愚湊錢湯新話	山東京傳	三冊	享和二年刊行
國立公園	愛場秋文著	一冊	昭和三年活版
諸國名物往來	千形仲道書	一冊	文政七年刊行
諸國温泉試說	宇田川榕菴	一冊	文政十一年白筆本
諸國温泉風景	日賀田守蔭著(原本帝國圖書館ニ在リ)	二冊	寫本
温泉遊覽記	服部應賀著	一冊	明治十五年刊行
獸穴鹽湯考附穢多	伴信近著	一冊	嘉永二年寫本
自然療法	原榮編	一冊	大正二年活版
支那温泉	山崎正治著	一冊	活版
水志	關田滄海著	一冊	明治十二年活版

温泉典籍現在書目録

温泉知識

水治療法

田原鎮雄著

一册

五五八

大正十四年活版

西洋鑛泉譜

宇田川榕菴著

一册

自筆

洗湯手引草

内務省

一册

嘉永五年刊行

全國温泉鑛泉ニ關スル調査

内務省衛生局

一册

大正十二年活版

全國鑛泉調査

内務省衛生局

一册

昭和十一年活版

湯治土産

潜龍軒蒼麟

五册

安永三年刊本

湯治心得

長崎醫學校

一册

明治二年寫本

東西沐浴史話

藤浪剛一著

一册

昭和九年活版

日本温泉獨案内

ヘルツ著

一册

明治十二年活版

日本温泉考

桑田知明譯

一册

明治十三年活版

日本鑛泉論

ベルツ著

一册

明治十三年活版

日本鑛泉論

内務省衛生局編

三册

明治十九年活版

日本氣候療養地論

太田季次著

一册

明治三十三年

日本轉地療養法

長尾藻城著

一册

明治四十三年

日本鑛泉分析表

内務省衛生試驗所

一册

明治四十五年

日本近海ノ潮汐

海軍水路部

一册

大正三年活版

日本氣候學

中川源三郎著

一册

大正九年活版

日光療法

前田友助著

一册

大正十五年活版

日本鑛泉分析表

内務省衛生試驗所

一册

昭和四年活版

日本温泉案内

大日本雄辯會講談社編

二册

昭和五年活版

日光療法

正木不如丘著

一册

昭和五年活版

日本之水

三島海雲著

一册

昭和九年活版

放射性物質ト放射線

木下季吉著

一册

大正二年活版

放射能概論

愛知敬一著

一册

大正九年活版

濕布效能記

石塚蛟上著

一册

天保三年刊行

本朝温泉雜稿

三宅意安

二册

明和四年寫本

本邦温泉論考

石川成章著

一册

昭和三年活版

ボケット温泉案内

日本温泉協會編

一册

昭和十一年活版

温泉典籍現在書目録

五五九

温泉知識

伊香保湯治土産
 伊香保紀行
 伊豆土産
 伊豫國道後温泉記
 磯部繁昌記
 飯坂湯野温泉史
 い津の松山
 夷曲堂出湯の道振
 江沼郡山代紀行
 英菴鑛泉考(後越樂泉)
 温泉名勝志
 温泉遊草
 温泉記(庄内湯温泉)並浴湯心得
 温泉旅行日記

大槻文彦 一册 明治十五年刊行
 筆者不詳 一册 稿本
 寶雪菴草字著 二册 嘉永四年刊行
 乾巖叟 一册 寶曆十年寫本
 山本有所編 一册 明治十九年發行
 大平萬平編 一册 明治廿九年活版
 中野吉平編 一册 大正十三年活版
 梁武亭武島編 一册 寬政六年自筆本
 夷曲堂主人 一册 天保八年刊行
 藤原文知著(原本帝國圖書館ニ在リ) 一册 文政十六年寫本
 小村英菴著 一册 文政十三年自筆本
 後藤梨春 一册 寬延四年刊行
 草山妙子 一册 寬文八年刊行
 官松撰 一册 寬政四年刊行
 文化十二年寫本

温泉碑文解(湯崎温泉碑文)

温泉日記
 温泉雜詠(武雄)
 温泉奇效記(草津)
 上州温泉物語
 温泉日記(滑川温泉)
 温泉紀行雞助集
 大磯海水浴並温泉日記

仁井田好古 一册 天保十三年刊
 不言齋蘆舟 一册 嘉永二年稿本
 筆者不詳 一册 嘉永二年稿本
 光泉寺藏枚 一册 不明刊行
 筆者不詳 一册 刊本
 玉井伊兵衛著 一册 明治四年自筆
 矢掛弓雄 一册 明治八年刊行
 明治四十四年自筆本

か

甲子温泉山中圖解
 奥州温泉養生記
 鎌先温泉由來記
 浴所温泉遊集
 鹿兒島縣温泉誌

霞月堂英翁(原本岩瀬文庫ニアリ) 一册 元文元年寫本
 石川茂實編 一册 寬政八年刊本
 三宅竹隱編 一册 明治廿四年刊行
 鹿兒島縣衛生課 一册 明治廿七年活版
 大正十五年

き

老菊山湯山手引
 城崎温泉紀行

尹降著 一册 明和八年刊行
 安永四年寫本

温泉典籍現在書目録

朝鮮地質調査要報第二報(東萊温泉)

警務總監部衛生課編

一册

葛温泉帖附冬籠帖

大可桂月

二册

大正三年活版
大正十二年活版
昭和四年石版

東京近國名所温泉里程案内圖

關義三郎著

一折

明治十九年銅版

豆相遍記

呼友編

一册

弘化四年自筆本

豆山臥游詩

邨岡良弼著

一册

明治四十一年活版

道後温泉記

著者不詳

二册

寬永五年刊行

道後温泉浴湯記

眞柳玄昌編

一册

正享二年寫本

道後温泉由來記

撰者不詳

一册

刊本

道後湯之記

筆者不明

一册

正德二年刊行

塔澤紀行

藤本松庵著

一册

享保七年刊行

塔澤温泉紀行

跡部良隆

一册

寬政十一年折本

那須山湯泉八景詩文

明人心越禪師書

一折

寬政十一年折本

那須温泉記

濱野吉長著

一册

安政四年自筆

野州那須温泉由來記

人見綱爲藏板

一册

刊本

夏はずれ(鹽原温泉紀勝)

南城漫史著

一册

明治廿二年活版

名勝中山温泉案内記

加藤壽編

一册

明治廿六年活版

日本第一蒸湯温泉略縁記(豊後鐵輪温泉錄記)

筆者不詳

一册

刊本

日光山温泉記

筆者不詳

一册

刊行年不詳

下野國湯本温泉繁昌記

篠原虎三郎編

一册

明治十四年活版

野澤温泉案内記

山崎法橋

一册

天保五年刊行

濃州養老泉碑銘

吳趙程赤城書

一折

拓本

登別温泉記事

筆者不詳

一册

明治十七八年頃活版

箱根温泉道之記

淺草栖隱長慶輯

一册

寶曆十四年刊行

箱根塔澤温泉記

鈴木重卿撰

一册

寬政九年刊行

箱根七湯架

弄花山人編

十册

文化八年寫本

箱根往來

十返舎一九編

一册

文政五年刊行

温泉知識

温泉箱根草
 箱根七湯温泉圖會
 箱根熱海温泉紀行
 箱根之日記
 箱根温泉湯治の件
 箱根七湯誌
 箱根七湯附修善寺記
 箱根 根 艸
 箱根温泉道案内
 箱根温泉誌
 箱根 哈倫阿爾山

瀧亭鯉水丈
 爲永春水
 弄花山人編
 田中文翁記
 結城光昭著
 方寸舎匪石
 問宮永好撰(原本帝國圖書館ニ在リ)
 守 拙 記
 福住正兄編
 橋爪貫一編
 清水市次郎編
 滿洲醫科大學編

十二册
 一册
 一册
 一册
 三册
 一册
 二册
 一册
 五集
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册

弘化二年刊行
 弘化四年刊行
 嘉永三年自筆本
 嘉永六年自筆
 安政六年自筆
 文久元年寫本
 自 筆
 明治十二年刊本
 明治十年刊本
 明治二十年銅版
 昭和十年活版
 元祿十一年寫本
 明治廿八年活版
 明治廿九年活版

信濃國出浦郡別所七久里温泉竝名所略記

別府温泉及入浴上ノ注意
 棒鼻之盲目蛇
 北海道鑛泉誌
 宮城縣温泉小誌
 宮城縣鑛泉誌
 名山香山記
 武藏温泉誌
 山路の月
 山中日記
 加賀温泉餘香
 山中鑛泉試驗成績表

佐藤 巖著
 岡島 坦著
 出口坊徑久述
 北海道廳警察部
 宮城縣警察部
 衛生課纂
 木暮武大夫編
 松尾富太郎編
 喜多村寬慶記
 清癡老人著
 大藏延平編
 折 本

一册
 一册
 一册
 二册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册

刊行不詳
 大正六年活版
 大正十一年活版
 稿 本
 大正八年活版
 明治十九年刊本
 昭和二年活版
 大正六年活版
 明治卅一年活版
 寬延四年刊行
 自 筆
 明治二年活版
 明治廿六年刊行

温泉知識

山鹿温泉誌
 山の内温泉
 八咫鏡泉誌
 湯山聯句
 湯澤紀行
 湯山土産
 湯の山紀行
 湯原入湯路次記
 湯原温泉記
 湯谷十日記附酬夢編
 湯の安賀
 湯の栢物語
 湯あみの日記
 湯ノ花温泉記
 遊馬山温泉記
 遊温泉山記

ゆ

著者不詳
 鳥失義行編
 清水白川編

一册
 一册
 一册

大正九年稿本
 大正十五年活版
 明治廿一年石版

宜竹周麟
 煙霞病客
 源義方編
 白明房撰
 三宅裕守述
 江口元治編
 廣瀬典著
 著者不詳
 福住正兄
 森田千壽著
 藤松種十著
 高翰林書
 鎮國山人著

二册
 二册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册
 一册

寛永七年刊行
 貞享元年刊行
 正徳五年刊行
 元文二年刊行
 天保六年自筆
 天保十二年寫本
 寫本
 寫本
 明治十七年活版
 明治二十七年刊
 明治廿五年活版
 寶曆十三年拓本
 文政三年稿本

游豆小志

よ

養老美泉辨
 浴陸奥温泉記
 浴那須温泉記
 浴遊記
 吉水温泉效用辨
 療痾日記
 州龍神温泉略記
 臨温泉銘
 靈泉記
 わきゆ
 和倉温泉考

わ

り

松崎謙堂著

一册

謙堂文鈔抜刷

田中大秀述
 水戸藩士某
 酒井喜照著(原文高木利太氏藏)
 矢掛弓雄撰
 明石博高述
 鈴木重時著
 著者不詳
 堀正修撰
 大方齋無外編
 三野昌平著

一册
 三册
 一册
 二册
 二册
 一册
 一册
 一册
 一册
 二册
 二册

文化十二年刊行
 文政十年寫本
 弘化四年寫本
 明治廿二年自筆
 明治六年刊行
 稿本
 刊本
 拓本
 寛延二年刊行
 安政六年刊本
 明治十九年活版

圖內泉源方地北東

